

博麗靈夢と
幸福論



博麗靈夢と幸福論

i 0 - 0 i

Q

本書を博麗神社へ奉納したいのですが、どこへいったらいいでしょうか？

A

己の信じている博麗を描写しなさい。
かみさまはどこにでもいるのですから。

零 有史以前のこと

博麗靈夢は幸福だ。

巫女の幸福が、幻想郷の存続と同義である。だから八雲紫は幸福に在り続ける巫女のために、世界を作り替えてきた。

花を捧げ、供物を奉じ。

いつも笑っているようにと。

巫女が泣けば、その要因を取り除き。

巫女が怒れば、その原因を排除して。

巫女が死ねば、その死因を除去して。

そのようにして幻想郷の大安は作られてきた。

春の日には花を見た。夏の日には滝で遊んだ。秋の日には紅葉を狩り、冬の日にはたき火を囲んだ。そのどれもが美しく、心地よいものだった。彼女は彼女にいつまでも寄り添っていた。ある時にはすぐそばで、ある時にはそうと気取られないほどの距離を保ち、ある時には夢心地に隙間を通じて見て、何時如何なる時でも傍らにいたのである。

幼き頃も、少女となっても、美しき巫女に育っても、あるいは熟し、年老いても、世界は常に靈夢のためにあった。死すれば、それはまた繰り返された。造作もないことだった。世界の隙間をくぐり抜ければ、平行世界への移動もまた難なく行うことが出来たのである。人間の死はそれほど魅力的であり、死の幻想の発現を可能にする。ネクロファンタジア 気高い巫女であればそれはなおのこと力を秘めていた。

すなわち巫女の死んだ世界から、巫女のまだ生まれて間もない世界へ旅するだけのことである。

世界一つまるごと作り替えてしまうことなど、造作もないことだった。否、それは作り替えるのではない。自らの観測域をすげ替えるだけのことである。変わっていたのは世界ではなく、観測者——八雲紫の位相である。

平行世界。

並行宇宙。

『もしも』の世界間を無限に巡航する、一人きりの小舟が、八雲紫である。無限の宇宙を旅する孤独な浮舟は、その胸の中に多くの愛を抱いて、今日もまた相対状態の再解釈を行っている。目の乾きに耐えかねるほどに瞬きを減らし、視線を長く注げば注ぐほど、博麗靈夢の可能性は否応にも増した。いくつもある分岐がまた分岐を呼び、

博麗靈夢の幸せの形は無限に変化し続けた。そのうちのどのような世界の中にも、博麗靈夢は幸福に存在した。そうでない世界を、八雲紫は見なくなかったのである。

好いた人には、幸福であつて欲しい。

八雲紫が持ちうる、ただ一つの存在理由である。

いつ如何なる理由で、靈夢を好いたのか、紫は知らない。ただ、生まれついた瞬間から、生きることを余儀なくされたのと同様に、八雲紫が存在することそれ自体が、博麗靈夢を幸福にする為の動作に他ならなかった。

自らが関与する以外の形であつたとしても、博麗靈夢が幸福でありさえすれば、それで良かった。誰かが博麗靈夢を笑わせるのなら、それで十分だった。

されど、禍福はあざなえる縄のごとし。世界を巡航する船であろうとも、その嵐を左右することは出来なかった。ただ激しい風と雨のような運命に翻弄されるばかりであつた。

誰もが必ず一度は失敗をした。

笑わせようとすれば、泣くことになった。

安らげようとすれば、怒ることになった。

眠らせようとすれば、死ぬことになった。

そのどれかを回避しようとして、世界を巡り、また別の失敗をした。八雲紫は博麗霊夢の不幸を取り除こうとして、何度も何度もしくじることになったのである。苦悩の深きことは幾ばくであつたらうか、凡人の与^{あずか}り知らぬところである。

いちどき、八雲紫はあえて不幸を取り除かずにいることがあつた。それは不幸のわずかな種であつたので、見逃していたのである。そのとき初めて、博麗霊夢は幸福を自ら手に入れた。

八雲紫は落胆した。もう一度もう一度と思い、挑戦するごとに運命は凄惨さを増していった。ひとたびはもう不可能なのではないかと思われた。だが、そのうちの千回に一度、あるいは百回に一度、博麗霊夢の幸福は成就した。如何なる徒勞であるかと八雲紫さえ弱音を吐くこともあつた。

しかし幸福な博麗霊夢を閲覧することは、幸福な八雲紫をもまた生み出すことに気がついた。

そうして、八雲紫は決心したのである。

博麗霊夢の幸福も不幸も、怒りも悲しみもその死すらも、愛すべき彼女自身であるということを受け入れると。

そうして、八雲紫は自らに強^しいたのである。

どのような霊夢ですら、愛すべきであることを。

如何なる人妖も、誰かを幸せにすることなど出来はしない。自ら幸福になることが出来るというだけのことである。自らは自ら以上のものを不幸にも幸福にもしない。ただ、己の欲するところ以上のものにはなり得ない。

そして、八雲紫は自らの幸福を望んだ。自らの幸福がすなわち幻想郷の安寧に、然らば博麗霊夢の幸福へと結びつけられることを知ったからである。

かくして、八雲紫は幸福になった。

どのような霊夢であっても、愛することが出来る為である。

以下の記述は、どのように二人が幸福であったかを記した記録である。有り触れた幸福もあり、有り難い^{がた}幸福もある。無数の世界の中でかけがえなく善なるものもあり、善悪の公理に照らせば唾棄すべきものもある。その何れであるとも、存在することそれ自体が幸福である。

リポーター
報告者は最後に繰り返す。

どのような状態であろうともそれが二人の幸福だった。

そのように幸福が定義された為である。

弐

微笑^{わら}
い話



博麗靈夢は微笑していた。

社に蝶^{やしろ}。二色に分かれて、緩く飛ぶ。禍々しき色彩は蛾にも似るが、昼に飛ぶからやはり蝶なのであろう、闇色に近い紫の一羽とごく薄い紅色の一羽が揺らめいて、枸橘の葉に留まった。二羽で一对であるかのように、仲むつまじく寄り添っている。一滴の朝露を分け合うようにして、二羽は静かに羽を休めている。

空模様は快晴。はばかるところのない晴天が青々と広がっていた。縁側で待ちぼうけをするにうってつけの日である。

誰を待つ訳でもないが、博麗靈夢はぼんやりと縁側に腰掛けていた。朝餉^{あさげ}はどうに食ってしまった。傍らに緑茶。出がらしであるが、熱ければ食後にはそれで十分。

そも、靈夢は苦いお茶が好きではない。ただ腹の中にぬくもりが充満するその感覚だけが欲しくて茶を飲んでいる。時々白湯^{さゆ}でも良いのではないかと思うが、友人諸氏に貧乏をからかわれて以来、かろうじて色のついていて程度の薄いお茶にしている。

靈夢は味や匂いの濃いものはあまり好かない。曲がりなりにも神職であるからには無意識のうちに穢れを厭うているのだと月人に仲間のように言われたことがあるが、

単に嗜好の問題だとはねのけた。

肉好きの亡霊がおり、和食好きの魔法使いがいる。年越しにかけそばを食う吸血鬼さえいる。巫女が清らかでいなければならぬなどという常識はこの幻想郷では投げ捨てるべきである。

この朝はまだわずかに肌寒い。境内の掃除は後でもいいかと怠け心が顔を出す。そしてそれを咎めるようなものはここにはいない。

境内の掃除は生業なりわいではない。したところで誰が来るといふ訳でもない。ここは人里の間では妖怪神社などと不名誉なあだ名をつけられる程度に、胡散臭い場所うさんくさである。そして来るもの来るもの人外であるからして、多少の雑然を気にするということもない。

外を見やれば陽光はまばゆくすつかり春を過ぎて初夏にさしかからんばかりである。今はまだ良いが、じきに暑くなるだろう。境内を見事に花びらで飾り立てていた桜もおおかた散り、花殻はながらをわずかに残すばかりであった。代わりに追ってきた若葉くまざとに枝を奪われて今、境内は瑞々しい新緑に覆われている。博麗神社の裏山には若い熊笹くまざとが生い茂り、先だつては香ばしく煎った葉を茶にして美味しくいただいたものである。

四季折々の喜びが博麗神社には自ずと集つどう。霊夢が何をせずとも富は来る。金銭に

代えられぬ山の豊かさや川の深さが巫女の生活を支えている。購^{あがな}った花を飾らなくとも、蝶は自ら迷い来て目の前の風景を一枚の絵に変えてしまう。

金子^{きんす}がなくとも米と酒と喜びの方から歩いてくる。昨日もそうだった。

不意に霊夢は思い出して唇をゆるませてしまう。昨晚の宴会のことだ。いつもは喧しいばかりの魔法使いがひととき馬鹿でたいそう愉快だった。

酔いも回りにまわった、宴もたけなわのことだ。不意に立ち上がった魔理沙^{まりさ}が杯を掲げてこう言い放ったのである。

「おおい、みんなっ！ 聞いてくれ」

八畳の大部屋を二つつなげた大宴会場のどこに魔理沙とアリスがいたのか、場所まで覚えている。縁側のところに二人でしっぽり座っていたと思ったのに、いきなり片方が立ち上がったのだ。

「私はアリスと結婚するぜ！」

隣に座っていた、他称…魔理沙の嫁が飲んでいた焼酎を思い切り霧状にして噴いた。「ななな何言ってるの、あんた」

顔を真っ赤にして、問い詰めようとするアリスに、白黒の魔法使いはあっけらかん

と答えた。

「私が決めた。おまえが嫁だ」

答えになつてないじゃないの。訳がわかんないわよ、などと狼狽しているのは、アリス一人で、後のいい加減な連中は「いいぞー！ やれー」だの「結婚式には呼んでねー」だの「式あげるまでは女同士でも避妊しなさいよー」だの無責任なことばかり言つていた。酔っぱらいなのである。

霊夢も腹を抱えて爆笑していると、不意に八雲紫が言った。例のように胡散臭い笑みを浮かべながら。

「それは良い考え。屹度^{きつと}これから先は、弾幕ごつこの代わりに結婚ごつこが流行^{はや}りますわ」

「流行らすな」

とんでもないことを言い出す紫に霊夢は思わず口を挟む。

「ごっこじゃないぜ、本気だぜ」

魔理沙は大変不満そうだったが、

「いいからあんたはもう黙りなさい！」

嫁^{アリス}に一喝され、袖を引っ張られてしぶしぶ座ることになった。

それから先は皆で魔理沙とアリスを質問攻めするばかりだった。曰く、どこでデートしたのかだとか、最初の告白はどちらからだったとか、もう一緒に住んでるのかだとか、ちゃんと避妊しなさいよだとか。ちなみに避妊避妊言っていたのは主に幽々子であり、その隣で正座していた従者が顔を赤くしてうつむいていたのもまた特筆すべき事項である。後で存分にかかってやろうと思ったのに、そういえば魔理沙たちだけで盛り上がって終わってしまった。

そのときの魔理沙とアリスの反応が実にかいかい甲斐があつて、思い出すだけでいやついでしまう。

何でも赤裸々に話す魔理沙に、思わず恥ずかしさのあまりぐーばんちで殴りかかりそうになるアリスを後ろから止めたり、その勢いで脇腹くすぐったり、転げ回るアリスの荒い息に、思わず生唾を飲み込んだ魔理沙を二人まとめてからかったり飛びかかったり抱きかかえてかいぐりかいぐりしたり。とりあえずどさくさに紛れて脱がせようとする奴もいたし、んなこたあどうでもいいから、お前らさっさとちゅーしろおとお、などとはやし立てる奴もいた。

みんな暇で、そして馬鹿なのであった。

と。

「霊夢つてば、何、にやにやしてんだあ？」

「ひゃああ！」

横からのぞき込まれて、思わず声を上げた。萃香^{すいか}だった。宴会の後飲み過ぎて神社に泊まった小鬼は、さっきまで寝ていたはずだ。昨日の深酒がこたえて寝坊かと思いきや、いつの間にやら起き出してきたらしい。

「な、何でもないわよ。考え事、考え事！」

「ふうん、ずいぶん楽しそうな考え事だね」

ふにふにとほっぺたをつつかれる。その手をすげなく振り払ったものの、どうにもばつが悪く、視線をそらしてしまう。

「ところで、あのね、霊夢」

「朝ご飯なら台所にお味噌汁残しておいたわよ」

遅く起きてきたのだから自分で暖めるぐらいはして欲しいものだ。そう言いかけた霊夢に向けて、小鬼はそつとかぶりを振った。

「違うよ。あのね、前から言いたかったんだけどね」

萃香はもじもじと指をつきあわせている。わずかに頬を染めて、目を潤ませている。

霊夢の背筋^{せすじ}に嫌な予感が走った。逃げ出すべきだと巫女の本能が訴えかける。

そしてそれは的中する。逃げ出す暇^{いとま}もないうちに。

か細い声で、萃香は言った。

「……わたしたち、いつ結婚しようか」

どうやら流行っている、らしい。

紫の予想通りに幻想郷は動いてしまっているようだった。あの胡散臭い笑みが脳裏に浮かんで、霊夢はこめかみにわずかな疼痛を覚えた。

ふと思いついて人里へ出てみると、やはり降ってわいたような結婚ブームでもちきりであった。

写真館は予約で一ヶ月先まで埋まっていたし、ブーケや飾る切り花の準備で花屋はてんやわんやだった。里の掲示板には「結婚行進曲はプリズムリバーにお任せ！ 新郎新婦も老若男女もアゲ☆アゲ！」だの「引き出物は香霖堂で！ 誰にも負けない個性的な贈り物を！」などという張り紙が目立っていた。

霊夢が寺子屋へ行ってみると、流行に乗じた和菓子屋が奇妙な新製品を売り出して、慧音^{けいね}に怒られていた。

「まったく、どうしてまんじゅうを積み重ねてウェディングケーキを作ろうなんて発想になるんだ。キングスライムじゃないんだから、八個そろえたところで合体などはないぞ」

がみがみと説教する女教師の前で、いい年をしたちよびひげの旦那が、つい先頃結納を交わした唐傘お化けの嫁と一緒に正座してうつむいていた。

寺子屋の授業はお休みのようだ。子供達は皆家業を手伝いに帰っている。田植え休みならぬ、結婚休み、か。

庭に咲く菜の花が日の光を浴びて実に鮮やかであつた。霊夢は縁側にぶらぶらと足を垂らして待ち惚けだ。

「和菓子なら和菓子としての使い道、たとえば引き出物の紅白まんじゅうなどがあるだろう。それ以上を、などというのは些か強欲が過ぎるんじゃないか。とにかくこれは没収だ！」

かつての教え子にこんこんと説教している慧音の右手薬指にも控えめなダイヤモンドがきらりと光る。給料三ヶ月分の婚約指輪なのであつた。

ちなみに赤いもんぺを着た未来の嫁は竹藪へ筍掘りに行くと行って先刻出かけていった。おそらく他人の説教を聞きたくなかつたのだらう。

霊夢だって別段聞きたくはないのだが、これが終わらなければこちらの用件も切り出せない。相手が妖怪だけであれば遠慮無く割り込むところだが、人間相手ではそこまで強引なことは出来ない。

長い長い説教の間、霊夢は縁側でひなたぼっこしていた。深い朗々とした慧音先生の声は実に良い子守歌だった。うとうとしかけたところで、小さく肩を叩かれる。ひげ面の和菓子屋が申し訳なさそうに、最中もなかの紙包みを握らせてくれた。どうやら説教は終わったらしい。待たせたお詫びのようだ。

霊夢は何も言わずに、もう片方の手を出した。和菓子屋の眉毛がくたんと下がる。呉くれるものなら、餡あんごと寄越せ。

博麗神社の掟である（ただし今作った）。

話し始めるより前に緑茶を入れてもらった。最中の皮が上あごに張り付いて死んじやったら困るじゃない、と言ったら慧音は苦笑して上等の玉露を入れてくれた。礼儀をわきまえている。

「みんなが一斉に結婚するなんて、どう考えても異変よね。結婚異変と言っていいと思うわ」

そうは言いながらも霊夢自身、いつも起こる異変とは違うと感じていた。これまで解決してきた異変なら適当に飛んでいって相手をぶっ飛ばせば大概のことは解決するのだが、今回に限ってはぶっ飛ばすべき相手が見つからないのだ。故に、結婚ブームが最も盛り上がっている人里に来了。

「いや、これが異変な訳がないだろう。いくつか問題はあるにせよ、些細な問題だ。皆が幸せになれるこれを解決することなど、私は許さないぞ」

いつも冷静な慧音が珍しく声を荒らげている。霊夢は小さく唇をとがらして、不平をあらわにした。

「だっておかしいじゃない。みんないきなり結婚とか」

「いいや、みんな少しずつ大人になっていくのだろうよ」

そう言われるとぐうの音も出ない。自分だけが子供であるかのように感じて、何と
はなしに居心地の悪い気持ちになる。

それをぬぐい去るかのように、こほんと一つ、慧音の咳払いが落ちる。

「そんなことよりだな、折り入って頼みがある」

巫女の背中を嫌な予感が走る。しかし、聞かないわけにはいかない。

慧音は訥々^{とつとつ}と話し始めた。こんな時でも変わらず良い声をしている。

「思わず我慢できずに洋風の婚約指輪は交わしてしまったのだが、結婚式はやはり神前式でしようと思うのだ。お手数だが式で祝詞のりとをあげてくれないか」

「……はあ」

これは忙しくなるぞ、と霊夢は思った。慧音たちの分は嵐の前触れでしかないということを悟ったのである。

案の定、帰り際に結婚を控えた人々の集団に取り囲まれた。妖怪だらけの博麗神社まで申し込みに行くのを恐れていた者たちが、これは幸いと押しかけてきたのである。どうせなら前金制にしたいところだったが、釣り銭の持ち合わせがない上に、なぶん久々のことなので初穂料はつぽりようの相場観も不明である。後で先代の台帳をひっくり返して調べなければならぬほど、前例の無いことである。までもでない神事であれば適当に値段をつけてしまうのだが、当人たちにとっては一生に一度のこと。さすがの霊夢でも慎重にことを運ぶだけの理性があった。

何はともあれ、適当な帳面を持ってきてもらって、予約帳に署名と血判をもらう。ざっと見渡しても四、五十組はいるのでこめかみを押さへざるをえなかった。

「れいむー！ お買い物してきたよー」

人混みの向こうからびよんぴよんと飛び跳ねている何かが見えた。見覚えのあるねじくれた二本の角だった。とはいいつつ小柄な体軀たいくの鬼である。人混みをくぐり抜けるのも困難だ。

「邪魔だよ、どいてよう」

鬼の子がぐっと握り拳を掲げる。強力な妖氣が集い来て風景が黒く、またゆがんで見えた。

また嫌な予感がして背筋がひやりとする。

「えーい、みんなどっかいっちゃえー!」

かわいらしい声とともに密と疎を操る能力が発動する。妖氣があたり一面へ拡散した。

人々は突然に顔色を変えて、わらわらと散った。洗濯ものを取り込み忘れたのを思い出したり、急にかまどの火が心配になったり、皆それぞれの理由でその場から早足で去っていった。

「えへへ、二人つきり」

小鬼はそう言つて、とてと足音を立てて近寄る。きゅつと霊夢の手を握った。わずかに湿った、暖かな子供の手だった。

博麗神社までの道を手をつないで歩く。今朝方、結婚ごっこをしようと言われてから先、萃香があんまりなついてくるので、何とはなしに霊夢は断れずにいる。本当なら飛んで帰ればいいと思うのだが。

「霊夢がおとなしくお買い物してきなさいっていうから、お酒とお酒とお酒買ってきた」

誇らしげに掲げてみせる風呂敷包みから瓶の口がのぞいていた。霊夢はあきれてしまった。

「お酒ならひょうたんから出てくるじゃないの。わざわざ買うなんてもったいない」

「たまには日本酒だけじゃなくて、梅酒とか焼酎も飲みたいんだよ」

「とかいいながら日本酒も混ざってるじゃない」

「人間の作るお酒はひと味違うんだよ。荒っぽいっていうか、ひと臭いっていうかさ……鬼だからたまには人間の味が恋しくなるんだってば」

幼げなその口で物騒なことを言う。

「じゃあ今日のおかずはどうするの」

「つまみなんて塩か味噌があればそれで……」

「いくらうちの家計が火の車だって、ごはんのおかずが塩だけってのは無いわ」

「うう、ごめんよう」

しよぼんとうなだれて萃香は足下の石ころを蹴った。転がって土手を落ちていくのを何とはなしに視線で追った。

「あ、」

石の転がつていった先に生えていたのは、嫁菜よめなの若芽である。蓬よもぎも良い色合いをしてじゅうたんのように道ばたへ広がっていた。そしてその合間に時期もだいぶん遅いというのに土筆つくしが顔を出している。日陰のためだろうか、それともチルノあたりがその辺に住んでいたのか。

「萃香、食べ物よ」

巫女の目は、すでに狩人のそれであつた。常人を遙かに超えた力を持つ萃香ですら、その圧倒的な殺気に固唾をのんで見守るより他なかった。

塩をいれたお湯でさつと茹でた嫁菜を細かく刻む。白ごまや雑魚じやこ、生姜しょうがと併せて炊きたての飯にふわりと混ぜ合わせれば、いかにも春色をした炊き込みご飯ができあがる。

さわさわと優しい齒ごたえが口の中に広がる。山菜には珍しくさほど強い癖もない。

思わず二杯おかわりをするぐらいにばくばくと食べた。

それと作り置きしておいた根菜の煮物で昼食とする。一息ついたところで、大仕事に取りかかる。

土筆はまず袴——茎の下の方についている葉の枯れたところを取らなければいけない。

これは萃香の仕事だ、と言い置いて霊夢は自分の仕事に励む。要するに縁側で食後のお茶である。

土間に広げた新聞紙の上に、土手で取ってきた土筆を広げて、袴をむしっていく。
「れいむー、爪の中、がびがびの茶色になるよう」

「我慢しなさいよ、あんたの仕事でしょう」

「むう、お酒飲みながらやって良い？」

「良いけどちゃんと仕事しなさいよ」

「わーい」

たわいもないものである。

だいぶん時期も遅いので、袴だけはきちんと取らなければならない。強欲な霊夢であつてもこれだけは歯が立たないほどに硬い。

しかし、面倒で手間のかかる作業である。お茶を飲み終え、はいでん拝殿と境内との掃除を
霊夢が終えても、まだ袴取りは終わっていないかった。仕方なしに霊夢も手伝う。

ただ無心に指の先をあくで真っ黒にしてむしり取る。隣でぐびりぐびりとやってい
るのがうらやましかったので、霊夢も一口もらった。水のごとくするするとのどを滑
り降りていく名酒である。確かに昨日宴会で飲んでいたものより旨い。酒屋でだいぶ
ん味見をしてきたに相違ない。

さすがにつまみもなしに鬼と同じペースで飲んでいては死んでしまうので、霊夢は
胡瓜きゅうりを軽く一夜漬けにしたものをちよくちよくつまむ。

河童たちはどういうわけかこの手の野菜だけは四季のうちで欠かしたことがないら
しく、宴会となると必ずざるに山盛りにして持ってきてくれる。そのお余りをこうし
て翌日にいただくのはなかなかの贅沢であった。妖怪の土産と、人間の作った名酒
を同時に味わうことが出来るのは、博麗の巫女の特権と言って差し支えない。

「とは言っても、たまにはお肉とかお魚とか食べたいわよねえ」

「うう、ごめんってば……今から牛とか馬とかあつ萃めてこようか？」

「誰が捌くのよ、そんな大きな生き物」

「やっぱりダメか……」

「鳥か兎か魚なら良いけど」

「うーん、あいにくちょうど良いサイズの物が近くにはいないみたいだ。鴉からすとか鳶とんびならいるみたいだけど、どうする？」

「肉食の生き物は美味しくないから遠慮しとくわ」

それはさておき土筆である。

ようやく硬いところを全部剥きおわり、くてりと力なく横たわっている土筆を見ると、霊夢の口角は独りでに上がった。どう料理してやろうかと悪巧みをする気持ちである。

すでに日は暮れかけている。長く伸びた影が土間を黒々と染める。わずかに肌寒いのを今更に気がつく。春とはいえ、まだやはり夜気は湿っていてひやりとしている。拝殿と幣殿へいでん、それに自らの住居の雨戸を順繰りに閉めながら、考えをめぐらす。何をどうやって片づけるかを考えるのは楽しい。

定番の佃煮つくだにも悪くはないが、茹でるのが面倒くさい。手間は袴取りだけで十分だ。先だって知人の魔法使いから教わった洋風の調理を試してみることに決めた。

とっておきの牛酪バタを使う。人里からのもらい物で減多に手に入らない。しかし涼し

い場所に置いておいたとはいえ、このところ暖かい日が続いたから出来るだけ早く使い切ってしまったといけな。思い切つて今日は贅沢することにした。

ぬくめた鉄鍋にほのかに黄色い油脂分をことり、ひとかけら落とす。すぐにじぶじぶと融けていくところにひとつかみした土筆を落とす。まだ開いていなかった傘が徐々に開いて緑色の胞子を出す。菜箸で混ぜて、塩こしょうで味付けをする。

「萃香、味見する？」

「うん！」

あーんと口を開けている小鬼に、熱いから気をつけなさいと言いきつつ、一口食わせてやった。

「どう？　ちよつと薄いかしら」

「あふい」

「言つたじゃない」

「でもうまい」

「なら良し」

火を止める。

葉ごと漬けたかぶらの漬け物、昼間の嫁菜飯をおにぎりにして葱^{ねぎ}味噌をつけて焼い

たもの、それにばかりと落としたうずらの卵とにんじんとで彩りを加えた豆腐の汁物を備える。質素な一汁二菜であるが、春らしい。

「おむすびのじゃこかりかりうめえ」

「それは良かった」

霊夢であつても褒められれば嬉しい。

「人間ってこんなうまいもの毎日喰つてるのな」

「そうよ。人間の特権だもの」

水割りの焼酎をくぴりとやりながら、霊夢は答える。芋の芳醇な香りが心地よい野趣にあふれている。

「いいな、いいな。人間っていいな」

「おいしいご飯にほかほかお風呂。暖かい布団で眠るのよ」

「いいなあ、私もひとの子になりたいなあ」

「それならまずはお風呂を沸かさなくちゃ」

「よし、行ってきますす！」

小鬼をのせるのは簡単でいい。満ち足りた気持ちで霊夢はこつくりと深く酒を喉奥に染み渡らせるのであった。

一風呂つかえばあつという間に夜である。

灯り油がもつたいないので、それほど夜更かしはしない。座敷に二人分の布団をし
く。

萃香はといえば、すぐにいびきをかいて寝てしまった。すぐ隣で聞こえる屈託のな
い寢息に、霊夢は少しだけうらやむような気持ちになる。

結婚しようと口では言うくせに、今日一日を振り返ればただの友達づきあいのような
だった。結婚というのを良く知らないほど萃香は子供だったろうか。鬼というのはず
いぶんな長生きの生き物だったはずだが、いつまでも子供なのかもしれない。

昨日の魔理沙にしたところでそうだ。結婚するとか何とか言っていたけれど、きち
んとアリスの承諾を得ないままで強引に言い張るばかりだった。結婚という言葉だけ
が一人歩きしてしまっていて、実態の伴わない変な幸福感だけが幻想郷を埋めている。
慧音はああ言ったけれどやはりどこか不自然な感じがある。

考え込んでいると、どうにも目が冴えて眠れそうになかった。酔いが覚めてきてし
まっているのかもしれない。

やはり些か飲み過ぎたらしい。やたらに喉が渴く。起き出して土間の水瓶へ向かっ

た。

湿った土の壁の内側へ濃い闇がしとりと広がっている。足音がいやに響く。平素暮らしている場所であるのに、初めて見るもののように思えて不気味だった。

「どう、新婚生活はお気に召して？」

声が、した。

空間へ一筋の切れ目が現れてすぐに消える。ぬるりと闇の中へ現れたのは八雲紫である。室内というのに日傘を差したままである。優雅に広がったドレスの裾が無骨な土の床へ花畑のようにさんざめく。

ずっと見られていたのか。

いつものことではあるのだけれど、霊夢は思わず毒づいてしまう。

「こういうのって、悪趣味だわ」

「何が？」

「鬼は嘘がつけないのを知っているのです。それなら一度しようとしたこと、言い出したことは引っ込みがつかないに決まっているじゃない」

浮かれている萃香を見ると落ち着かない気持ちになる理由を霊夢は分かっていた。あくまで友達どうしでしかないようなことを、夫婦なのだと思ひこんでいるよう

に見える。

八雲紫は曖昧に笑んだ。

「萃香には優しいのね。妬やいてしまうわ」

「ふざけないで」

「ふふ、本当のことですわ」

扇で覆った口元。目は細く笑んでいる。

やはり何をかは知らないが、からかわれている。霊夢はどうにも苛立ちが増して堪らなかった。

「こんな遊びを流行らすなんて、本当に悪趣味」

「そうかしら？ 流行ブームと定番トラッドの境界をちよつと弄っただけですわ」

この程度のことは、紫にとっては日常の暮らしの一部でしかない。自分が悪いことをしたという自覚すら乏しい。

霊夢はただただ洪面じゅうめんを作るばかりである。それを取りなすようにして、紫は言葉を継ぐ。

「これが新婚生活ではないというのなら、あの小鬼に霊夢の望むような暮らしを教えあげたら良いのじゃないかしら」

「無理よ。友達に恋なんて出来ない」

「そう」

紫は笑みを止め、ぱちりと扇子を閉じる。口元に手を当てて考え込む。

「ならば、友情と恋愛の境界でも弄って差し上げましょうか」

「止めなさい」

「女同士ではいけないというのなら男女の境界を、子供っぽいのがいけないというのなら大人と子供の境界を、貧しいからというのなら金持ちと貧乏人の境界を操ることもできますわ」

世界改変者——八雲紫に出来ないことはない。

「こいしこいしと、我が背泣く泣く」

紫は節回しをつけて歌う。

「そばにいても片恋、遠くにいても両想ひ、ですわ」

「何それ。訳わかんない」

聞いている側は苛立ち混じりにため息をついた。それを見て、ますます紫の笑みは深くなる。弓なりに唇をゆがめて、こう宣言した。

「恋を知らない博麗霊夢を幸せにするために、八雲紫は頑張りますわ」

「そんなのいらないつつの」

はやくも二日酔いなのか、こめかみはずきずきしてきた。

「とはいえ睦言むつごもない夫婦暮らしというのもございませんでしょう？　今少し色めいたことがあってもよろしいのではないかしら？」

「だから、結婚なんてしたくないんだってば」

「あら、そうなの」

口元を押さえる動作はあくまで上品だ。

「てつきり、あなたは子供のようなひとを好きになるのだとばかり」

「冗談じゃないわ」

子供ばかりの幻想郷でそんな嗜好では、頭の痛くなることばかりだ。

「恋をするなら、もっと焦がれるような恋がいいわ。ロマンチックで身も心も焼き尽くすような」

何の気なしについた言葉である。深い意味はない。

「あらあら、そうなの。でもそれは次の機会にして、今回はこれで我慢して頂きたいですわ。もう準備はされてしまっているのだから」

「待って。次って何よ」

「ふふ、こつちの話ですわ」

ひとさし指を立ててそつと唇に添える。

「ないしょないしょは蜜の味」

「いっつもあんたはそうやって悪巧みして」

「知らぬが仏と言いますわ」

そつと指先を伸ばす。髪の方に僅かに触れる。

「かわいいかわいい霊夢。幸せ幸せ霊夢」

「あんたにまで子供扱いされたくないわ」

「それは失礼」

伸ばした手を冷たく振り払われても、優雅にスカートをつまんで、貴婦人のお辞儀をしてみせる。

「そこまで博麗の巫女がおっしゃるのなら分かりましたわ。半年の間だけ、これを流行らせましょう。そういう『遊び』ですわ」

「ずいぶん長い異変なのね」

「異変じゃなくてよ、これは」

ただの流行り遊びなのだ、と八雲紫は言い訳してみた回答をした。

「自然の営みがほんの少し加速されるだけ。花が咲き乱れるのと同じことですわ」
色恋沙汰は開花に同じ。

咲いては乱れて散ってゆく。

そして、

来たときと同様に、唐突に八雲紫は消えた。

別れの言葉もない。常に傍らかたわにいるためである。

かたと柄杓を水瓶に置いて、霊夢は再び寝室へ戻った。

目覚めた萃香が布団の上で所在なげに膝を抱えて座っていた。

「れいむー、おなかすいたー、おっぱい」

「出るか馬鹿」

何の恥じらいもない言葉に苦笑する。

それでも意地汚く、萃香はねだった。

「吸ったらちよっとぐらい出ないかな？」

「出ないってば」

寝ぼけた子鬼はもぞもぞと隣の布団に潜り込んでくる。

「ちよっと、狭いじゃない」

「んうー、みっしんぐばわーする？」

「しなくていいから」

「じゃあこのまま寝る。おっぱいの夢みる」

ぽすっと腕の中に倒れ込んでくる。どうにかかそうとしてもしがみついて離れない。力で鬼に勝てる訳はないから、霊夢はあきらめてそのまま眠ることにした。

萃香の肌からは、甘いような、乳臭いような、まるきり子供の匂いがした。

——さみしい。

夢心地に、そんな声を聞いた気がした。

錯覚かもしれない。

翌朝、とても心地よい匂いで目が覚めた。

囲炉裏へ向かうと、魚が串に刺されて並べられていた。こんがりと焼き色がついている。

すぐそばで萃香が塩をつまみに朝から一杯やっていた。

「おー、霊夢おはよー」

「これ、どうしたの？」

「いやあ、年寄りには朝が早くってねえ。釣ってみたら釣れたからさ」

雨戸はしつかり開けられていた。風通しが良い。今日もすがすがしい快晴のようだった。

「掃除もしといたよ」

「……槍でも降るのかしら」

「酒が降ればいいのにねえ」

「もったいない」

「言われて見りゃ確かにそうだ」

どうということもないいつもの会話だ。別に萃香の気が狂ったわけでもなさそうだった。

「あ、神社の方はやってないよ。私じゃ入れないからね」

「そりゃあ、拝殿の中にまで妖怪に入られたらこっちの商売あがったりだわ。いいわ、そこまで気を遣わなくて。何か変な感じするもの。かえって疲れちゃう」

やれやれと囲炉裏の前に座る。魚を手取る。鮎あゆだ。良い香りがする。

「もう良いかしらね」

「うん、おあがり」

そう言う自分の方は串を両手に持っている。見上げた欲張りである。別段霊夢のために釣ってきたわけではなさそうだ。自分が食べたいから釣ってきたという方が、妖怪らしくて良い。

合点がいつて安心した霊夢はようやくその魚を一口かじった。桜の木を燃やして出てくるとどこか甘いような煙の香りと魚の育った川底の苔こけのさわやかな香りとが相まって、本当に初夏も近いのだと感じる。

賽銭箱の置いてある拝殿と、神具や御札をしまっている弊殿の掃除をしている間、萃香は手持ちぶさたな様子で境内をうろうろしていた。

「どうしたの？」

「んー、何かお手伝いしたいなと思って」

「あらまあ、珍しい」

「そりゃあ、ほら、結婚して家族になるんだし」

なるほど、結婚相手として選ばれるための点数稼ぎということか。今朝からの殊勝

な挙動の魂胆が見えて、霊夢は納得した。不思議と嫌な気持ちにはならなかった。役に立つものは鬼でも使え、だ。

「じゃ、お洗濯でもする？」

「する！ してみたい！」

びよんびよん両手を挙げて飛び上がっている。

妖怪にとっては人間のすることなすこと全部が珍しいらしい。霊夢は少しだけ微笑して、洗濯の仕方を教えてやることにした。

あらかじめ採って貯めておいたむくろじの実を渡してやる。黒い種を包んでいる黄色いしわしわの皮を取ってみせる。

「この皮を取ってね、水にちよつと濡らして揉んでやると泡が立つの。ほら、こうやって」

「おお、すごい！ 石けんみたいだ」

「石けんは高いからうちに使わないの。あとは洗濯板と、洗った後のを分けておくためのかごがあるわね。川の場合は知ってる？ あんたがあんまり遠くに行くと人間がびっくりするからすぐ裏の小川を使いなさい」

自分でも驚くぐらいに丁寧に教えてやっているのに気がつく。子供が出来たら、こんな気持ちになるのかもしれない。そう考えてなんだか変な感じだなと小さくかぶりを振る。

「ま、ちよつとぐらい汚れが落ちなくなつてかまわないから。くれぐれも川に流さないようにね」

「うん、行ってくる！」

元気よく、小鬼は飛び出していった。歌いながら上機嫌で駆けだしていく。

「鬼のパンツはいいパンツ♪ つよいぞつよいぞ！」

抱えていった荷物のうちに霊夢のドロワーズがあることに気がついての選曲に違いない。霊夢は思わず苦笑してしまった。

昼食までの間に掃除はあらかた済んでしまった。洗濯の方も、萃香の頑張りのおかげで、縁側軒下にはさばさと壮観な白い旗がはためくようになってゐる。

「霊夢、何して遊ぶ？」

「んー、お茶飲んでお昼寝かなあ」

「つーまーんーないー！ 遊ぼうよう！」

小鬼は畳の上でじたばたしている。

「じゃあ、間を取っておやつ作ろうか」

萃香はきよんととして、こちらを見た。理解していない顔をみて、霊夢はにんまり笑う。

「萃香は甘いのと辛いのとどっちがいい？」

「えっとね、甘いのがいいな、おやつなら」

「じゃ、取ってきて」

はい、と籐とうで編んだ籠を渡す。まだ小首をかしげている。

「え？」

「昨日の土手よ。蓬よもぎがいっぱい生えてたじゃない」

ぴーんと思ひ浮かんだらしい。表情が途端に晴れる。

「草餅か！」

「そうそう。なるべく苦くない若芽のところを集めてきてね」

「わかった！」

びしっと額のところに片手を掲げて敬礼した。どこで覚えてくるのだろう、こんな動作。

実を言えば、昨日寺子屋で和菓子屋の旦那に貰った（強奪したとも言ふ）小豆餡の

あずきあん

瓶詰めを見てから作りたくて仕方がなかったのだ。でも昨日は土筆や嫁菜で山菜のたぐいはちよつと食傷気味だったから今日に取っておいた。

「夏も近づく♪ はちじゅーはちや♪」

歌いながら飛び出していった萃香の背中では楽しげに弾んでいる。茶葉じゃないのだけれど、まあいいか。心の中でそう思いながら霊夢はお茶を飲むのだった。

摘んできた蓬は良く洗って、汚いところは捨ててしまつて、きれいな若草色をした芽のところを塩茹でして、水にさらす。冴え冴えした新緑をよく研いでおいた包丁でとんとんと刻む。細かく細かく刃を立てていくごとに初夏の、少しつんとするような青い香りが立ち上がっていく。

「萃香ー、これ、すり鉢で擂^すつといて」

「はーい」

力仕事は鬼に任せるに限る。

その間に餅米が蒸し上がる。

「萃香ー、これ、お餅ついでいてー」

「はい」

力仕事は鬼に任せるに限る。

「萃香ー、これ、混ぜてー」

「はい……さっきから私ばかり働いてない？」

「そんなことないわよ」

涼しい顔をした霊夢はずるずると音を立ててお茶を飲んでいる。説得力は皆無である。

きれいな緑色のお餅ができあがる。丁寧に丁寧にすりつぶして草の繊維を取り除いたおかげで、いいあんばいに滑らかな餅ができあがった。

のばして、もらい物のあんこを包む。たっぷりと入れるのが霊夢の好みだ。

「一応、拝殿にも飾ってこうかな」

見た目のいい（ただしあんこの控えめな）一つをお皿に入れる。

「ついてくー！」

「いいわよ。あんたはお茶入れって」

「いいの、ついてくの」

そう言って萃香は霊夢の着物のたもとをそととつかんだ。

「まあいいけど。別に面白くないわよ」

家を出て、境内を通り、拝殿へ向かう。その間中、萃香は霊夢のたもとをずっとつかんだままでいた。神域は妖怪にはやはり少しばかり恐ろしいのかもしれない。無理をしなくていいのに、と霊夢は思った。

賽銭箱の後ろ、一段高くなっているところにお供えをする。二礼二拍手一礼。帰り際、萃香が尋ねる。

「ここにはどうして神様いないの?」

「んー、いるけどまあ、いないようなもんだから別に気にしないでいいわ」

「ひとりはさみしくないの?」

霊夢はそこでもうやく萃香のことを見た。

「ふーん、あんたはさみしいんだ?」

「ちっ、ちが……わないけど」

うつむき加減で、萃香は答えた。

「正直ね」

霊夢はそつと鬼の頭を撫でてやる。その硬い角だけをのぞけば、小さな、まるつきり子供の頭部だった。

「ねえ、ねえってば、霊夢はさみしくないの？」

「帰りましょ。お餅食べなくちゃ」

問いには答えないままで、霊夢はきびすを返した。その後を小鬼が付いていく。夕日に影は長く伸びていた。

異変は、風呂に入ろうとして起こった。

「すいかーーーーーっ！」

怒号と共に飛びかかってきたのが霊夢である。囲炉裏のそばで酔っぱらってうたた寝している萃香に飛びつく。そのまま馬乗りになった。

「ほへ？」

「わたしのお気に入りのドロワに穴開けたでしょ！」

「あー……？」

「口開けたままアホ面してごまかすんじゃない！ どうしてくれるのよ、綿ゴミみたいになってるじゃない」

広げたドロワーズはまさに満身創痍だった。ふうわりと柔らかだった両ものところは鳥の羽のように毛羽立ち、安いタオルみたいになっていた。もっとひどいのは股

の部分だ。思いつきり透けてしまつてレースみたいになっている。このままの見た目ならまだいいが、うっかり気付かずに穿いたらひどいことになる。しゃがみこんだら目も当てられない。

強力な鬼の力で洗濯したら、こうなるのは当然なのかもしれないけれど、目の前の無残な布きれに霊夢は悲しみと怒りをおぼえた。

萃香はぽりぽりとおしりをかきながら答えた。

「鬼のばんつみたいに丈夫じゃないからいけないんだよ。人間は弱いんだから大事なところはちゃんと守らなきゃ」

「当たり前のことみたいに言うな」

ぽかりと殴る。思わず手が出た。

「わあん、霊夢がぶったー」

「あんたみたいに虎の毛皮でばんつが作れるほど贅沢じゃないの。それになんだかくちくしそうだし」

「十年はいてもやぶれないー♪」

「ああもう、どうやって暮らそう……」

霊夢は本当に泣きたいような気持ちだった。あの下着は肌触りがよくてなかなか手

に入らなくて気に入っていたのだ。

「ノーパンれいむー♪」

萃香がそれを理解していないようなのが、本当に腹立たしくて、思わず憎まれ口を叩いてしまう。

「あんたなんかにお洗濯頼まなきゃ良かったわ」

その途端に、萃香の顔を見て、しまった、と思う。

萃香は口をへの字に曲げる。そうしてことりと杯を置くと、囲炉裏の前で膝を抱えて背中を丸めて座り込んでしまった。

「ちょ、ちょっと、」

「いいもん、そんなこと言うならわたし、もう手伝わないんだから……」

ふぐふぐと鼻を鳴らす音が聞こえる。泣きべそをかいているみたいだった。

「……泣くのは反則よ」

霊夢はそう言い返して、ただ黙るだけだった。むっと唇をとがらして、座り込む。持ち物をぼろぼろにされて、怒らない訳がない。それなのに、どうしてこちら側がなんとなく罪悪感を覚えなくちゃいけないんだろう。

怒って、向こうが傷ついて、そしてそれによって罪悪感を抱かせた相手にもう一度

腹立たしくなつて。ぐるぐる回る悪循環に霊夢の胸がむかむかした。

「しらないわ、萃香なんて」

そう言い捨てて、立ち上がった。

風呂は、わかしたら入らねばならぬ。

それが博麗の掟である（ただし今作った）。

ちよつと昔のひとは、下着なしで過ごしたらしい。霊夢にはそれが信じられない。

ドロワーズだってそんなに密着した下着ではないけれど、やはり何も無いのはどことなく落ち着かない。ぱんつみたいに締め付けるのはやはり嫌だけれど、寝間着の感触が直接肌に触れるのはなんだかとても落ち着かない感じがする。

静かな夜が来る。

今日こそは別の部屋で眠らせようと思ったのに、萃香は泣きべそをかきながらも、霊夢のすぐ隣に布団をしいた。

「何よ」

「一緒に寝るの」

「あっち行きなさいよ」

「やだ」

ぐすぐすと鼻を鳴らしながらも強情に言い張って聞かなかった。

蹴飛ばしてやろうかと思つたけど、鬼に力ではかなうはずがない。霊夢はまるつきりだっ子の小鬼を無視してさっさと布団を頭までかぶつた。

少しでも早く眠りにつこうと思つたのに、息苦しくて眠れない。けれどちょっとでも頭を掛け布団から出そうものなら、萃香がじいっとこちちを見ていそうで出ように出られなかった。

見えない押し問答みたいにな、お互いの強情が張り合う。自分の息で濁つた空気を吸つて、なんだか胸の奥が苦しくなる。酸欠のせいだけじゃなくて、吐き出さなきゃいけない何かが喉につつかかっているみたいに感じた。

滞つたそれは頭の中をぐるぐる回つて暴れて、とても落ち着かない気持ちにさせる。息が足りないのに吸つても吸つても、頭の中はすすきりクリアとはいかないのだ。

仕方なしに、霊夢は頭を布団から出した。春の夜の、つめたい空気。

その中で想像通り小鬼の二つの目が、こちちを見ているのがわかつた。

「……なによ」

そつぽを向いてやりたかつたけど、それでは逃げ出すみたいでしゃくだった。

だから見返してやった。目にできるだけ力を込めて、じつとじつと見つめ返してやった。息を詰めて、集中して相手の奥まで見抜くような気持ちで。萃香の^{はしばみ}榛色の瞳に写っている自分のことが見えるぐらいまで。

「ごめんね」

小鬼が言った。

不意を突かれて、霊夢は言葉を失った。こっちは思いつきりガンつけて戦う気満々だったのに、まさか謝られるなんて思いもしなかったのだ。

「だ、だいじなもの、こわして、ごめんね」

二回も言った。二回も、『ごめん』って言った。大事なことだからか？ きつとそう
だ。

謝るのって、大事か？ きつと……そうだ。

「ううん。こっちこそ、大人げなくてごめん」

こそばゆいような気がしたのは最初だけで、自然と言葉は口から出た。一つ転がればあとはするするとなじんで流れていくようだった。

「明日、一緒に下着屋さん行こうね。好きなもの買おうよ」

萃香が言った。靈夢は苦笑する。

「あんたお金あんの？」

「ないけど、お酒を売ったら出来るかも」

「あんたの飲みかけをかう人なんてどこにもいないわよ。別にいいわ。穿いたら破けるものなんだし」

そうはいつでも、あと何度かのご飯分の魚とか兎とか鴨とかぐらひは取ってきてもらおう。それで浮いた食費を衣服の費に回そう。

ちよつとした算段をしながらも、靈夢の頭の中は明日からの買い物のことではなくて、他の何かで占められていた。それが何だかはよく分からなかった。でも、とてもうれしくて、心の臓がコトコト鳴るような素敵に思ひのようだった。

翌朝のおかずは、新鮮な卵だった。籠に山盛りになった産みたての鶏卵がちゃぶ台の上に置いてあった。

妖怪神社と言われて以来、ご近所づきあいの絶えて久しい博麗神社にはきわめて貴重な食物である。うずらの卵ぐらいなら拾うこともあるが、鶏はなかなか落ちていない。

「どうしたのよ、これ」

「なんか萃^{あつ}まれーってやったら萃^{あつ}まった」

どう見ても盗みである。

霊夢の頭の中に黒いチビ霊夢と白いチビ霊夢が生まれて弾幕ごっこが始まったかと思ったら、黒いチビ霊夢がボム連打して圧勝して終わった。

そういうこともある。

「かみさまありがとー」

ものを拾って、しばらく持ち主が判らなかつたら貰って良いというのは人里でも有効なルールである。だから良いことにした。

「かみさまいるの？」

「いないけどいるの」

「ふうん」

小鬼は、判ったような判らないような顔をしてこっくりうなずいた。霊夢はもとより、理解させるつもりはない。妖怪に教えを説いたところで大して意味があるとも思えないし、そもそも教えを説くような宗教でもない。

小さめの玉葱^{たまねぎ}を粗みじんにしておく。萃香に頼むと涙も出さずにやっておいてくれ

る。妖怪は便利でいい。

深めの器へ卵を割りほぐす。贅沢に一人ふたつも使う。めったに食べられないものだから、今日ぐらいいいだろう。以前に人形遣いの家からガメてきた砂糖を足してふうわりと混ぜる。香り付けに醬油をちろつと垂らしたそれを、ごま油で薫り高く炒めておいた玉葱と共に鉄鍋へほうり入れる。じゅわりと菜の花が咲くように、あでやかな煎り卵が出来る。つやつやと朝日を浴びて白くなまめいている。

湯気のわき上がる炊きたての飯に、ほとんど半熟のそれと、窓際に植えてあつた^{わけ}葱をふりかけて食らう。

「あまいー、うまいー」

好みで醬油を少し足すのも良い。

「鳥そぼろと一緒にだともっと美味しいんだけどね。ちょっと甘すぎるかしら」

「ううん、これぐらいが好き」

萃香はぶんぶんと頭を振って、米粒をまき散らしている。

「こら、もつたいたいから落ち着いて食べなさい」

そう言いながら霊夢は口の端についたままの米粒をそつと取ってやった。後で糊にするのである。貧乏ではないが、無駄はきらいだ。

昨晚の残りのけんちん汁と胡瓜のぬか漬けをちよんちよんとつまめば、腹は十二分にくちくなる。萃香はほんの少し残った飯に汁を少し混ぜてずるとお茶漬けのようにしてすすっていた。わずかに余韻を残した卵の甘いのと汁の塩気がよく合う。

春の長閑な食後^{のどか}。いつもより濃いめに煎れた茶をすすり、昨日の草餅を食す。一夜あけていくらか硬くなつてしまつていたので、それも興だと串を刺して囲炉裏で焙^{あぶ}る。香ばしくわずかに焦げたおもてを、お茶でふやかしつつ味わう。茶の苦みとこし餡の上等な甘みが実に合う。

と、萃香が言う。

「今日はなにをする?」

「お買い物行かなくちゃ……あーでも、人里最近喧しいのよねえ。結婚ブームがどうとかこうとかで」

霊夢はひとりごちる。

「そう言えば、いつ霊夢はわたしと結婚するんだ?」

萃香が思い出したように言った。

「……まだ忘れてなかったのか」

「だって結婚したいもん」

だだっ子のように、萃香は言った。

「そうねえ、結婚ねえ」

霊夢はもとよりそんなつもりはない。とはいえ、正直に言えばこの小鬼はまた昨日のように泣くだろう。便利な労働力を失うのもいやだ。

「……大人になったらね」

とりあえず当たり障りの無いことを言った。

その途端に萃香はまたむうっと口をへの字に曲げた。

「妖怪は大人にならないもん」

「まあそうか。じゃ、わたしが大人になったら」

「霊夢、大人じゃないの？」

改めて問われると困る。そもそも大人って何だ？

「まあ、難しいことは後にして買い物に行こっか」

逃げるようにして、その場を立った。

ところで、ノーパンで空を飛ぶのは勇気がある。さりとて歩いて人里まで行くのはかったるい。用心しいしい徐行運転で行くしかない。

「れいむー、遅いよ」

「誰のせいだ」

思わず御札を飛ばしたくなる。やらないけど。

ゆつくりと飛ぶ中で風が心地よい。下半身にまつわる諸事情が無ければそのまま空中散歩に行ってしまいたいぐらいだ。

人里の畑の上を通り過ぎる。

「あ、霊夢。おおい、結婚式の予約大丈夫かよう！」

野良仕事中の妹^{もこう}紅に手を振られる。首に手ぬぐい、もんぺを膝までまくって勇ましい。慧音のところの畑なのだろう。精の出ることだ。

「はいはい今それどころじゃないから後でねー」

軽くあしらう。他人の結婚式より自分の下着である。それでも飛んで追いかけてくる。

「馬鹿、慧音との大事な一生に一度のだな……」

「うっさい黙れ」

牽制のつもりで御札を飛ばした。

「何をする！ そっちがその気ならこっちだって」

かくして。

ノーパンのまま弾幕ごっこをやる羽目になった霊夢である。裾のひるがえり、相手との位置関係、風の吹く方向、それに加えて相手はエクストラボスだ。いつもより難易度が高いことは言うまでもない。

ちなみに萃香は黙って酒を飲んで見てた。手助けすることもなく、にやにやしていた。そんな風に気を遣っている霊夢が珍しかったのだろう。

というわけで。

裾や風向きを気にして戦わざるを得ない霊夢が勝てるはずもなく、久々に完膚無きままにやつつけられた。

「うう、悔しい……」

「結婚を馬鹿にするからだ」

ぱんぱんと土埃を払って、ふんぞりかえっている。

「吉日をちゃんと占って教えてくれよな。こっちだって準備があるんだから。寺子屋も休みにしなきゃいけないし。あんまり遅いようだ」と山の上の神社に頼まなくちゃいけない」

「あそこは氏神さま^{うじがみ}じゃないからバチが当たるわよ」

「商売敵を悪く言うような巫女にこそバチが当たるだろうな。ちゃきちゃき働け」

へたり込んでゐる霊夢の首根っこをむんずと掴んだ。

にわかに小鬼が立ち上がる。

「こらー、霊夢をいじめるな」

「いじめてない」

「いじめられてない」

沽券にかかわるとばかりに霊夢が言った。またここで弾幕ごっこが始まって時間を費やすのはごめんだ。

「どんな用事だか知らないが、ちゃんとこっちの準備もしてくれよな。みんな待っているんだ」

まだ文句を言いたげな妹紅に、しぶしぶ頷きながら霊夢はそろそろ観念した。たまには巫女らしくまじめに働いてみるかと。

と。

「えい」

ばさあつと大きくスカートがめくれた。

否、正しくはめくられた、のである。折しも強い春風が吹く。腰の上まで届かんば

かりに大きく翻る。

「こらあああああ！ 酔っぱらいすいかー！ー！」

「スカートめくりー♪」

歌いながら小鬼は逃げていく。空中を泳ぐようにして飛んでいく。

妹紅が口をぽかんと開けているのがわかった。絶対見られた。

「……見なかったわよね」

若干涙目になりながら御札を突きつける。妹紅は武士の情けとばかりに重々しくうなずいた。

「そういう事情なら判った。最優先で行くと良い」

「あんたは何も見なかった」

「判った。見たとしても忘れよう」

実に物わかりの良い蓬萊人である。

しかし霊夢が飛び立った後、大きく付け足した一言が余計だった。

「女の子は腰を冷やすと良くないぞー」

あいつらの結婚式は順番を後回しにしてやろうと霊夢は心に誓った。

買い物を決ませて、きちんと身支度をした。これで完璧無敵な博麗霊夢の復活である。ドロワーズ一つ無くなっただけでこんなに自分が弱体化するなんて思いもよらなかった。

ちなみに萃香はしばらく酒ひょうたんを取り上げる刑に処することになった。えぐえぐと涙目になりながら後ろをついてくるので鬱陶しいことこの上ない。

以前に結婚を申し込んだ人々の家を一軒一軒回って、聞き取り調査を順番に済ませていく。式を挙げるにふさわしい吉日や細かいやり方を決めるには夫婦両人の歳や家紋や来歴が必要だ。場所は神社ではなくおのおのの自宅で行われるのが一般的だから、場所の下見もしておかなければならない。

とはいえ。

「あらあら、お茶でもいかがです？」

「おまんじゅうでも」

「そろそろお昼でしょう。打ち立てのお蕎麦そばがあるのだけれど」

「うちのひとが作ったんだけど、この足袋たび、使わないかしら」

「鮎かんろの甘露煮を作ったの。よかったら風呂敷ふしごと持って行って」

もらい物のごちそう三昧で腹がふくれるのはいいのだけれど、気疲れしないことも

ない。あの傍若無人が服を着て歩いているような博麗霊夢が気を遣うというのはきわめて異様であるが、人間相手はいろいろと面倒なことが多いのである。弾幕ごっこで片付ける訳にもいかないし。

「ああもう、めんどくさいー」

案件を半分ほど片付けたところで、霊夢は音を上げた。人里の道ばたでのびをする。帰って酒飲んで寝よう！」

萃香も両手を挙げてあおる。酒ひょうたんを取り上げられて不服なのである。

「あのねえ」

「結婚式は逃げないから大丈夫！ 今日一日で片付けなくたっていつかみんな結婚するもん」

「……そうかしら」

「酒だー、酒もってこいー」

要するに萃香は飲みたいだけなのだ、ということは霊夢にも判っている。けれど誘惑は耐え難い。

空はあくまで青く、冴え冴えとして、山の端にわずかに雲がたなびくばかりである。空中散歩に良い天気。

「遊びに行こうか」

「うん！」

いろいろ持たされたお土産を神社に置いて、身軽に遠くへ飛び出した。

ただ高く高く飛ぶだけの飛び比べ。息が上がりそうになることに、萃香はひょうたんならお酒をついで加速する。飲めば飲むほど速くなるみたいだった。けれど、げらげら笑ってあらぬ方向に飛んでいくのと差し引きして、霊夢とちょうど同じくらいの速さだった。

同じように上へ飛び立つ雲雀^{ひばり}を見つける。大声で驚かして歌を邪魔してやった。鳥は驚いて逃げていった。それを追い抜くぐらいの速度で追いかけてやる。混乱した雲雀は藪の中へ飛び込んでしまった。

二人で腹を抱えて笑った。

「霊夢、いじめっ子だ」

「あんたこそ」

互いににんまりと笑う。こぶしを軽く丸めて打ち合わせる。

小川のほとり、昏く^{くら}水のよどんでいる場所を見つける。水面の揺れるのも分からな
いが、そうつと上へ行くと、どぷりと泡を吐く黒い影がある。どうやら主らしい。挨

撈に來たようだった。

木陰で一休みしていると、鱗が水面に踊るのが分かった。鯰か鯉かとささやいたら、あれは竜の子だと萃香が教えてくれた。

「まだ蛇ぐらいの大きさだけど、結構良い子だよ。お酒に弱いのが可愛い」

そう言つて、朱塗りの杯になみなみと日本酒を注いで、水面に浮かべた。ゆらゆらと漂う酒杯はほんの三尺ほど泳いだかと思えば、とぷん、音を立ててすぐに沈んだ。

「こぼさないで飲んだかしら」

「もちろん。竜が水を操らずにどうするのさ」

「姿を見せないなんて、ずいぶん恥ずかしがりなのね」

「女の子に弱いんだ。この間、白蛇しろへびの雌に振られたせいであたり一面土砂降りだった。まだトラウマなんだろう」

「ああ、あの雨つてこいつのせいだったの」

大きな石のごろごろと転がつている河原を歩く。飛び跳ねる萃香は楽しそうだった。遠くに点描のようにして、渡り鳥の飛ぶのが見える。冬の間に湖で休んでいたのだろう、鴨のたぐいか。寂しげにゆるゆると羽を動かしていた。夏の間はもっと北の方で過ごすのだろう。そちらの方が故郷なのか。

萃香が指さして問う。

「なーなー霊夢、あれ夕食か？」

「うーん。なんか今日はお肉の気分じゃないのよね」

何とはなしに感傷的な気分にならないではなかった。山里の昼は短い。陽はわずかに翳^{かげ}り、肌寒い。

「そか。それならいいや」

「でもまさかお昼に鴨南蛮そばが出てくるとは思わなかったわ」

「あれは美味かったなー。ネギのとろつと煮込んだのであるのと鴨の脂がじわわつとしみ出してくるのが、濃いめの醤油っぽい出汁^{だし}にこー、酒が欲しくなった」

鬼のくせにちゃっかりごちそうになっていた。

霊夢としては里の人たちの奇異なものを見る視線を思い出して若干複雑な気持ちになる。また後でひそひそ言われそうな気がするが、今更思い悩むのはやめにした。

「夜ご飯、何にしようかしら」

今日ほもらいものがたくさんある。鶏肉も豚肉も牛肉も魚も貝も野菜もお菓子もあるから何だって出来る。特に乾物屋の息子が結婚するというので、干し海老^{えび}や干し貝柱のような珍しい外からの流れものまでいただいてしまった。

「靈夢の作るものなら何でも美味しいから好きだ」

「あんたも手伝うのよ」

「靈夢が好きだ」

「……はいはい」

いつものように流すまで、ちよつとだけ間が空いた。夕日のせいかもしれない。鴨たちのせいかもしれない。皆が、家に帰っていくからかもしれない。

「ほんとだぞ」

「判ったから。おうちに帰りましょうか」

「うん」

自然と手をつないで、家まで帰った。

外気で冷えた靈夢の手に、酔っぱらった萃香の手はほんのり温かった。

まともな冷蔵庫がない家では、食料品の保存は気を遣う。今夜は夕飯の支度よりは、日持ちするように肉や魚を下ごしらえする方に時間を割いた。

腐^{くた}り防ぎの札を貼った地下の食料庫はひんやりしてはいるけれど、あまり出入りすると効力を失ってしまうから、あまり物を持つのが好きではなかった。とはいいつつ、

ごはんのおかずに悩まないというのはありがたい贅沢なのだと思はしている。

豚肉や鳥肉は塩につけておく。明日、燻製にでもしよう。牛肉は珍しく薄切りではなくて、それなりの厚みでいただいてしまったので、明日ビフテキにすることにする。付け合わせにちょうど良さそうな芋とにんじんと^{えんどう}豌豆も貰った。裏手の小川にクレソンが生えているのも知っている。

「れいむーれいむーお風呂わいたー」

「わかったわかった」

大忙しだ。日々の暮らしを埋めるだけで、やることはたくさんある。思い悩む暇などはない。ただ楽しめることを楽しむだけ。

それはそれで幸福な気もした。

けれど、身を焦がすような恋を経ずに落ち着いてしまうのは、どうにももったいないような気持ちになった。

夜更け、鬼の寝静まったところを見計らって霊夢は住居を出た。

参道の石畳へくつきりと影の落ちそうなほど明るい月夜だった。何の灯りもなしに危なげなく歩むことが出来るほどの光が満ちていた。

境内、拝殿の前へ式台を置く。あらかじめ近隣の湧き水で清めておいたものだ。四方に青々とした榊さかきと紙垂しでを付したかがり火を焚く。結界である。

昼のうちに準備できれば楽なのだが、そうするのはしきたりになうものではなかった。鬼が起きていては邪魔されてしまうに相違なかったのである。いくら妖怪神社と揶揄されようとも、それ相応の清めは要る。

火に照らされて、闇がその黒さを増すようだった。奇妙なことに、月明かりよりも炎の方が闇を裂く力が弱いようだった。春と初夏の間、僅かにまとわりつくようなしとやかな大気を振り切るように、霊夢は袖をばさりと払った。

清浄のうちに、神託を下す。祝詞のりとと共に結婚する新郎新婦の名前を読み上げる。幣ぬさで場を祓い清める。

細かな竹籤たけひこを一つの筒へ入れておき、一つずつ引いていく。そこに書かれた日付が、当地人にとってしかるべき婚礼の日である。

そうして一つ抜いては手元の巻物へ書き留め、籤ひこは火の中へ投げ込んでおく。そして幣で払ってはまた一つ抜く。

ふと思ひ立って、自分たちの吉日を占う気になったのは、魔が差したとしか言いようがない。神を呼べるほどに場を清めているのに魔が差す、とは何事かとも思う。

やはり、鬼とずっと過ごしていたのが良くなかったのか。あるいはどうせ自分たちは結婚などするまいという侮りがそれをさせたのかもしれない。神託であれば、迷いもなく断ることも出来ようと思ったのかもしれない。

「博麗靈夢、伊吹萃香^{いぶき}」

神の祝福と共に兩名の氏名。別段、緊張もなかったし、手も震えなかった。所詮、戯れだと思っていたのである。

かがり火に照らされて、巫女の影はゆらと揺れた。

神託は少しの迷いもなく、およそ半年後の上弦と出た。神無月の明けたちようと翌週であるから信憑性のある日付である。

現実味のある日付に不意を打たれ、靈夢はその日付を忘れようとした。書き付けるわけもない。けれど不思議に忘れられなかった。自分の誕生日であったためである。

夜明けの来るより前に片付けを終わらせて、靈夢は再び眠りにつこうとした。

しかしどうにも落ち着かなかった。

となりでいびきをかいている萃香の横顔をそっと見た。どこまでもあどけない小鬼の顔であった。何とはなしに、このままずっとこの顔を見続けるような予感があつて、それでいいのかどうか、迷う気持ちも若干わいた。振り払うようにして寝返りをうつ。

その衣擦れが耳について眠れなかった。夜の白々と明けるより前にどうか浅い眠りについた。

霊夢が昼過ぎに目を覚ました時、鬼はいなかった。書き置きも特段ない。どこへ行ったかと思ひ境内をぶらついて見るが、姿は見あたらなかった。すぐに帰ってくるだろうと思ひ、遅い朝兼昼飯を食べ、それでもまったく気配が見あたらなかった。

「二人分だと思つて、たくさん食料貰つちやつたじゃないの」

独りごちるが、誰も聞いてはくれない。広い家が、なおさら広く感じられる。

元に戻つただけだ。初めから、一人だった。一人きりの家だった。

お茶をすすめるだけでも時間は過ぎていく。

昨日の儀式の結果を一つ一つの札に分けて、託宣として書き付けていく。これはそれぞれに家に渡すものだ。一人きりだと集中して出来る。それでも不意に顔を上げた瞬間に、帰つてはこないものかと思わないではない。

外は、久方ぶりの曇り空だった。陰影をふくんだ黒雲が空を占め、ごろごろと嵐の予感を含ませて唸っていた。

「今日ごはん食べないのかしら」

それならそれで用意があるものを。

雑念にとらわれ、誤字をすればまたそれは書き直した。そのように心を惑わす鬼をほんの少し恨まないではなかった。

と。

不意に気配を感じて土間へ急いだ。

「なんだ、あんたなの」

霊夢は失望の声を漏らした。そこにいたのは八雲紫であった。ふうわりと広がったスカートが、狭い土間にひどく邪魔そうだった。

「ずいぶんなお言葉ですわ」

「萃香が帰ってきたのかと思ったの」

「ずいぶん仲むつまじいこと」

「……何が言いたいの」

「いいえ。何にも」

くつくつと喉奥で笑う。霊夢にはあざ笑っているかのように聞こえる。

「鬼『神』とも申しますし、巫女が使役するにうってつけかもしれませんわね」

「ふざけないで」

「神託を、感じたのでしょうか？ 素直に従えばよろしいものを」

「あの神託は間違いよ。だって鬼と結婚する巫女がどこにいるの。そもそも神にそれを問うたこと自体が間違っているのだから、間違った答えしか返ってこないでしょう」
そう言いきって、それから後悔した。

紫は、毘にかかった小鳥を見るような、そんな笑みを浮かべていたのである。

「だ、そうよ。伊吹の鬼」

すぐ後ろを指さす。嫌な予感に振り返る。

開いた隙間の中に、小鬼がいた。よろよろとした足取りで転がり出る。

「霊夢」

言葉は震えていた。

「はやく言ってくれていたら良かったのに」

ぽろぽろと涙を流していた。

「一緒にひつついて邪魔なんてしなかったのに」

泣きじゃくりながら萃香は言った。

霊夢は、それを聞いて胸の中がざわめくを感じる。そうじゃない。自分の言いたいことはそういうことではない。

「あのねえ、そうじゃないでしょ」

ぽん、と頭を軽く叩いて、それからぐしゃぐしゃとかき混ぜてやる。

「結婚っていうのにあんたがあんまりこだわるから変だなんて思っただけ。あんたと一緒にいるのは嫌じゃないのよ」

途端に泣き止んだ。びっくりしたような顔をして、萃香は見上げている。

「ほんとに？」

「ほんとほんと」

「ぱんつ破いたけどいいの？」

思わず苦笑する。

「ぱんつじゃなくてドロワーズ。いいわよ、あれぐらいなら。あんまり何度もやられると困るけど」

それでも萃香はぴんと来ていない様子だった。霊夢はそつとひざまずいて、ほつぺたをそつとつねってやる。涙で濡れていた。

「お餅搗いてくれたし、蓬も摘んできてくれたでしょ。卵も集めてくれたし、荷物運びも手伝ってくれた。あんたはいい子よ。役に立つの。だから一緒にいて欲しいのよ」
口の端っこをぎゅぎゅつと無理矢理持ち上げてやる。ぷにぷにした赤ん坊みたいな

ほつぺたは指から滑りそうに弾力に富んでいる。

「笑いなさいよ、あんた、馬鹿みたいにへらへら笑ってるのが一番似合うわ」
まるつきり子供みたいに騒がしくて。

胸をときめかすような、身を焦がすような恋路とは無縁だけれど。
それでもきつと一緒にいる相手なのだ。

雨が、降り始めた。

傘は持っていなかった。

必要はなかった。

今日は外に出る必要など無いのだ。昨日のもらい物がたくさん残っている。

さあ、今日の献立は何にしよう？ それから明日と明後日も。これから半年間と、
それからもつと先の幸せなごはんを、二人で一緒にどうやって作っていきこう？

「泣いたらお腹^{なか}空いたでしょ」

「うん！」

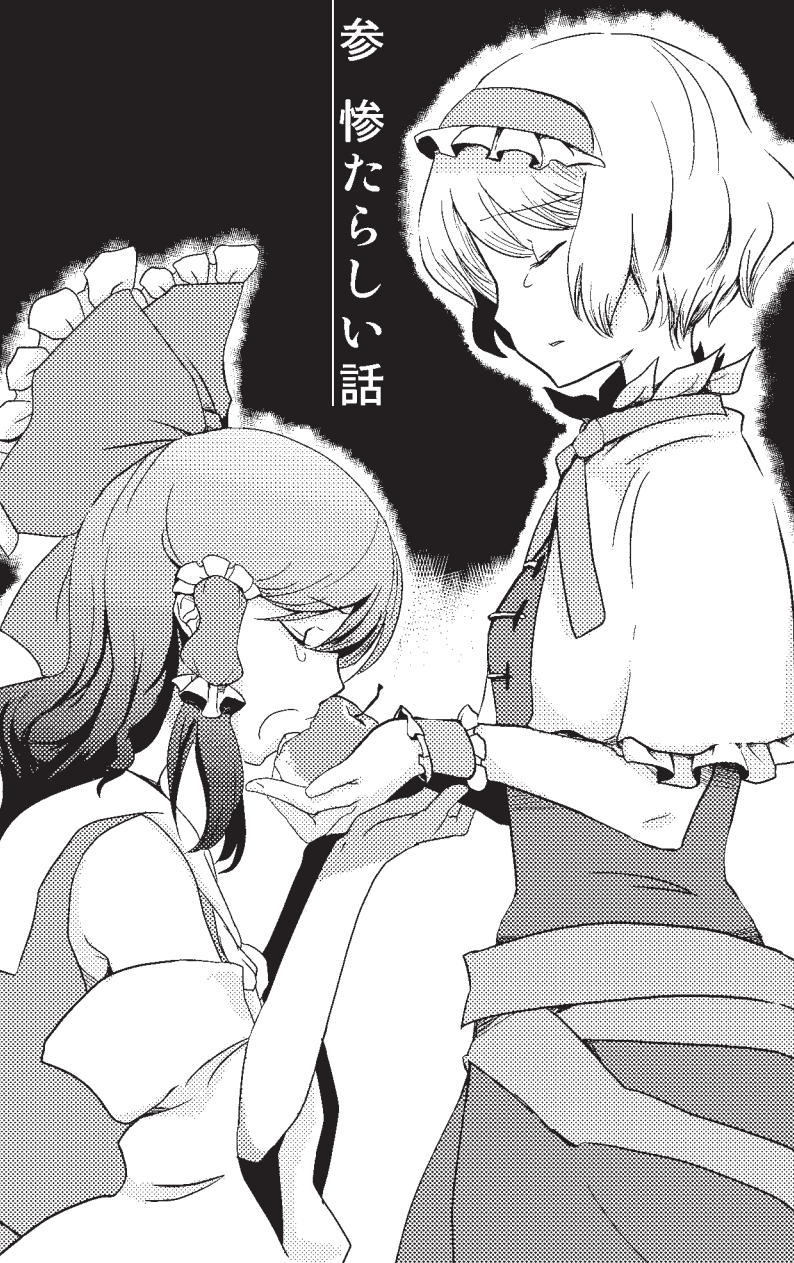
また手をつないで、二人の日々は過ぎていく。

八雲紫はそつと隙間を閉じて、見守ることにした。

かくして、博麗霊夢は幸福な生涯を過ごし、そして死んだ。
そのようにして、幸福というものが定義されたためである。

博麗無き世に幸福は無かった。故に、世界は繰り返された。

参
惨たらしい話



博麗靈夢は、ため息をついて縁側に腰掛けていた。

社に蝶^{やしろ}。靈魂の如くに白く、柔く飛ぶ。靈夢はそれをただ見るともなく見ていた。

あるいはそれは自らが飛ぶべき時間を間違えただけの蜻蛉^{かげろう}かもしれないなかった。透けるような緑白色をしてまとわりつく終わりがけの夏の湿気をくぐりぬけて飛んでいる。

誰を待つ訳でもないが、博麗靈夢はほおづえをついて、縁側に腰掛けていた。朝餉^{あさげ}はとうに食ってしまった。傍らに緑茶。出がらしであるが、熱ければ食後にはそれで十分。どんなに暑い夏でも煮えかえるような茶を飲むのが靈夢の習性だった。

ふ、とまた一つため息をついた。

外を見やれば今にも泣き出しそうな曇天である。蒸し蒸しと空気がぬるく辺りに立ちこめている。昨日までは夏らしく輝いて暑い日だった。それが何故か今日に限っていつまでもぐずぐずとして定まらないような天気である。

不意に靈夢は思い出して唇を歪ませてしまう。昨晚の宴会のことだ。いつもは喧しいばかりの白黒の魔法使いが急に立ち上がって叫びだしたのだ。

「アリス、結婚してくれ」

辺りは騒然となった。皆、気の良い酔っぱらいである。どうするどうすると問題の二人を取り囲む。

座敷の中心に押し出された人形遣いは、目を閉じて黙ったまま一度大きく息を吸い込んだ。自分を落ち着けるためなのだろう。

そして何事も無かったかのように冷静な顔をして、こう言った。

「嫌よ」

そのあまりにも端的な言い方に、宴会場はしんと静まりかえった。

「な、何でだよ」

「嫌いじゃないけど、好きでもないもの」

その言葉にどっと会場がわき上がった。何かの冗談のように聞こえたのだろう。

霊夢は、それどころではなかった。突然、胸の内がどくどくと沸き立ってきた。意味は分からなかった。理由も、判らなかった。けれどアリスの端麗な言い方に胸の内がえぐられるようだった。冷たい氷で出来た刃で、小さな心臓をくりぬかれるみたいな気持ちになった。

自分でも知らぬうちに切ない恋をしていたのだった。けしてかなわぬ片恋を。

外から聞いているだけでそうだったのだ。直接言われた魔理沙の方は、それどころ

ではなかっただろう。

ほとんど燃え尽きたように虚脱して、ぺたりと畳の上に座り込んでいた。心配した河童や本読みがまわりを取り囲んでぺちぺちほつぺたを叩いていたぐらいだ。

それでも宴会は続いた。何事もなかったみたいに、大騒ぎは続いていた。歌うものは歌っていたし、踊るものは踊っていた。

誰かの胸を傷つけた当の人形遣いは、その端正な顔を歪ませることなく、ただ一人静かに酒杯を傾けていた。

それが昨晚のことである。

昨日の夜からずっとため息ばかりついているのはそのせいだった。アリスのことを考えると、胸の中はじんと熱くなるのに、頭の芯のところは不思議なほど冷たくなる。どうしたらいいのか自分でも判らない。

そうしてようやく自分は恋をしているのだと自覚した。こんなことは初めてのことであった。少し前まであこがれていた空想の中の恋とは違う。もっと切なくて切実なものなのだと感じた。

宴会の帰りがけ、彼女が、少し風邪っぽいのだと言っていたのを聞いた。霊夢はそれを覚えていた。様子を見に行こうかどうかとしようかと、朝からずっとそれを思い悩ん

でいる。

今日は雨が降りそうだとは思っていた。けれどそれを厭わないぐらいには、気に掛けていた。

『ぐらいには、気に掛けていた』？

そんなのは欺瞞だ。だって朝からずっと、アリスのことを考え続けているのだ。それが恋だ。ちりちりと心のひだを焼き尽くして浸食して、全身を燃え上がらせて、やがて何もかもを滅ぼしてしまうような片恋だ。

ゆうらりと重たい羽を蠢^{うごめ}かして、蝶は曇天に飛んで逃げた。湿った風の吹き付けるのを嫌ったのだろう。

それに釣られるようにして、霊夢は重たい蛇^{じや}の目の傘^めを持って、空を飛ぶことに決めた。どうせじきに雨が降るのだから、拝殿も弊殿も、雨戸は閉めたままでもいい。家にいる必要はない。

雨の日に、本を読むよりもやりたいことがあった。

林檎^{りんご}が、食べたいな。

昨日、アリスがそう言ったから、霊夢はわざわざ人里まで足を運んで、小粒のよく

身のしまった紅い宝石のようなそれを六個も買ったのだ。けしてゆとりがあるわけはない神社の会計から考えるとそれは大変痛い出費だった。

まだ^{わせ}早生の、珍しい果物はなかなか出回らない。昔ながらの農家がほとんどだから、夏に生る^な新種の林檎などは病人が食べるような高い物だった。

本当に、何かが欲しいなんてなかなか言わないひとだった。

いつもどこか遠くばかり見ていた。

折に触れて誕生日や記念日の贈り物について尋ねても、どうでもいいような返事ばかりして、そのたびに霊夢は寂しかった。そのさみしいのがどうしてだか、そのときどきは判らなかった。

だから風邪を引いたと無防備に口に出してくれた時、はつきりと欲しいものを口に出してくれた時、霊夢は嬉しかったのだ。

彼女を喜ばせることが出来ると思って、心の底から何でもやろうと思った。彼女のためなら自分は何だって出来るような気がした。向こう見ずで、くすぐったくて若い恋の気持ち、世界の全てを輝かして見せた。それがどれだけの絶望に変わろうとも構わないと思った。それが身を切るような胸の痛みに変わるかもしれないと思った。その痛みこそが生きる幸福と同値なのだと感じた。

途中の道で、黒白の魔法使いに会った。

愚痴っぽく、それでも微かな優越感と見せびらかしを込めて、アリスが風邪を引いたことを告げた。

お前は知らないのだろう。

もう、お前が出る幕ではないんだ。

暗に込めただけで、彼女は背を向けていった。同情はしなかった。先にひどいことをしたのは、魔理沙なのだと知っている。あんな風に大勢の前で恥をかかせたのだから。

だから、もう出来るだけアリスに近づいてほしくなかった。

アリスの家の前に着く。小さな趣味の良い洋館で、中はいつでも紅茶と花の品良い香りが立ちこめているのを知っている。

一度深呼吸をして、玄関をノックする。初めての時ほどではないにしろ、やはり緊張した。胸の中で小鬼が飛び跳ねるような気がした。

「はい」

微かにくぐもったような声で返事がある。

「私よ。開けて」

そう言ってから、それだけで誰なのか通じるかどうか分からないことに気付いた。

「ああ、霊夢。今、開けるわね」

彼女が気付いてくれたということが、嬉しかった。

そんな些細なことで、幸せを感じられること自体に、戸惑いがあった。それでもアリスの顔を見るだけで心がじわっと温かくなった。自分が昨日から求めていたのはこれだったのだと感じた。

恋を、しているのだった。

「お見舞いに……林檎、安かったから」

わざと嘘をついた。貴女のために買ってきたなんて、野暮つたい言い方はしたくなかった。アリスなら絶対そんな言い方をしないだろう。そう思った。

でもきつと見抜かれてしまったのだろう。

「悪いわね」

そう言ってアリスは憂鬱そうに微笑んだ。

その笑顔はかすかにやつれていて、霊夢の心の中をざわつかせた。

と、食堂のテーブルの上に、スープ皿があつて行儀良くスプーンが添えられているのが見えた。

「あら、ご飯中だったかしら？」

「ううん。なんだか食べる気がしなくてね」

ちらりと台所のコンロに視線をやる。追いかけるようにして、霊夢もそちらを見た。小さな鍋にまだ半分ほど野菜スープが残っているのが見える。テーブルの皿は猫のミルク皿ほどに小さく見えた。

どうやら作るところまでで、気力が尽きたらしい。

理知的で都会派で合理的な彼女らしくないといえば、そうとも言える。でも、繊細で壊れやすい人形のような彼女らしいといえば、そうとも言える。結局の所、どちらが本当のアリスなのか、霊夢には分からないのだ。

それほど多くのことを、霊夢は知らない。

「要らないはずなのに、不思議ね。身体が自然と欲しがってしまうの」

咲く前に摘み取られてしまうつばみのような笑顔で、アリスは言った。

「食べる気になれないのに」

意味なんてないんだわ、と彼女は言った。

そんなことを彼女に言わせたくないと思った。それは自分でも驚くほど強情な気持ちだった。

彼女には、健やかに笑っていて欲しかった。

「いただくわ、それ」

立ち上がって、霊夢は言った。

「え」

「誰かが食べてると、一緒に食べたくなるって言うでしょう」

そう言って、微笑みかけた。

「ええ……そうね」

「一人で食べるのも味気ないでしょうから、付き合ってあげる」

わざとそんな、押しつけがましい言い方をしたのは、照れ隠しだ。自分が誰かに対してそんな親切なことをしているなんて、恥ずかしくて認めたくなかった。

「ありがとう」

彼女の翳りが微かに晴れたように見えた。

軽く温めただけのスープの匂いが部屋の空気を和らげる。風邪を引いたという彼女の表情はまだ優れなかった。それでも二人で向かい合わせになって同じものを食べて

いると、まるで家族になったようなこそばゆく幸せな心地が全身をぼかぼかに温めてくれるように思われた。さいの目に切った人参の赤さもジャガイモの白さも玉葱の甘みもトマトの酸味も、全てが一体になってお腹の中で満ちているような心地だった。でもなぜだか不安な気持ちがかき立てられもした。この味は、いつかどこかで食べたような気がした。それを思い出さなくなくて、霊夢は口を開いた。

「美味しかったわ。ありがとう」

「ううん。こちらこそ」

アリスの笑みは柔らかい。そうやって微かに唇の端を持ち上げるだけで、霊夢の心が強く躍ってしまう。

「林檎、剥くね」

「あ……うん。ありがとう」

少しとまどったような彼女の声になった。何か困らせるようなことでもしたのだろうかと思っただけですぐに不安になる。

彼女の声ひとつ、溜め息ひとつですぐに左右されてしまう自分の弱い心に戸惑う。いつから自分はこんな風になってしまっただろう。

「あんまりお腹空いてないんだよね？ 大丈夫。ちゃんと小さめのを選ぶから」

「あ、ううん。そうじゃないの。ごめんなさい。いただくわ」

アリスは小さくかぶりを振って、自分から紙袋へ手を伸ばした。

「あっ」

林檎が一つ転がり出て、テーブルの端から落ちそうになる。

それを拾おうとして、二人の手が重なる。

そのまま、見つめ合った。

目をそらそうと思うのに、吸い込まれるような深い青色に見入ってしまった。離せない。自分の吐いた息がもやになって、そのまま空気中に止まりそうだった。

「……霊夢？」

名前だけ、呼ばれた。

霊夢は答えない。答えられない。自分が口を開けば、たったそれだけで微妙なバランスが崩れてしまいそうな気がした。

ただ無意識のうちに自分の両手で、彼女の冷たい白い手を包み込んでいた。

林檎は再び回転をはじめて、あっけなく床へ落ちた。

「え、っと」

アリスの方から目をそらした。

霊夢はまだそらさない。じつと彼女の目を見つめている。

「りんご、落ちてしまったわ」

アリスが誤魔化すように笑って、机の下へかがみ込んだ。

そうされて初めて、霊夢は自分が不作法にアリスの手を捉えているのに気が付いた。慌てて離す。

「ご、ごめん。つい……」

そこまで言いかけて、自分が何を言おうとしているのかよく分からなくなって黙った。顔がひどく熱かった。

「ナイフとお皿、取ってくるわね」

アリスがそう言って背中を向けている間、霊夢はこめかみを両手でぎゅつとはさんで、熱くなった頭を冷やそうとした。さっきまで触れていたアリスの冷たい手とは違って、子供っぽい自分の小さな手はすぐに温^{ぬく}もってしまふ。林檎を手にとって眉間にあてれば、ひんやりと冷たく、しっとりしていた。

林檎をむかせてもらった。

「風邪引きにやらせたら、危なっかしいでしょ」

保護者気取りでそう言った霊夢を、アリスは微笑んで見守っていた。そこにはまるで、子供が頑張るのを応援している母親のような余裕があった。

林檎の紅い皮は、上海人形シャンクイのリボンに似ていた。

霊夢がそう言うのと、アリスは指先で皮をつまんで、自分の髪の毛のそばまで持ってきた。「似てるかしら？」

そう言って可愛らしく微笑む彼女の顔を、霊夢はまともに見られなかった。

「うん」

可愛いよ、すごく。

そう言いたかったのに、うまく言葉が出なかった。

「でもね、霊夢。あなただって紅いリボンをしているじゃないの」

「あ」

言われて気が付いた。自分のことまでは気が回らなかった。

「こうしたら、お揃いなね」

そう言われて、どきまぎした。手元に集中しようとしてもなかなかうまく出来ない。

「で、できたよ……りんごの兎」

耳が片方短くなってしまったのはアリスのせいだ。アリスが二人でお揃いとか言う

からいけない。そんな甘いことを言って、頭の中をくちやくちやのしわしわにしてしまうから悪いんだ。

そんな口答えをしたいのに、口が上手く動いてくれなくて、ただ霊夢は二匹目の兎を作るので精一杯だった。

「ありがとう」

アリスは林檎を手にとって、じっと見つめた。

「この兎、霊夢に似てるわね」

「そ、そんなことない」

「だって、紅くて、白い」

それだけのことよ。どこか冷たく聞こえる口調で、アリスは言った。

持ち上げてから、すぐに突き落とすようなことを言う彼女が、少し霊夢には悲しかった。どうとも思われていない風なのが悲しかった。

霊夢はそれを隠すようにして、くしゃりと音を立てて果実を噛んだ。果汁は思っていたよりも溢れないで、すかすかな触感がした。紙のように味のない林檎だった。触れた時は確かに詰まっていると感じたのに。

「ハズレね、これ」

「そうね。見た目は綺麗だったけれど」

アリスはそれでも微笑んでいた。

優しかった。どこか遠くにいるように、優しかった。

「……アリスは、好きな人、いるの？」

気が付いたら、そんなことを訊いていた。

言ってしまったから口を押さえたけれど、もう遅かった。

「知りたい？」

アリスはわざと戯^{わど}けるように、そう言った。霊夢はそれには気をやらずに答える。

「……ん。まあ、それなりに気になってる」

「そうね。難しいわね。好きなのか、そうでないのか、私には判らないの。自分のことを大事にされなければ好きではないのかもしれない」

アリスの声は悲しそうだった。

「きつと貴女なら大切にしてくれるのでしょね。あの人ではなくて」

まるで人形やモノに対する言い方みたいだった。

「誰のこと？」

「誰でしょうね。まあ喻えるなら王子様かしら。白馬に乗った、ね。そんなのいるは

ずはないのに」

そう言って、くつくつと笑った。少しも可笑し^{おか}そうには見えなかった。

「キスしていい？」

霊夢の言葉が、二人の間に落ちた。誰も拾ってはくれない独り言みたいだった。

「ご自由に」

無気力な答え。

それにただ吸い寄せられるようにして、霊夢はテーブル越し、触れるだけの口づけをした。

アリスは不可解なモノを見る目で霊夢を見ていた。

「風邪がうつるわよ」

「貴女のものなら何だって欲しい」

そう口走ってしまってから、一気に顔が熱くなった。自分で自分の言ったことが信じられなくなつて、頭の中が真っ白くなつて、ああとかううとか言葉以外の音が口から漏れて、まともにアリスの顔が見られなくなつて、思わず背中を向けてへたりこんだ。

「……うつわあ」

アリスに鼻で笑われた。

「なっ、何よそのうわあとかそういうの止めてよそんな目で見ないでよ」
頭を抱え込んで身を震わせた。

「だって、そんなことを霊夢が言うとは思わないから」

「つい口から出ちゃったんだからしょうがないでしょ、ただの事故よ事故」

「まあねえ。いいけど」

小さく肩をすくめた。

「そろそろ眠いの。寝させて」

それは静かな拒絶だった。霊夢は、許しなくなかった。

自分勝手なのだと知っている。アリスの声の、ひどく囁^かれているのも知っている。

風邪は寝なければ治らないのも知っている。

それでも、眠らせたくはなかった。

ぎっとベッドのスプリングが鳴った。

霊夢は我に返って寝室の側を向いた。

アリスが布団を捲り上げて、シーツの間に身を入れているところだった。

音もなく、それを追う。身体を反転させて抵抗する手首を上へ押さえ込む。

むりやり舐^ねるようにして深くキス。

彼女の唇をむさぼるようにして味わった。林檎よりも鮮やかで、したたるような汁に満ちた甘い果実だった。

抵抗は至極、弱かった。体重をかけて身体を押し付けてしまえば簡単にベッドの上に転がすことが出来た。

「やつ……」

アリスの声は弱々しい。片手でパジャマのボタンを二つ外す。下着をつけていない胸が露わになる。手が勝手に動き出す。柔らかな乳房に触れて、暴走する指先。くにくいと突起を揉みしだく。

彼女の身体は暖かだった。冷め切っている手とは違って。熱く汗で微かに湿っている胸元へ舌を這わせた。

そのとき。

がちやりと、音がした。

二人で同時に扉を見る。熱くなっていた肌が一気に冷める。

玄関を、誰かが開けようとしていた。何度も苛立ったようにドアノブを捻る。やがて音が止むと、ちやりちやりと軽い金属音がした。ざりつと鍵穴が悲鳴を上げた。

アリスが立ち上がった。

「……ここにいて」

「え、」

「いいから。隠れてて」

何か言い返す暇もなかった。

むりやりベッドの奥へ押し込められて、布団の海に溺れたような気分になった。
玄関の扉が開いた。

アリスのパジャマのボタンはかろうじて直されていた。

「おう、来たぜ」

隙間からかいま見たのは、黒と白のエプロンドレスの端だけ。

それだけで十分な気がした。

どうして、彼女が。

頭の中が一瞬にして冷めた。嫌な汗が噴き出て、何もかもが真っ白に染まる。

「――」

アリスが遠くで何か話している。きつと言いつけているんだろう。

さりげなく寢室の扉を閉めて、霊夢を隠して。

でも、遠すぎて何も聞こえない。あまりにも、彼女は遠くに行ってしまった。そんな気がした。

誰もいない他人の部屋は孤独をかき立てる。たといそれが、彼女の匂いのする布団の中だとしても。

本当の彼女がいるのは此処じゃない。

扉の向こう側から微かに漏れ聞こえてくる、誰かの会話。言葉は聞こえないのに、気配だけが伝わってくる。楽しそうな、親しげな会話。

（好きでも、嫌いでもないんじゃない？）

馴れ馴れしく語りかける魔理沙の乱暴な口調に、アリスは呆れながらも楽しそうに機知に富んだ答えを返す。いつもの気だるげで無気力で優しいだけの彼女ではない。

（大切にされなければ、好きではない、か）

それならば、大切にされていれば好きなのか。

こっちの方がずっと本当の彼女なのだ。無気力に、怠^{だる}そうな彼女ではなくて。

そのことに堪えようもない嫉妬が混ざる。胸の奥がじりじりと焦げ付いて、吐きそうになる。体中をかきむしって、内側の熱を全てさらけ出してしまいたい。

自分の喉に手をやって強く爪を立てる。痛くて、息苦しい。それでも、内側で燃え

ている何か別のモノよりずっと軽い。

自分の力の弱さを悔やむ。このまま一息に握りつぶせるほどの力があれば良いのに。そうすればもう、苦しくはなくなるだろうに。

やがて、彼女はひとりで戻ってきた。

手には瓶詰めが一つ。

アリスは笑んでいた。嬉しそうなのを隠すような、はにかむような、そんな笑顔が、なおのこと印象に残った。

「桃のシロップ漬けだって」

霊夢の視線に気付いたのか、アリスはベッドサイドにそれを置いて、言い訳するようになんと言った。

それは何の弁解にもなっていない。そんなことでは誤魔化されない。そう言いたいのに、唇はただわななくばかりで、言葉にはならない。

「魔理沙も来るなら来るって言えばいいのに。こっちだって準備とか掃除とかいろいろあるんだからホントに迷惑だわ」

常に似合わない早口で、アリスは言う。言葉の余裕とはうらはらに、彼女が浮うわつ

ているのを感じてしまう。

アリスはぼすん、とベッドに座り込む。スプリングが揺れる。

気を抜いた風なのが、尚のこといけない。魔理沙の前では緊張し通しだったのだらうと勘ぐってしまう。霊夢の気持ちはざわめいたまま止まらなかった。

これは、良くない。もっと落ち着かなければならない。そうでないとろくでもないことを口走ってしまう。

知っているのに、止められない。

「ねえ、そういうえばさっきのスープ」

霊夢はゆっくりと這いあがる。ベッドの縁から立ち上がる。アリスを見下ろして、言った。

「なんだか、魔理沙が作るのと同じ味がしたよ」

「……あれは私が作ったわ」

「でも、同じ味だった。貴女が欲しいのは、魔理沙が作ったのと同じスープなんだ」
重ねて霊夢が言くと、アリスはただ黙って答えなかった。雨の降る音がしていた。気がつかなかった。今になって気がつくなんて。

彼女は都合が悪くなると黙る。そうすれば、それ以上責められないと知っている。

黙りこくった人形に対して愚痴るのも退屈だから、その内に相手が黙るのを知っていて、青い目をした人形になりすます。

そんな狡い^{ずる}所まで、好きになれたら良かったのに。

「きつと、本当は、林檎じゃなかったんだ」

霊夢は言葉が続ける。自分で何を言っているのか分からなかった。

「林檎が欲しいのは、貴女じゃなかったんだ。貴女は、林檎を欲しがる誰かになりたかっただけなんだわ」

そして林檎を食べたら眠ってしまふんだ。

そしていつかキスで目が覚める。

林檎を持ってきた人間じゃなくて、ずっと待っていた王子様のキスで。

「本当のことを言ってくれば良かったのに」

アリスの王子様は白馬じゃなくて、箒に乗ってくるんだって。

「ちゃんとやってくれたら、買ってこなかった」

それ以上のことを言おうと思っているのに、正しい言葉が出てこない。自分が何を言いたいのかわからない。

ただ胸の内にざわめいている気持ち、意味のわからない言葉になって出て行けば

かりだった。

と、アリスが小さく溜め息をつく。

「それは嘘でしょう。私がどうしたって、貴女は買ってきた」

肩をすくめて、どうでも良いような顔をして、言った。

「私の気持ちも分かってくれなかったのに」

その言葉が何もかも灼いた。

頭の中が真っ白に焼き尽くされて、灰になって、冷えて、飛んで散らされていく。最後に残るのは真空。もう心には何もない。彼女が何か弁解をしているのだとして、もう耳からは何も入ってこなかった。

小さな拳が固まった。心はもう既に硬い。手の内には何もない。さっきまで触れていた彼女のぬくもりは、とうに消え失せた。熱は冷めていく。堪えようもないほど素早く逃げて蒸散していく。

（あっけないな）

冷めた気持ちの隅で思う。

（人なんて、どうせそんなもんか）

逡巡を振り切るように強くベッドサイドの机を叩く。びくりとアリスが肩を震わせ

る。瓶詰めがバランスを崩して床に落ちた。分厚い瓶は割れずに転がってベッドの下へ入った。

霊夢には不思議と自分の叩いた音が聞こえなかった。自分の頭の中全てが時を止めたみたい、曖昧で靄^{もや}が掛かっていて、まともに動いていなかった。拳の痛みさえ感じない。頭も心も全て凍り付いたように冷たく凝^こっていた。

「アリス、」

呼びかけた。声を荒らげるほどの力は残っていない。

力は全て拳に込める。

だから、霊夢の声は静かだった。

「愛していたわ」

そして、それは始まった。

まずは顔。他の何処よりも愛していたその白磁の人形の顔に拳を叩きつける。割れる砕けろとあり得る限りの思いを込めて右手を打つ。美しく隆起した鼻の上をへし折り、蒼く澄んだグラスアイを潰し、真珠の歯と薔薇のような唇を折り取って、整った顔を二度と見られないようにする。頬骨の堅さに手の骨が悲鳴を上げた。それでも打つ。ぐらり傾いた彼女のこめかみを大きく後ろから回転させた拳で殴り落とす。血し

ぶきが、巫女の白い袖を汚した。

その色は、林檎と同じ、紅。

ベッドの上に倒れ伏したアリスの顔を見る暇はない。悲鳴を聞く余裕もない。自分が彼女を殴りつけた音がエコーのように頭の中をぐらぐら流れる。

麗うるわしい金髪をつかんで、床へ投げ落とした。ごすつと床に頭蓋骨が当たる音がする。

「……っ、げふっ」

鳩尾みぞおちの上、尖った踵かかとで悲鳴ごと踏みつけにする。ぐうつと吐き出した彼女の息は深

い。床を踏み抜くつもりで、腹へ全体重を掛けて何度も踏む。げふっ、がはつと彼女が吐き出す息が強くなって、その内にぐちゅつとした水音が混ざる。饅すえたような酸っぱい匂いのする吐瀉物の中にはきつと先ほどまで食べていた林檎と野菜スープとが混ざっているのだろう、そんな気がした。

「れい、む……?」

名を呼ぶな。

殺せなくなる。

口の中につま先をめり込ませた。顎の奥、歯が食い込んでも噛みしめられない程の奥へ捻ひねってねじ込む。足袋の中まで唾液は滲しみない。それほどに分厚い白い布地。遠

い。体温も感じられないほどに。

喉奥まで踏みしめて、綺麗な彼女の声を潰して。みしみしと音を立てて開いていく顎の関節。首をねじ曲げて頬骨に踵を押し付けて、バランスを崩さないように丹念に顔を踏みつけにする。

それも、飽きた。

だん、と強く地団駄を踏むように踵を打ち付ける。竹を踏み抜いたような激痛が足裏に響く。それで構わない。痛みは頭をクリアにさせる。顎につま先をひっかけたままでもう一度強く脚を上げて、体重を掛けて踏み降ろす。金髪が宙に乱れる。

もう一度同じことをしようとして、脚を持ち上げた瞬間に外れた。糸が切れた人形のようにアリスの身体は倒れ伏した。

霊夢の息は、乱れていた。それほどたいした運動でもないだろうに、自分の吸った息が乾いて喉が焼けつく。空気が極端に粘性を増して肌の上にまとわりついてくる。不快だ。みんなしねばいいのに。自分が死ぬのと同じように。彼女が死ぬのと同じように。

アリスの歯まで折って砕けさせるほどのことが自分には出来そうもなかった。それだけの力がないことは残念だ。無力なのは、子供だからだ。小柄な少女の、人間の身

体。握った拳も小さくて臂力りよりよくもろくない。本当に殺す気でなければ何も殺せない。生まれつきの靈力が備わっていなければ、自分には何も出来ない。

そのままだがみこんで拳を叩きつけた。顔に喉に肩に腹に、弱い無力な拳を降らせる。自分の口づけした全ての箇所をかき消すつもりで腕をふるった。

遠くで獣の強く吠える声が聞こえた。それは自分の泣いている声だった。大きく口を開けて、遠吠えをするように、誰かを乞い慕う狼のように泣いていた。

疲れ果てて縋るように、靈夢も倒れ伏した。彼女の身体は死体のように冷たくなっていた。それでもかすかに上下する胸の呼吸のせいで、生きているのが分かった。

どうしたって、生きてしまふ。自分も、彼女も。

そのことは靈夢に途方もない憎悪を呼び起こした。身体が壊せないなら心を壊してしまえばいい。そう考えるのは必然だった。

掌を上に向けて、高ぶった感情と靈力を煉る。凝ったそれを小さく握りしめる。血に濡れた拳の内側に、熱い火の塊と冷たい氷の晶とが渦を巻いて球状を為した。

再びほころびた巫女の手の上には、小さな陰陽玉が一つ踊っていた。ぱちんと割れて二つの曲玉になる。

一つを自分の口の中へ含む。それは冷たくて甘い。雪の溶けるように溶けて消えて、

下腹で熱く凝る。

もう一つを彼女の口へ放るために、彼女の髪を引く。

ごとりと重い音を立てて、彼女の頭が転がる。それでも反対を向いて、逃げようとしていた。金髪を思い切り引っ張って、アリスの首を持ち上げた。ぐったりと弛緩した彼女が、腫れた目を開けて、こちらを見た。奇跡的にその青い目は澄んで綺麗なままだった。

霊夢は曲玉を指先でつまんで差し出した。

「食べなさい」

霊夢は、自分がどんな目をしているのか、その青い目に映っているモノを見るまで知らなかった。

「そして苦しみなさい」

闇の奥で光も返さない、死んで濁った魚の目をしていた。霊夢はそれをただの事実として受け止めた。何の感慨もそこにはなかった。

粘ついた血と吐瀉物と唾液とで汚れた歯をこじ開けようとして、出来ない。怯えてがたがた震えている彼女の顎を、自分の握力ではこじ開けることが出来ない。

力が無いからだ。無力だからだ。

彼女の吐いた林檎の紅い破片が乾いてへばりついた頬。それを肉ごと両手でつかんで、無理矢理間に指を食い込ませる。内側の粘膜が削れてぎちりと音を立てそうだった。

まだ林檎が林檎であつた時分には霊夢はその歯のことを真珠のようだと思つてゐた。今や林檎はかみ砕かれ消化液にまみれて吐瀉物に成り果てた。同様に血にまみれてぐらつて欠けているそれはもう象牙でも真珠でも宝石でもない。それはただの汚い小石になつてしまつた。

そこへ指先でつまんでもう一つの曲玉を押し込む。唇を押し当てて、たっぷりの唾液を送り込んだ。朽ちた鉄の味と饅えた林檎の匂いと胃液の酸味がした。唇と唇の間に糸が掛かつて、そして切れた。

この分かたれた陰陽玉は博麗に伝わる技の一つだった。歴代の巫女は時代によっては望まぬ結婚を強いられることがある。そんな心など混じりようがない儀式的な交わりの時に用いる技だ。巫女に与えられる屈辱と痛みを回避するためだけにその技はあった。

だが、霊夢はそれを屈辱と痛みを与えるために使うことにした。

互いに呼応する分かたれた陰陽玉は術者の中で霊力を変換させて、性的な昂揚を高

めていく。陽の珠を飲んだ霊夢には陽根を与え、陰の珠を飲んだアリスには女陰の湿り氣を増大させるはずだった。

アリスの服を一枚一枚剥いでいく。ボタンを外す。さっきは簡単に外れたのに、がたがたと指が震えてなかなか外れなかった。彼女の腰を上げて、桃を剥くようにパジャマのズボンと下着とを取り去る。手に力が入らなくて、何度も引かなかった。

滑らかにはいかなかった。誰かを壊そうとしているのに、上手くいかなかった。本質的にこういうことには向いていないのかもしれないなかった。

白いアリスの身体の上には痛々しい青あざがいくつも出来上がっていた。その傷でさえどこか作り物めいていて、氣の狂った芸術家が人形の上にでたらめに絵の具を載せたようにも見えた。それもまた、どこまでも偽物な彼女には似合っていた。

自分の服もゆつくりと脱いだ。一枚一枚を怖れるように取り払った。全て脱いでしまえば、壊すことが決定的になってしまう。それは怖かった。

その間にもじわじわと身体の熱が高ぶっていく。はさり、と布地が床に散らばる音が、静かな暗がりの中へ落とされていく。その音が一つ消えていくごとに、霊夢の中の熱い欲情は燃え盛っていった。

ノイズのように、雨がささやかに降っていた。

それは、感情とは切り離されていた。ただ霊力が変換されて自動的に燃え上がって
いくだけのものだった。

やがて、白い裸身が闇の中に浮いた。痛々しいほどに痩せた霊夢の身体が、アリス
の上に覆い被さる。

痣^{あざ}の上へ詫びるような口づけがまた降る。霊夢の舌先が傷を舐めるごとにアリスは
呻^{うめ}いた。

「痛いね」

ただ確認するだけの口調で霊夢は言った。

「ごめんね」

詫びる口調ではなくて、ただ機械的に言った。

切れた唇の上をねつとりと舌先が這う。血を舐め取るように強く蠢^{うごめ}いて止まらない。

強く抱きしめても邪魔な肉棒が腹の間で自己主張して、ぴったりと身体がくっつか
なかった。涎^{よだれ}を垂らした先端がアリスの白い平らな腹に触れて、糸を引いた。

霊夢の陽根はただ蹂躪^{しよく}するためだけの道具でしかなかった。そのために生えて、そ
れだけのために生きて、やがては抜け落ちるだろう。

別にそれで良かった。何もかも、早く終わってしまえばいい。

「ごめんね、」

静かな無機質な声で、ただ口走っていた。

「ごめん。本当に、ごめんなさい」

熱に浮かされるようにして、霊夢は詫びていた。心の底から詫びているわけではなくて、ただの習慣や惰性の産物として、その言葉は出ていた。

アリスの秘所へ指を滑らせた。それは露が降りたようにしつとりと濡れていた。

それが恋愛感情のせいなどではないことを霊夢は知っている。陰の曲玉のせいで生じた、ただのまやかしであることを知っている。

それでも構わなかった。挿^いれるときに痛いのが嫌なだけだから、濡らしておいた方が良い。そうやって欺瞞^{きぼん}を続けてその果てに待つのが崩壊であつたとしてもそれは別段構わなかった。

中指でぐじゅぐじゅとかき回す。肉の管は絡みつくようにして霊夢の指を吸った。

まるで別の生き物のように強く蠢^{しゅんどう}動する。脳がそれだけでいかれてしまいそうなくらい気持ちいい。女陰のびらびらした感触に神経ごと食われてしまうような気がした。

自分の呼吸が煩^{うるさ}いと感じるほどに、霊夢の息は上がっていた。興奮して吐息が燃えるように熱い。早く終われと思いつながら、この快楽に溺れたままずっと生きながらえ

ていたいと思った。苦しくて気持ちいい。矛盾した人格と感情。どちらも同時に本当の霊夢だった。

「二本、挿れる、ね」

気が付けば途切れ途切れの息で霊夢はささやきかけていた。とろけたように甘い声だった。自分で自分を別人のように感じた。

中指をちゅぽんと引き抜いてから、人差し指を加えて、再度挿入する。

ぐっと圧力が強くなる。ぬるぬるに滑る愛液がなければきつくて動かせないぐらいにアリスの蜜壺は狭い。力を込めて強く激しく動かすごとに、まるで菌のついた化け物みたいな膣が食らい付いてきて霊夢の指を離さなかった。

「っ、う、あ……」

声が漏れ聞こえてきた。見上げればアリスが泣きながら笑っていた。苦痛に歪めていた顔が綻ぶようにして愉悅の笑みへと変貌を遂げていく。

ああ、彼女も気持ちが良いんだ。

それが嫌で泣いているんだ。

そのことに堪えようのない悪心。同時にこみ上げてくる喜び。

気持ち悪くて悲しくて苦しくて、

気持ちよくて嬉しくて楽しい。

現存する全ての感情が頭の中でない交ぜになって、気が狂いそうになる。

アリスの白くて丸い膝の裏へ手を滑らせる。片脚を上げて肩にかけた。ふっくらとした太ももがかすかに震えた。

「っ、く……」

奥を強く指先で突く。硬い感触が伝わってくる。彼女の深奥に触れることは途方もない喜びだ。

いっそのこと、強く締めつけてくる肉壁をぶち抜いて内臓ごとかき混ぜてしまいたくなるほどに残酷な気持ちと呼びさます。

「う、っ、ふああっ……!」

彼女の声が高くなる。愉悦と快楽と悲しみと痛み。何もかもが限界をとうに超えて、壊れたように笑って泣いていた。

肉棒がだらだらと欲望のしずくを垂れ流していた。

初めて生やしたそれは滑稽なほど強くいきり立って、アリスの中に入りたがっていた。指を抜いて、亀頭をたぷりと愛液とカウパーとで濡らしてやる。それだけでびくくんと脈打っていた。

身をこごめて入り口にそっと添えた。

「っ……いやあ……」

アリスの身体が緊張で強ばっているのが分かった。

わざと焦らすようにして、霊夢は添えたまま動かさない。陰門がひくひくと震えて蠢動しているのが分かった。いやらしいぐらいに愛液が零れて、太ももをべたべたに汚してしまうのは雌の浅ましさを表していた。

「嫌、いや、やあ……やめて……」

そう言うごとにアリスの穴は希^{こいねが}うように涙を流す。だからと蜜を流して絨毯敷きの床が黒く濡れていた。霊夢のまやかしの男根を喰らうために流れ出ていく潤滑液は尽きない欲情の具現だった。

そろそろ、限界だった。

「……ッ！」

大きくて太くて、本当なら到底入りそうもないそれで、彼女の身体を思い切り引き裂いた。

「やああああっっ」

拒絶の声が高く上がる。耳をつんざくほどの悲鳴。彼女を引き裂くと同時に自分も

引き裂かれたような錯覚に陥る。それほどの快樂、嗜虐、恍惚。その一度の動きだけで達しそうになるほどの強烈な性感で頭が一瞬だけ白くなる。奥歯を噛みしめて耐えた。

そのまま勢いに任せて動いた。

「やつ、ああつ、ふあ、んつくああ……」

悅樂の淵に飲み込まれて、二人で溺れていく。

じゅぶじゅぶと水音を立てて、穴の中でもがくように腰を振って、無我夢中で自我を叩きつけて。

肉と肉のぶつかり合う醜い激しい音が聞こえる。

アリスも自ら腰を振っていた。口の端から涎を垂らして、色欲に耽溺する犬に成り下がっていた。

犬にはもつとふさわしい姿があるように感じた。

肉棒を一度引き抜いて、アリスの身体を反転させる。四つ這いにさせて膝を立たせる。

彼女はもう、されるがままになっている。蒼く綺麗だった瞳はすでに愉悅で濁りかけていた。博麗の秘技に勝てる者はいない。歴代の巫女でさえ屈服させ耽溺させるほ

どの力なのだ。

「ああ、ううあ……っふあ」

アリスは肩で息をして、来るのを待っている。尻を霊夢の側に差し出して尾を振るようにして性的快楽を期待している。霊夢がそう言えば菊門ごと差し出しそうなほどに、従順な獣に成り果てていた。

再び思い切り貫いてやる。

「やあつ、ん、ふあうあああつ………！」

明らかな艶が混じった声で、アリスが啼く。恥もプライドも無くして、ただの雌になつて腰を振るだけの生き物になる。自分から高く腰を掲げて、憚ることもなく大声をあげてよがっている。

霊夢はもうそれを、悲しい、とは思わなかった。

他に感じるべきことがたくさんあった。頭の中をぐしゃぐしゃにかき回してしまうほどの激しい動きや波のように押し寄せてくる快感やこみ上げてくる圧倒的な欲情で小さな器が一杯になっていた。揺れれば揺れるごとに器の縁になみなみと注がれた感情が零れそうになる。

「ああつ、ふあ、んんっつ、ううあ………」

あられもない声を上げて、アリスの声が部屋に響く。燃え上がるように熱い身体をさらけ出して、自ら積極的に快楽を貪っていた。

欲望を叩きつけて奥の奥を貫く。そのたびにアリスの声が高く高くなる。しとどに濡れた蜜壺の中は狭く、先端が子宮口にぶつかるとに、呻くほどの快感が霊夢の唇から漏れた。キツ過ぎて痛いぐらいなのにぐじゅぐじゅに濡れているせいで快楽が止まらない。

「ううつ、ふつ、あうつつ、やあつ、あつあつあつ」

性急に求める声が激しくなっていく。限界が近いことを知って、動きを早める。ぱん、ぱんっと肉がぶつかるとにアリスの白い尻がふるふると震えた。

頭の中が全て白く焼き払われるような、強烈な絶頂。

「あっあああうあっあうあうあうあうあう……！」

ごぶつ、と熱い液体が中で跳ね返って溢れた。

息を荒くしたまま、霊夢はアリスの上に倒れ伏した。ゆっくりと引き抜くと、ねつとりとした白いモノが零れ出た。

自分の身体は熱く燃えさかっているのに、アリスの裸体はもう陶器のように冷めていた。ほとんど死体のようだった。

額の汗を拭おうとして、手を顔の近くまで寄せた。臭かった。血と吐瀉物と愛液と精液で汚れていた。

自分の頬を強く叩く。相変わらず痛みは無かった。

手近な服をかき集めて、身に纏う。倒れ伏しているアリスを氣遣う余裕はどこにも無かった。ただ、自分のしてしまったことが怖かった。自分の中にそんな獣が住んでいることが怖かった。

そのまま逃げた。

外は、とつぷりと暮れていた。雨は上がっているようだった。蒸すような暑さが夜を埋め尽くしていた。

汚れた手も洗わないまま、霊夢は夜道を歩いていた。指と指を擦り合わせると、ばらばらと乾いた血液が粉になって落ちた。

遠くで夜雀の啼く声がする。

森を通る細い道は曲がりくねって、並の人間なら迷いそうだった。

いっそ並の人間のように、妖怪に食われてしまえば良かっただろう。だが博麗の巫女を食えるほどの度量がある妖怪などこの界限には存在するはずがなかった。

夜道一人で空を見る。月の無い空に孤独な星が一つ二つ浮いているばかりのさむしい夜だった。

闇の中で孤独。それはいつだって感じていたはずのことだった。

だとして、これ以上のひとりは未だかつて無いモノだった。

愛する人をこの手で壊して、その後、このままのうのうと神社へ帰るつもりは無かった。普段通りの日常などはもう望むべくもなかった。もう、彼女にも会うことはないだろう。

だが、どこへ行けばいいのか巫女には見当も付かない。それなりの覚悟はあっても、誰にも見つからない場所など、心当たりはなかった。博麗の名は余りにも知られすぎている。

どこか、行くべき場所が必要だった。

逃げるべき何処かが。

闇は、その願いを聞き届けたようだった。音もなく空間が切り裂かれる。その深淵には無数の目。それが何を見ているのか、何のためにいるのか、誰も知らない。

ふらつきながら歩を止めた霊夢の前に、その妖怪は現れた。

「ずいぶん、気落ちしているようね」

その声には、慈悲といって良いほどの優しさと気遣いが込められていた。

それなのにしっとりとした艶と怪しさと罨の匂いとが同時に混ぜられていた。

どちらが本当なのか、霊夢には分からなかった。

そしてどちらも本当なのだろうと思った。

「私と一緒に来なさい、博麗の巫女。何もかも忘れましょう」

肘まで覆った長手袋が白く闇に浮いていて、それはまるで長い尾を引いて飛ぶ狐火のように見えた。

「さあ」

すうっと伸ばしたその指先がおとがいに触れる。

「あ、」

触れられて、喉奥から声が出た。猫が喉を鳴らすように、自然とそうなってしまう。具合が良いときも悪いときも、そうされると反抗できない。

「ここは……この幸福は惨すぎる」

優美に蠢くその唇は、どんな闇よりも深い紅をしている。

「幸福な貴女を、攫いますわ」

うっそりと笑んだ。

紫の笑みは静かだった。何の感情も呼び起こさない。喜びも悲しみも何も、霊夢の感情を揺り動かさない。

アリスの笑みとは違う。

ただそこに静かに在るだけで、ねっとりとしたその口唇で舐られるようにして、ずぶずぶと溺れさせるだけの、得体の知れない笑みだ。

「手を取りなさい」

頭の中が眩々^{くらくら}して、何も答えられなかった。

ただ差し出された白い手は夜闇の中で浮いていて、世界の中で唯一確かで揺るぎないもののように見えた。

手を取れば、この寒い場所からは逃げられるのだろう、そう思った。誰もいなくなつたこの場所から、遠くへ行けるのだろう。恋の壊れてしまったこの場所から離れて。逡巡は一瞬のことだった。

アリスとの思い出が、刹那のうちに脳裏へ閃いて、消えていった。思い出がある分だけ、幸福であると言えるのかもしれない。けれど身を焦がすような恋の末路がこのようであると知っていたならば、誰かを追うことを望むはずがなかった。

焦がれるような恋路ならば、ただ追われることを望んだのかもしれない。

霊夢は小さくうなずいて、その優美な手を取った。貴婦人の白い手袋は褐色に乾いた血で汚れた。それでも紫はその静かな笑みを崩さなかった。

「まだ、生きてゆきましようね、霊夢」

そして、その後の巫女を見た者はいない。

おそらくは、幸福に過ごしたものと思量される。

後に残ったのはこの片恋の記録のみであった。

あまりに幸福の過ぎた、身を焦がすような鮮烈な記憶のみであった。

かくして、博麗霊夢は幸福な生涯を過ごし、そして死んだ。
そのようにして、幸福というものが定義されたためである。

博麗無き世に幸福は無かった。故に、世界は繰り返された。

肆
おめでたい話



博麗靈夢は、目を三角にとがらせて縁側に腰掛けていた。見張っているのだった。

社に鴉。^{やしう}ふてぶてしく羽をかいて木の枝に止まっている。ガラス玉のような目玉を

光らせて、何かを虎視眈々と狙っている。同じ色でもどこか柔らかく儚げな鴉揚羽が

ゆらりと立ち寄ろうとして、すぐにその剣呑な嘴に^{くちばし}脅かされ、哀れであった。

博麗靈夢はほおづえについて、縁側に腰掛けていた。朝餉^{あさげ}はどうに食ってしまった。

傍らに緑茶。出がらしであるが、熱ければ食後にはそれで十分。冷えた秋空に心地よい熱さである。

突然、靈夢は駆けだした。手水場^{ちようずば}を狙って鴉が飛び立ったからである。

「こらあ！　そこは水浴び場じゃないの！」

捕まえて焼き鳥にしてやろうと思つて飛びかかったのに難なく避けられる。すぐそばでからかうようにあほうあほうと鳴いた。ホーミング陰陽玉でも投げつけてやろうかと半ば本気で思う。

このところ、神社の手水場を居心地良いプールだと勘違いしているたちの悪い鴉たちにはとほど困らされていた。参拝客はめったに来ないとはいえ、鴉が水浴びをするような場所では清めの効果も薄れてしまう。神社としての沽券^{こけん}に関わる問題であった。

この辺りの鴉の総元締めといえ、あの性悪鴉天狗に相違ない。何の嫌がらせなのかと思って腹立たしい気持ち収まらない。

不意に霊夢は思い出したことがあって、ますます不愉快な気持ちになってしまう。昨晚の宴会のことだ。いつも喧しいばかりの白黒の魔法使いが急に立ち上がって叫びだしたのだ。

「アリス、結婚し——」

「ちよおつとまったー……！」

遮ったのは、射命丸しやめいまるである。

「急を要さないようなプレスリリースは三日前までに記者倶楽部へ申請を出してくれないと困るんですよ。こっちだって記事の都合でもんがあるんですよ。ぶきつちよへたれ魔法使い攻め×クーデレ誘い受け魔法使いっていうネタは最近の読者には食傷気味なんだからもっと新機軸を打ち出していけないとうちの読者が飽きちゃうんですよ、マンネリの元は全部あんなたちが何時までもぬるーいツンデレいちゃラブを繰り返してばかりだからで、いつまでもいつまでも連載が終わらなくて困るんですよ、読者が求めているのはもっとぐっちゃんぐっちゃんの例えば三角関係不倫ふたなりヤンデレ百合みたいなの……！」

「あー、ちょっとあんた黙れ」

とりあえず霊夢は後ろから口を塞いでおいた。無理矢理引き倒して座布団かぶせて上に座ってやった。お茶が飲めるぐらい安定して座れる。

「むぐむぐ、だめえ、窒息しちゃううー」

なんだか嬉しげな声を出してビクンビクン震えていた。気持ち悪い。

アリスは魔理沙へ静かに問うた。

「で、何か言いかけてなかったかしら」

「……興がそがれたぜ。また今度出直す」

「あら、そう。残念ね」

そうは言いながらも魔法使いたちはそっと手を伸ばして指先と指先だけを絡めていた。それ見て、何とはなしに怪しいなと思ったのもつかの間。

座布団の下からようやく抜け出した射命丸が目をらんと輝かせてすり寄ってきた。

「決めました」

「何よ気持ち悪い」

異様に距離が近かった。指一本分も無いほどの距離感で顔を近づけてくる。思わず

のけぞって避けなくなるぐらいの近さである。

「今度の新連載、私と貴女で作りましたよ」

言っている意味が分からなかった。

「ネタが無いなら作れば良いんです！ 貴女と私で三角関係不倫ふたなりヤンデレ百合みたいなの！」

「それはないわね」

だいたい二人しかいないし、恋愛するつもりもないし。

「いいえ、今私が決めました。確かに二人しか主要な登場人物がないのだとしたら、不倫三角関係はあきらめざるを得ませんが、方向性は間違っていない。前回の連載が清纯派正少女漫画的百合であったことを鑑みると、新連載はまた一步違った、そう、言うなればダークな犯罪のかほりのする、人妖の闇にまで一步踏み込んだ内容にするべきなのです！」

射命丸は言い切った。よくしゃべる鴉だと思いながら、霊夢はその内容の半分を聞き流していた。酔っぱらって眠いのである。まさかそれが自分の身に降りかかってくる災難の一步目だとは思ってもよらなかった。

「というわけで、明日から私、博麗神社専属のストーカーですから、よろしくっ！」

明るくさわやかに自称するストーカーというのも珍しいものだ。

そして確かに有言実行。今朝から手水場に鴉がたむろしている。射命丸の手下なのであろう。実に堂々とした嫌がらせである。まったく感心しない。

そして、本人も来た。

きいんと金属の鳴るような轟音を伴って、超特急で何か飛来する。着地の瞬間にもうもうと砂埃が立った。

「やあやあ、遠からんものは音に聞け、近くば寄って目にも見よっ！ 人呼んで轟音速球ストーカー 射命丸 文^{あや}っ！ ここに見参！」

言い終わったぐらいのところで、柄杓で水を汲んでぶちまけた。悲鳴が上がる。

「な、何をするんですっ！」

「口上ぐらいは言い終わりたいだろうと思って」

せめてもの情けである。

「手水場は参拝客のためのところなの。あんたら鴉が水浴びをしたり水飲みをしたりおしゃべりをしたりする場所じゃないのよ」

「井戸端会議、もとい博麗霊夢報告会には良い場所だと思ったのですが」

「何を報告しようっての」

「博麗靈夢は現在ドロワーズ派だが、着心地の良いばんつを買い与えることによって転向する可能性があるか否かについて」

「却下」

また水をかける。しかし今度はひよいと避けられて甚だ不満である。

実にくだらない会議をするために手水場が荒らされているとすればこれはゆゆしき事態である。なんとしても抗議せねばならぬ。

「どうにかしなさいよ、あの鴉。うつとうしいし、不衛生だし、神社の経営に差し障るわ」

「うちの手下たちはみんなきれ好きですよ。大丈夫、貴女が心配するようなことはありません。だいたいこの神社にはほとんど参拝客なんて来ないじゃないですか」

のらりくらりとかわして、まったく手応えがない。これがいつもの射命丸である。

「参拝客が来ないのはあんたたち妖怪が真つ昼間つからたむろしてるからじゃないの」「だって好きなんですもの。好きなひとには尽くしたいし、何か手伝えることがないかって思うし、そうでなくてもずっとそばで見ていたいんですよ。私は色々忙しいから常につきつきりというわけに行きませんけど、代わりに鴉たちが見ていてくれます」

にやにやと怪しげな笑みを浮かべながら、射命丸は言った。

その笑みがなおのこと霊夢の神経を逆なでする。

「……んで、忙しいあんたは朝から何をしにきたの。正々堂々正面から挑んでくるストーカーなんて聞いたこともないけど」

「いやいや、霊夢、分かってませんね貴女」

ちっちつと指を横に振った。

「ストーカーっていうのは、元恋人がこっぴどく振られてなることが多いんですよ。ということはとりあえず兎にも角にもお付き合いしないと話が始まらないということなのです」

「誰が誰とつきあうって?」

「私と貴女ですよ。嫌だなあ。それぐらい台本読んどいてください」

台本なんていつ出来たのだ。そもそもなんで自分が射命丸とラブストーリーを演じることになっているのか、今の素面^{しらふ}の霊夢では理解することが出来なかった。

「と、言うわけでうまく新連載がスタートしたら原稿料は山分けですよ。単行本が出たら印税もあるし。いいアルバイトだと思ってやりませんか」

「やらない」

霊夢の答えはにべもない。射命丸の新聞が売れないことは当然知っていたし、まともな購読者がいない代わりに無料の号外ばかりやたら刷数が増えていることも周知の事実である。これでは原稿料どころか、利益が出るはずもない。口車に乗せられて、恥をかくのが落ちである。

「じゃ、無断で取材します。その方がリアル感が出ていいですよね、やっぱり。写真は現実以上のものをうつさなくっちゃ」

そう言つて一枚ばしやりとシャッターを切った。

「ちよつと勝手に撮らないでよ。撮影料請求するわよ」
手のひらを上にして催促する。

「はいはい分かりましたよ。どうです、これでいっちまんえーん」
へらへら笑いながら楓の葉を一枚握らせて逃げた。片目をつむつて手を振る。

「じゃあね、私の大好きな霊夢！」

やかましくよくしゃべる鴉天狗は轟風と共に飛んで消えてしまった。

「……ばつかじゃないの」

その木の葉の裏側に、恋文が綴られていたのを見つけたのは、捨てようとして裏返したときだった。

『子持山 若かへるでの 黄葉つまで

寝もと吾は思ふ 汝は何か思ふ』

万葉集である。意味は忘れてしまった。けれど音の感じが案外悪くない短歌だったので、押し葉にして取っておくことにした。しおりにでも使おうと思う。使える物は出来るだけ有効活用するのが博麗の習性なのであった。

また次の日も射命丸はやってきた。

「一つひいては父のため！ 二つ吹いては母のため！ 人呼んで轟速エースストーカー 射命丸 文っ！ ここに見っ……」

また柄杓で水をかけてやった。なんだか面倒くさくなったので口上が終わるのを待つのは止めた。

「相変わらず冷たいですね、霊夢。しかあしっ、皮肉にも貴女のそんなところが私にはたまらない快感となり魅力となつて惹きつけてしまうのです。もっと冷たく、ウジ虫でも見るような目で見下してください。汚い言葉で思い切りなじり、ののしるのもかまいません。さあ、はやく、はやく私を絶頂へ導いて……ッ！」

霊夢は思い切りスルーして、箒を取りに物入れへ向かった。水をかけても喜ばれる

ただだと学んだのである。

しかしさすがは射命丸。どれだけ無視されようとしがみついて離れない。その後ろ姿、横顔、俯瞰、ローアングルなど何枚も連続で撮る。

「いいねいいねー、その表情いいねー」

やかましいことこの上ない。

「だあつ、何なのよまったくもう！」

耐えかねて箸を振り上げた瞬間に、ひょいっと間合いの中に入り込んできた。すつと何か、差し出される。

「はい、おみやげ」

烏瓜の蔓で編んだ虫かごだった。からすうり中に青々した果実が来るように器用に作つてある。鉢に植わったままだから、橙色に熟れるまで楽しめそうだ。

「昨日、あの後どこか行ってきたの？」

「ちよつと南米の方まで行つてモケーレ・ムベンベを」

「ふーん。撮れた？」

「美味しかったです」

どうやら「わくわく動物ランド」ではなくて、B級グルメ特集だったらしい。

「南米でこんなの採れるんだ」

「ええ。標高の高い地域では蔓性植物はその酸素濃度の低さに耐えかねて出来るだけ地面に近いところにランナーを伸ばして成長しようとするのです。そして大地に近ければ近いほど人間や動物に踏みつぶされやすくなる。茎や葉であれば多少踏まれたところでそれほど痛くはない。けれど果実はつぶれたら一卷の終わりです。だからこんな形でかごを作って中の大事な実が熟すまで丁寧を守っているのです。現地の人の話では子猫が乗ってもつぶれないぐらい丈夫らしいですよ」

「へえー、うまく出来てるのね」

「ま、全部嘘ですけど」

あっさりばらした。霊夢は小さく息をつく。

「またそうやってどうでもいいような嘘ばかり」

「楽しいじゃないですか。南米産烏瓜の特殊な習性というタイトルの嘘。蔓を籠状にして虫を捕らえて閉じ込めて中でばりばり食べて実を作るっていう方向性も考えてみましたけど、今日は標高と酸素濃度で知的にもっともらしく攻めてみました」

「本当は南米産とかじゃないんですよ」

「もちろん。近所の河童が器用に作っていたんで、もらってきました。かわいいから

気に入るかなと思って」

あっさりした口調で手の内を明かす。不思議と不快感はない。たわいもない嘘だからかもしれない。どこからが嘘だったのだろうと、発言の一つ一つ思い返すのが少し楽しみのような気がした。

「貴女が喜んでくれればいいなって、私が考えているのはただそれだけですよ」

射命丸はそう言って、ただ静かに微笑して手を伸ばしてきた。

「こら」

ぺちんと叩いて振り払う。射命丸はふうふうと自分の手をふきさましながら言った
「手ぐらい触らせてくれたっていいじゃないですか」

「手を許したら今度は何を持って行かれるか判らないじゃない」
妖怪なんて信用ならないんだから。

霊夢はぷりぷりと頬をふくらまして、御札をふりかざした。

「ちえ、今日のところは退散しますよ」

射命丸は小さく肩をすくめた。

「大好きな霊夢が、今日も幸せでありますように」

「騒がしいあんたがいなくなったら静かになって幸せになるわよ」

追い払うようにして、霊夢は言った。別段心からそう思っているわけではない。ほんのじゃれ合いのつもりだった。

射命丸はほんの少しだけ唇を歪めると、何も言わずにすぐ飛び立った。何かまた憎まれ口を叩かれると思つて身構えていた霊夢には拍子抜けだった。

また翌日も射命丸は来た。

「一本でも射命丸！ 二本でも射命丸！ 人呼んで嵐を呼ぶストーカー 射命丸あ……」

こらえきれなくなつて水をかけた。喜ぶだけだと知つてはいるのだが、どうにも待つてゐるのは性しょうに合わなかつた。

と。いつもとは様子が違う。

「ぶえーつくしゅ」

激しいくしゃみをした。

「何よ、なんとかは風邪引かないんじゃないの」

「そりゃあ、妖怪はほとんど風邪引かないですけどね。気持ちが悪く弱たらそれに似た症状になることはあるんです」

「あら、そう」

「寒空の下、何度も何度も思い人に冷たくあしらわれたら、いくら私でもちよつとは堪えるんですって」

ずぶ濡れのシャツからぼたぼたと水が滴っていた。少しだけうつむいてさみしそうに笑った。射命丸のまつげが長いことに、今更霊夢は気がついた。少しだけ気の毒な気持ちになる。騙されまいと、おずおずと訊く。

「そんなのって嘘、でしょ」

「どうでしょうね。貴女が嘘だと思えばそれは嘘。そうでないなら、本当かもしれない」

肩をすくめる。それから思い出したみたいに、胸ポケットから一つ、何か取り出した。

「櫛？」

「器用な白狼天狗の知人がいるもんですから、ちょっと頼んで作ってもらったんです。本当なら私が梳すいてあげたいところだけど、貴女は嫌がるでしょうから」

「まあねえ、妖怪に後ろ向けたら何されるかわかんないもの」

とはいいいつも、もらい物はちゃっかり貰っておくのが霊夢である。手に取ってし

げしげと見つめる。桜の透かし彫りが入った繊細な柘植^{つげ}の櫛だった。

「ふーん。まあ、もらっとくわ」

「お気に召したようで幸いです。ところで、」

突然真顔になる。

「そろそろちゅうのの一つや二つぐらいいただいてもよろしいでしょうか？」

あまりにも丁寧な口調で言われたので、何を言っているのか理解出来なかった。

「何が何だって？」

「私たち、つきあい始めて三日ぐらいにはなると思うのですが、その間毎日私はこの博麗神社を訪れている訳ですから、霊夢のその麗しくふつくと柔らかそうな唇のひとつや二つぐらいあむあむとべったりもったりといただいて舐めまくって蹂躪して舌を入れて唾液でぐじゅぐじゅにして……」

残念ながら口上は最後まで言えなかった。

巨大化した陰陽玉が顔面めがけて飛んできたからである。めきよ、と人外ならではの嫌な音がした。

「馬鹿じゃないの。誰と誰がつきあってるって？」

ぱんぱんと土埃を払って、霊夢は射命丸を踏みつけにして家に帰った。

それでも翌日、射命丸は来た。

「ネタが思いつかなくてもただひたすら頭の中を空っぽにして話し続ける女、射命丸文！ ただいま参……げほげほげほっ！」

自分の咳でそれ以上話すことが出来なかった。

「はいはいそれは分かったから」

さすがに風邪引きではかわいそうなので、水は控えてやった。

「帰って眠った方がいいんじゃない？ 伝染^{うつ}されたらこっちだって迷惑だし」

「いいえ、貴女のそばにいることによって私の抵抗力は百倍増しなのです。キスが健康に良いのは科学的に証明されているらしいですよ」

「河童の科学はいい加減ね」

「一回のキスで口をすばめると二十九もの筋肉を使ってカロリーを消費し、健康にいいのだとか」

「……嘘くさい」

ともあれ、霊夢が暇なのは確かである。そして少しずつ肌寒くなってきた、暖かいところで暖かい飲み物でも飲みたい気分になってきたということも。

相手が風邪を引いているのだからちよつとぐらい優しい気持ちになったところでは当たるまい。

「キスはしないけどお茶でも飲んでいく？　生姜の蜂蜜漬けがあるから、入れてあげましょうか」

「痛み入ります」

射命丸は軽く頭を下げ、それからぼそつと呟いた。

「かくして、射命丸文は巫女の自宅へ潜入することに初めて成功したのである。次回へ続く」

「何か言った？」

「いいえ、なーんにも」

にこにこ笑んで答えた射命丸を、なんとも言えない複雑な気持ちで霊夢は見ているた。

博麗神社境内、鳥居をくぐって正面にまっすぐ伸びる参道の突き当たりが賽銭箱のある拝殿である。そこへ向かって右側が手水場、左側が神具などをしまふ弊殿。巫女の平素暮らしている家は拝殿と弊殿の間に挟まれるようにしてひっそりとある。もっ

とも博麗神社を訪れる人妖のほとんどが空からやってくるから参道も鳥居もほとんど意識されないのが実情である。

「でも何だかでつかいですね。一人暮らしなのに」

「建て替えるのも面倒だね。昔はきつともつとたくさん人が来ていたのでしょけど、あんた達が来てからこっち、人間のお客さんなんて魔理沙ぐらいだわ」

「あの山の上の巫女さんは？」

「あいつは神様だからもう人間じゃないでしょ」

「なるほど」

きよろきよろと見回しながら、何十枚と写真を撮っていた。土間や水瓶やかまどまで撮っていくのは些か鬱陶しいぐらいだった。

「落ち着いて座りなさいよ。ほらここに置いておいてあげるから」

座布団を置いてばんばんと叩いてやる。ふわりと飛んで駆けつけた。

「こら、家の中で飛ばないの」

「口うるさいですねえ、お母さんみたいに」

振り向きざま、またぱしゃりと一枚撮った。ぐいとレンズを手で遮る。

「あんたがおとなしくしないのが悪いのよ」

「ああもつと怒って、叱ってください。そんな貴女も良い絵になりますから」

にやにやしながらカメラを向けてくる。霊夢は怒る気も失せて、目の前の湯飲みに集中することにした。

生姜の蜂蜜漬けに熱い紅茶を注いだものだ。平素は緑茶派の霊夢でも、これだけは紅茶の方が美味しいと感じる。ふうわりと薫る爽やかなジンジャーの風味と、和やかな甘さが心地よい。

「レモンが欲しくなりますね」

「風邪に効くって言うものね。金柑きんかんならあるけど」

「おお、酸っぱい。一口で何個も入れるもんじゃないですね」

「……勧められる前から食うな」

あきれ顔の霊夢を横に、射命丸は縁側に種を飛ばしている。細かい種が連続で空中を飛ぶ。器用なものだ。

空は高い。日差しは明るい。けれどもあくまで秋は深まっている。風は冷たく、遠くの楓を紅く染めていく。

「山に、ね」

「ん?」

目と目があった。じつと見つめられる。何だか無性に照れてしまって、霊夢は目をそらす。どうしてだかは判らない。

ただ何とはなしに、真剣な顔をしている射命丸が珍しかったからかもしれない。

「綺麗な楓があるんですよ」

「この間貰ったものかしら？」

「そうそう。それを使ってね、」

こほん、と一つ咳払いをした。すこしだけ緊張しているようだった。

「恋文を取り交わすのが鴉天狗たちの間で流行っているのです」

「……ふうん」

一拍だけ間が空いた。何故空いてしまったのか、霊夢は自分では判らない。けれど、空いてしまったことに少しうろたえた。というより、『自分がうろたえたかもしれない』ということを外に出してしまったことに、うろたえたのだった。

射命丸は甘えるように、小首をかしげて見つめた。

「霊夢のお返事が、欲しいなって」

「だって紅葉もみじは無いわ、此処には」

言いかけたそばから、はい、と差し出された。

「……用意が良いのね」

「ストーリーカーですから。愛情に飢えてるんです」

そう言つて、寂しそうに笑つた。それすら演技なのだろう、と霊夢だつて思わないことはない。それでもわずかに胸を打たれないではなかった。

「書くものもありますよ」

そつと手ごと握られて、筆を渡される。ひんやりとした細い手に湯飲みを奪われて、遠くへ運ばれる。目の前に据えられた木の葉に集中せざるを得ない。

それでも触れている手の感触に少しだけ胸が高鳴る。そうして高鳴つたことにどこかだまされたような気がして、焦る。毎日のように好きだとか愛してるとか言われ続けて、気持ちをかき乱されていると、そんな積み重なる困惑を勘違いしてしまうのかもしれない。

何も書かれていない葉の表面をじつと見つめる。特に何も浮かんでは来ない。それどころではない。

「子持山 若かへるでの 黄葉^{もみ}つまで

寝^なもと吾^わは思^もふ 汝^なは何^などか思^もふ」

すらすらと、射命丸の口元は自分の書いて送つた歌をそらんじる。

「楓の色が変わるまで、わたしは眠りについて、貴女を待っています。貴女はどうですか？」

「……どうって」

そんな風に言われても、困る。

博麗霊夢は恋を知らない。どうすれば恋になるのかは判らない。ただこの判然としない気持ちを恋なのだと名付けられたとして、それを否定出来ないかもしれない自分はいる。

恋を知らないのだから、これが恋ではないと否定することも出来ないのではないか。

「そんなの……誤魔化してるだけだわ」

自分の思考を打ち消す。嘘つき鴉の舌先三寸でだまされているだけだ。

「いやですね、さかしい人間というものは。私は騙されてほしいのに」

反対側の手が腰に回る。はねのけようとするのに、うまくどかされてくれない。力と力の押し合いになる。手をそつと攔んだままで、射命丸はささやく。耳元に熱い息が当たる。

「待ったんですよ、これでも」

「紅葉は初めから紅かったでしょうに」

「散ってしまったては、色も判らない。そうなる前に貴女の返事が欲しい」

「そんなのは傲慢だわ。あんたが勝手に待っていただけなのに『待たされていたのだから、何とかしろ』だなんて」

「貴女には赤が似合う。紅葉のまだ赤いうちに手に入れたかったですよ。散って朽ちてしまえば醜い茶色に変じてしまう」

射命丸はふっと息だけで笑った。そうして有無を言わず膂力を増してもたれかかってくる。

「……っ！」

無理矢理両腕で組み伏せてくる。重みがかかる。ごとりと縁側の板に霊夢の頭がぶつかる。顔が近い。怖いぐらいに真剣な表情を浮かべていた。紫水晶の瞳がまっすぐに向けられている。

唇と唇が触れそうになって、霊夢は顔を背ける。ぎゅっと目を閉じる。背筋にわずかな焦りを感じる。どうすればいいのか判らない。

あと一寸ばかりというところになって、不意に重みが消える。

「オイタが過ぎますわね、あの天狗」

目を開けて起き上がれば、そこには隙間の妖怪が何食わぬ顔をして座っていた。図々

しくも霊夢の湯飲みを手にもってまるで自分のもののように口をつけている。

射命丸の姿は見る影もない。

あがつていた息を気取られないようにして、霊夢は尋ねた。

「……あいつはどうしたの」

「おうちに帰って寝て貰いましたわ。駆けつけるにしても五分以上はかかるはず」

静かに音もなくお茶をすする。隙間で飛ばしたのだろう。

「美味しいわね。少しさめてしまっているけれど」

「……余計なことしなくても良かったのに」

霊夢は手の内に握りしめた対魔の針を見せてやる。あれ以上近づいたら刺してやる程度の準備はあった。

「それは申し訳ありませんでしたわ」

八雲紫は優雅に笑む。多分、気付いていたのだろう。それでもなお割って入った。

何故か。

「でも、きっとあの天狗のことですもの、あきらめないと思うわ」

霊夢の疑問を読み解くかのように、紫はうなずいた。

「あの天狗も、貴女を本気で好いているのですわ。断るなら断るなりにきちんとしな

ければ諦めないでしょう」

「そんなの、私をからかっているだけだわ」

霊夢はふんと鼻で笑った。妖怪のすることなど、いつだって遊びの一環だ。彼女たちはいつまで経っても子供なのだ。最初に口説いた時と同じ。新聞のネタにして笑いのにするだけのつもりに違いない。

それでも紫は扇で口元を隠して笑った。

「子供の本気を馬鹿にすると痛い目を見ると判ったでしょうに。それとも、あの口づけを受けるつもりでいたのかしら？」

「……まさか」

「なら、いいわ」

ぱちりと扇を閉じる。

「きちんと考えないといけませんわ。恋は本当に怪物ですもの」

「何よ、判った風なことを言ってる」

「片思いの果てに相手に乱暴をして、勝手に絶望をして、そのあげくにどこへともなく消えてしまうようなことだってあるのだから」

お気をつけて、博麗の巫女。

恋の怪物に囚われぬように。

「また何か企んでいるの？」

「ふふ、ないしょないしょは蜜の味」

ひとさし指を立ててそつと唇に添える。

「いっつもあんたはそうやって悪巧みして」

「知らぬが仏と言いますわ」

そつと指先を伸ばす。髪の上に僅かに触れる。

「かわいいかわいい霊夢。幸せ幸せ霊夢」

「知らないわ。馬鹿みたい」

むずがって霊夢は振り払った。紫はほんの少し唇の端を下げた。哀しそうにも見え
た。

「愚かな方が幸せなこともありますわ。利口者ばかりが得とは限りませんもの」

「あんたが何か企んでるのは判ったけど」

「ともかく、お気をつけてね、霊夢。私はもう助けてあげられないかもしれない」

そう忠言だけ残して、妖怪の賢者は空間の隙間に消えた。

「……何に気をつけろっての」

先日の隙間妖怪は怠惰である。一日の半分以上を寝ているのに加えて、冬期は『冬眠』と称して長い眠りにつく。昨日の忠告はそれを踏まえてのことだろう。

（別に、助けてくれなくなつていいけど）

余計なお世話だとも思う。そうは思いながらも、あのときの射命丸がどことなく怖かつたのは思い出す。ほんのわずかに自分の手が震えていたのを、改めて思い出す。紫が指摘しなかつたのは、有り難かつた。

（……真剣な目をしてた）

あの平素ふざけているところしかない天狗が、見たこともないほどに緊張しきつていた。切なく、恋い焦がれるような。

まさかと思う。初めから、記事のためにやっているのだと射命丸自身が言っていたことだ。真に受けるなんて、本当に頭がお目出度^{めでた}い。

それでも、改めて思い出すと、戸惑つてしまう。頬が少しだけ熱くなり、鼓動がわずかに早くなる。恋だ恋だと言われれば、そうなのかもしれないとも思わないではない。恋を確かには知らないからだ。

空を見上げる。今日も青く澄んでいる。高く高く聳^{そび}えている妖怪の山がはるか遠くにくつきりと見えるほどに。

（あいつの家、どこにあるんだろ）

山を登る道中で出会ったことはあるけれど、家に招かれたことはない。行つて様子をみようにも手立ては無かった。

いや、無いこともないか。鴉たちをちらりと見やる。彼らならば射命丸の居場所を知っているはずだった。

（でも、わざわざ行つてやるのもしかたわ）

こつちが惚れているのではない。ちよつと気になっていゝというだけ。あれだけ毎日訪れてはちよつかいを出し続けていたのに、急に来なくなるのだから。

（心配してやるだけ、損というものだわ。単に飽きただけなのかもしれないし）

切れ切れに、想いが走る。とはいえ、妖怪ごときに飽きられているというのもそれはそれで腹立たしいものである。

そうやつて、腹を立てさせる射命丸に少し理不尽なものを感じて、霊夢は少しだけ乱暴に箒を蔵に放り投げた。掃除はお仕舞い。さつさとお茶にして縁側でぼんやりするのがいい。空いた時間で干し柿を作つたつていいし、もらい物の毛糸で編み物をしてたつていい。箱いっぱい届けられた野菜を古新聞でくるみ直して蓄えに備えたつていい。やることはたくさんあるのだ。

(……新聞か)

また彼女のことを頭に浮かぶ。何でもそれに結びつけるみたいで、自分が少し嫌になる。ため息をついたところで、考えは去ってくれなかった。

一人きりの夕餉がなんだかさみしいもののように感じられて、今日は早めに床にくくことにした。それでもいつもより目がさえていてどうにも眠れそうになかった。

(変なの)

せんべい布団に挟まれて、ごろりと横向きになる。目を開ければ一人きりの寝所だ。いつもの通り。それなのにどうして眠れないだろう。

ふと草紙そうしでも読もうかと思ひ立ち、行灯に火をいれる。腹はらばいになって冊子を開いた刹那、はらりと落ちるものがある。楓の葉であった。紅色は褪あせることなくその鮮やかさを保っていた。

ただそれだけのことで、字を追うのも怠くなり、指の間でくるくると茎をもてあそんだ。子供のでんでん太鼓のように楓の葉は踊った。書かれた歌が表になり裏になり、見えては隠れる。

(返事をしていないわ)

そうは思うが、霊夢に歌の心得などはない。ただ詠まれた歌を反芻するぐらいのこ
としか出来ない。

(ずっと待っているのだって、言われてもね)

待たされているのはこちらじゃないかと思わないではない。それは甚だ不服であつ
た。今度会ったら真つ先に怒鳴りつけてやらなくてはいけない、とそこまで考えて、
何を怒鳴ることがあるのかと自分で自分をいぶかしく思う。

(待っている？ 文を？ まさか)

そう自分に言い聞かせる。けれどもう一人の自分が心の中で言う。

では自分の中のこの落ち着かない気持ちは何だ？

待っているのではないとすれば、この感情へどのように名前をつければいい？

たとえば楓を渡された時に彼女の手の触れたことを思い出して、ひとりでに心の臓
がことと言ひ始めてしまうこの感覚は何だ？

(……ばかみたいだわ)

本当に自分は馬鹿になったような心地がする。枕の上に突つ伏してため息をまたつ
く。眠れない。目を閉じて、自分の左胸に手を当ててみる。たしかにほの暖かく脈打
っている。行灯の火を細くして、また仰向けに寝返りを打つ。とくり、とくりと音を

立てて血流が流れている。けれど寝間着越しではよく分らない。

こくと唾液を飲み込んで、霊夢は息をつく。そろそろと身じろぎして着物の合わせ目から手を差し入れていく。なよらかな膨らみの上へ手のひらを沿わせて自分の鼓動のわずかに高まるのを感じる。素肌の上ではんのわずかに指先を滑らせて、自分の胸の大きさを確かめる。

（ふつうは、大きい方がいいのかしら）

よく分らない。別に他人の好みに合わせるつもりはない。普通がどれぐらいの大きさなのか、あまりまじまじと見たことはない。それでも何となく気になって手のひらでそつとこねる。

と、偶然指先がそこへ触れてしまう。

「あ、」

ほんの少し息が漏れる。少しだけなにか、変な感じがする。胸の奥、どきどきがわずかに増した。息を大げさに吸って吐いて、それから同じ場所へもう一度触れた。胸のほんの先のところ、感じやすいところへ。今度は声を上げないように息をこらして、自分が何を感じているのか、注意深く調べていく。気持ちを集らせて自分のおんなの体がどうなっているのか、どう感じるのかをしずしずと調べる。

とくん、とくんと心臓がはずむごとに何かよく分からない、後ろめたい気持ちかわずかに生まれる。けれど誰も見ていないのだから、大丈夫だと言う想いも生まれる。くるくると円を描くようにして、わずかに屹立きつりつしてきたところをなぞる。指の先でもてあそぶようにすると、体の奥がわずかに疼くようになる。胸の奥に凝こじった熱がとろけて腰の辺りへ蟠わだかまっていくようだった。

「ん……う」

自分の吐いた息が不思議なぐらいに熱っぽくなっているのに気がつく。声を出したらどうなるだろう、もっと気持ち良くなるだろうか、そう思うのに何かおそろしくて、出せない。

腰の下の方、なにか疼くようになる。脚の間、おしっこの出るところと、うんちの出るところの間のあたり。奥がほんのわずかに重くなるような。触れて確かめなくなる。ゆつくりと着物の間をかきわけて、ドロワーズのゴムをくぐって、手を差し入れる。ふうくらしとした土手の、わずかな茂みの中へ手を差し入れれば夜露のように濡れている。とくんとまた、心臓が高くなった。ゆつくりとその液体を指にすりつけて、合わせ目へくつりと沿わせる。急に挿いれるのはいけない気がした。だからただ入り口のあたりをゆるりゆるりと撫でていくだけ。控えめな少女の葩はなびらが微かにほころんで、

自らの指を受け入れる。ごく青い、ほとんど熟れてもない少女の情感をごくわずかに溢しながら。

と。

突然、天井に隙間が開いた。

「!?」

何も無い真上から落ちてくるものがある。思い切り霊夢の上に覆い被さってくる。

「うへえ、なんてこった」

素っ頓狂な声を上げて、落ちてきたのは射命丸だった。

「……ちよ、つと」

声を荒げることも出来ない。布団の中から出ることも出来ない。自分が何をしていたのか、絶対に悟られてはならない。気付かれないように布団をかけ直す。

「いやあ、五分ぐらい飛ばされるだけかと思ったらくるくる何万回も落とされ続けて気がついたら三日ぐらい経ってましたよ、いやはやホントに酷い目にありました」

聞いてもいらないようなことばかり話して、それからひたりと動きを止める。

「……良いにおいがする」

射命丸がすすすと鼻をうごめかす。それを聞いた霊夢が、わずかに布団の中で身

じろぎする。

にんまりと笑って、射命丸は上に乗ったままで顔をすり寄せてくる。

「人間の、においがします。うん、とてもいい。これはけだものとしてのヒトの匂い」
ちろちろと唇を舌尖で舐める。ごくわずかな灯りに照らされて、蜂蜜のようにうす金色に見えた。視線と視線を合わせて、射命丸は、牙をむくように笑った。

「霊夢の手、貸してください」

「や、だ……」

かすれた声しか出ない。まるでただの人間の子供みたいに、細い声しか出せなかった。

「かして」

鼻先がつくぐらいの近さで、吐息がかかるほどの距離感で、甘い声。魅入られる。布団を押さえていたはずの手を取られて、そのぬるりとした膚はだを感じる。

さつきまで自分を慰めていた手を、あからさまな蜜に濡れた指を、射命丸は捉えてねぶる。口腔の肉壁にこすりつけるようにしてまで、堪能した。

「おいしい」

射命丸はうっとりと言った。その手で何をしていたのか、判った上で、そう言っ

た。

「……っ」

霊夢はただ顔を背けるしか出来なかった。上気した表情を見せまいとして、首を動かしてそっぽを向く。

「もっと下さいよ、ねえ」

背けられた霊夢の首筋へ、小さく口づけする。

たったそれだけでぴくんと霊夢の腰がはねた。自らの愛撫を受けた体がまだ続きをほしがっているのは、こらえようもなかった。

「ひとりじゃいけないようなことを、してあげますから。わたしは人間が恋しい、ひとこいしいんです」

みみたぶ

耳朶へささやきながら、そつとそつと舐めていく。舌を這わせ、耳穴へ唾液を注ぎ込んで、くちゆくちゆとかき混ぜることに、霊夢の体がわずかに震える。どれだけ抑えようとしても、とくんとくんと鳴る心臓はやまないのだ。

「食べたらいけないって、言われているとよけい欲しくなるんです」

「っ、」

そつと鎖骨まで布団をはがされて、その上を甘く噛まれる。ちりちりと焦がれるよ

うな疼痛が腰のあたりに凝っている。

「ただ貴女が欲しいのです、霊夢。それだけ。ね？」

甘い言葉をささやかれて、ただ力が抜けてしまう。騙されているだけだろうに、その誘いの文句と、舌先の愛撫とで頭の中が茫としてしまう。

顔の上をそつと指先でなぞられる。ふうくらしとした唇を愛撫される。つるりとした爪でごく浅く撫でられる。刺激を受けてほんの僅かにほころんだのを気取られ、つぷりと口中へ這入^{はい}り込まれる。

「んっ、くちゅ……っぷ、んんっ」

ぬるぬると唾液で滑る。粘膜の中を思い切りかき混ぜられる。ちゅぷりと抜いた。

「もったいない」

射命丸はそう言っ^て自分の指を舐めた。霊夢の唾液で濡れそぼっているのをたつぷりと味わう、その様は霊夢に見せつけるようだった。

「嫌、よ」

「何が」

「そういうの、いや」

霊夢は小さくかぶりを振る。何がいやなのか自分でもよく判らない。けれどそのよ

うにして射命丸がなまめいた仕草をするだけで自分の中の何か、得体の知れないところがかき立てられ、自分が自分でなくなるような、そんな気持ちになるのだった。

「すぐに良くなりますよ、大丈夫。私に任せて」

そっと髪を撫でる。安心させるようにして、優しさを込めて。

頬の上に口づけを落とす。愛おしげに、いくつもの軽い接吻を重ねる。

それでも霊夢は意固地に首を横に振り続けた。ほとんど泣きそうに恥ずかしかった。

「いやなの」

「どうしても？」

再度問われれば、霊夢はこっくりとうなずいた。

「一緒に寝るだけでも、ダメですか？」

「……それなら」

不承不承、頷いた。

射命丸はそっと布団の中に入り込む。二人で一つの布団は狭い。暖かい体温を身近に感じる。安らいで眠りがごく近くなる。

このまま眠ってしまおう。少し下着が気持ち悪いけれど、明日穿き替えればそれで済むことだ。

それでも。

「はあ……はあ、」

「ごそごそと隣の射命丸が荒い息を立てて何かしている。眠れそうになかった。」

「……っ、ん……っ！」

びくびくつと体を震わせて、少しの間は静かになる。それでもまたしばらく経つとごそごそと動き始める。それが二度三度続いたところで、思わずばかりと殴りつけた。

「うるさいわ」

「……しょうがないんです。私のムスメが落ち着きを取り戻さないのです、やむなく一人ですわね」

射命丸は悪びれる様子もなく弁解する。赤裸々な性的事実を告げられて霊夢は返答に困る。

「じゃあ、どうしろと」

「霊夢にお世話をして貰わないと眠れません」
堂々と言った。

「そういうの、嫌だって言ったでしょ」

「指三本……いいえ、二本でも一本でも構いませんから、ちよつとだけ貸して貰えれ

ばきつと」

「ゆび」

どうしようか、どうしたらいいか。逡巡しているうちに射命丸に手を取られた。ぬるりとしている。

「あ……」

「霊夢は、何もなくていいですから」

ゆつくりと導かれる。背中から抱き込むような格好になる。ただ目を閉じて暖かな闇の中にいることだけ考える。つぷり、と濡れたものの中に入れられる。

射命丸は感極まったように、眩いた。

「ああ、霊夢のゆびで、されてる」

「うる、さい……」

「ええ、静かに、静かにしますから」

そのままふつくらと勃たつた肉豆を撫でさせられる。ぐじゅぐじゅと濡れているところをかき混ぜさせられて、何が起きているのか判らない。理解したくはない。だから静かに目を閉じているだけ。それでも熱い熱い他人の肉襷が指先にまとわりついてくるのを感じているだけで自分の体がどんどん火照っていく。息を荒げ、それでもその

濡れた粘膜の感触を、出来るだけ感じないようにして、霊夢はただ時の過ぎるのを待った。

「……つつ、あ、うつ……！」

痙攣は、すぐに終わった。汚された指先は、射命丸の舌で再び綺麗にされた。霊夢は、ただされるがままだった。息が荒くなっているのを気取られないようにするので精一杯だった。

「ごめんなさい」

射命丸は詫びた。霊夢は答えなかった。そのまま背を向けて眠りについた。圧倒的な熱と湿り気に頭の中がただ白くなって、何も考えられなかった。

ただ、おそらく明日にはこれでは済まないだろう。今日だってあまりにも流されすぎてゐる。夢心地にそう考えて、何だかそれも仕方のないことのような気がして、そのまま眠りについた。

翌朝、良い匂いがして霊夢は目を覚ました。味噌とだしの匂いだった。いぶかしげに思いながら様子を見にゆく。

「あ、おはようございます」

射命丸が土間で料理をしているようだった。どこから持ってきたのやら割烹着までしっかりと着込んでかまどの前にいる。

「何やってんの、あんた」

「えへへ、初夜の後にはお味噌汁が必要でしょ？ たっぷり運動して汗もかいたし、汁もどばどば出たし」

「誰の何が初夜だって？」

霊夢は思わずむっとして眉をひそめた。それでも射命丸は意に介した様子もない。

「やだなあ、無かったことにするつもりですかあ」

両方の頬を挟み込んで、はにかむように揺れた。これ以上何か言えば調子に乗るだけだと思い、霊夢は言及するのを避けた。鍋の中をのぞき込む。

「ふうん、油揚げとほうれん草にお豆腐。いいじゃない。好きよ」

「うふふ、霊夢の好きな献立はばっちり観察してましたから」

ぐっと親指を立ててウインクする。

「ご飯ももうじき炊けますし」

「まるきり奥さんみたいね」

かまどの様子を見るためにしゃがみこんで、霊夢は言った。ぽいぽいと薪を放り込

んでいく。

射命丸はぬか漬けを取り出して切る。手を動かしながら口も動かしていた。

「霊夢が望むなら、私が旦那さんになったっていいんですよ」

「何いってんのよ。妖怪のくせに」

「妖怪だから、先に死ぬことはありません。最期までばっちりしつかり写真に収めて看取ってあげますから」

口調は軽口のように、そうではなかった。

霊夢はふっと上を向いた。目と目が合う。僅かにその紫色の瞳は濡れていた。

「ずっと、考えていたんです。何か、切っ掛けがあれば言おうと思っていたのですけれど。延び延びになってしまっただけ」

「何言ってるの……ばっかみたい」

その湿っぽい雰囲気吹き飛ばすみたいに、霊夢はぱん、と射命丸の背中を叩いた。「早くご飯にしましょ。里の人に貰った浅瀬虫^{さざむし}の佃煮、特別に開けてあげる」

自分でも甘すぎるなあと思うつつも、悪い気はしなかった。そのように、素直に好感を、労りを口に出すことが出来たからだ。

それを隙間から垣間見ていたものがある。眠る前の映画鑑賞のようにして、一幕を冬眠前に楽しんでいた。しゅるりと隙間を閉じて、八雲紫は自分一人の布団の中に寝転んだ。

天蓋付きの優美な寝台である。独り寝を愉^{たの}しむに十分な快適さ。これから先の長い長い冬の間、安らかな休息を楽しむためにあつらえた自分だけの場所。

眠らなければならぬのなら、せめて精一杯楽しく安らかに快適に過ごすことを、八雲紫は長い経験から知っていた。

そうは言っても先ほどまでの一幕は、ナイトキャップにちょうど良い程度の茶番であつた。大切な人が、ほどよい幸福を見つけられたというのは八雲紫にとって最大限の幸いである。

あの程度の策略など、造作もないことではある。それどころか、八雲紫は博麗霊夢の幸福のために、どれほどの細工をも厭わない。騙すことへの罪悪感などは、欠片もない。

「ふふ、『博麗神社のおめでたい人』か」

いつだったか、自分の形容した言葉がその通りになって、紫はおかしかった。一人、くすくすと笑う。満ち足りた気持ちでいた。

「騙すのも騙されるのも良いものね」

そうしてまた微睡みまどろの中に落ちていった。これ以上先のことを見届ける必要はないように思ったのだ。

存外、天狗は悪い奴ではないことを八雲紫は知っている。毎日贈り物を持って行っていたことも、ずっと霊夢を気に掛けていたことも。少し隙間を長くしてやっただけで、霊夢もそのことに気付いたではないか。たかだか三日ほど居ない程度で寂しく思うのは、気に掛けていた証左である。

天狗の情の深さはきつと博麗霊夢に幸福をもたらすだろう。そうでなければならぬ。い。

たとえ霊夢の方が先に死ぬにしても、十分すぎるぐらいに彼女は幸せになるだろう。愛し愛されてそのうちに結婚するだろう。ひよつとしたらどうにかして子供など作るかもしれない。それはそれで幸福なことだ。

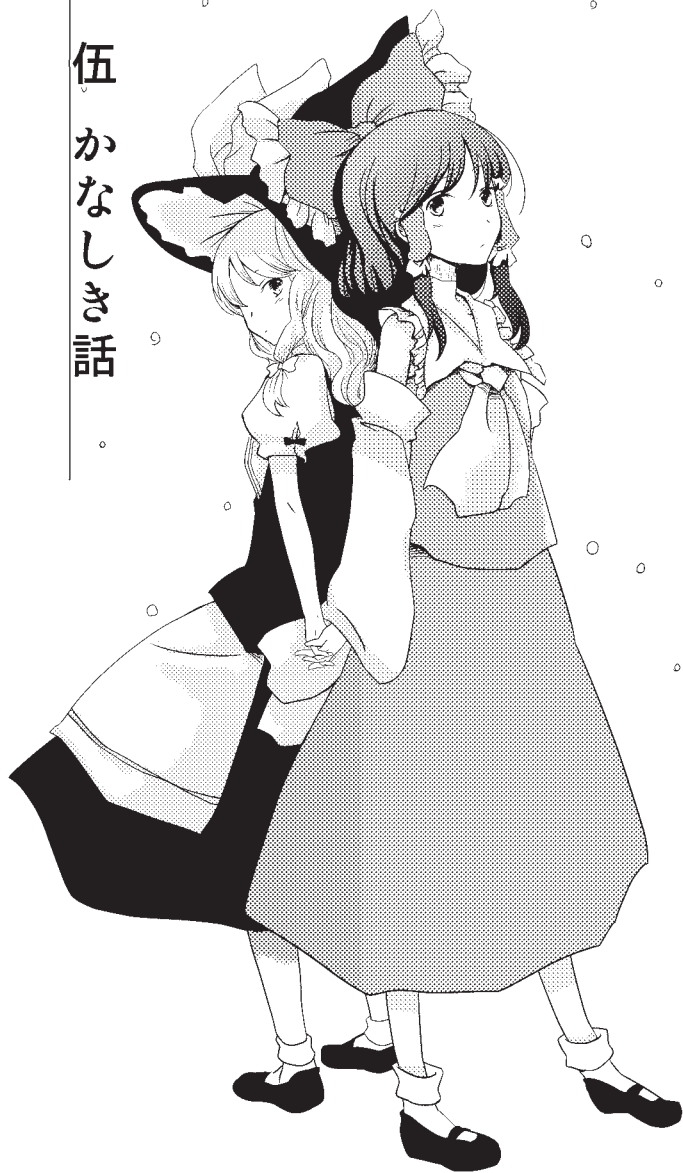
子育てをする霊夢を夢想して八雲紫の唇は優美な曲線を描く。あの天狗と霊夢の子供なのであれば、どれほど騒がしくふわふわと飛び回って、落ち着かないことだろう。大騒ぎになるだろう。それもまた騒がしく愛でたく、実に幸福な日々であることだろう。

これがこの場所での幸福なのだ
と結論づけて、八雲紫はひとり、
長い冬の眠りにつ
いた。

かくして、博麗霊夢は幸福な生涯を過ごし、そして死んだ。
そのようにして、幸福というものが定義されたためである。

博麗無き世に幸福は無かった。故に、世界は繰り返された。

伍
かなしき話



博麗靈夢は縁側に腰掛けていた。どうすべきか考えあぐねているのだった。

社に蝶。やしろ露草つゆくさのような薄い青を帯びた蝶が時期はずれに飛んでいる。桜もまだ咲かないような冬と春の境目だのに、一匹だけ早く目が覚めてしまったのか。孤独はさみしかろう、一人きりは侘びしかろう、そんなことをがらにもなく考える。考えはまとまらない。

あさげ朝餉はとうに食ってしまった。傍らに緑茶。出がらしであるが、熱ければ食後にはそれで十分。

ふ、とまた一つため息をついた。

「どうすればいいのかしら」

考えを声に出してみたものの、答えは誰からも来ない。

不意に靈夢は思い出して、両手で顔を覆う。恥ずかしさで顔が熱くなる。どうしてあんなことを、と自分のしてしまったことを少しだけ後悔する。

今となつてはもう遅い。けれど何も決定的なことはない。ただ、少し恥ずかしいというだけのこと。平穏な日々の延長線上にある。

昨晚の宴会のことだ。いつもは喧しいばかりの白黒の魔法使いが急に立ち上がった。叫びだしたのだ。

「アリス、――」

そこから先は、聞こえなかった。ぱん、と乾いた音を立てて頬を張られたのだった。貴女、最ッ低

人形遣いは冷たく言い捨てて外へ駆けだした。虚脱してへなへなと崩れ落ちた魔法使いを囲んで、酔っぱらいの妖怪たちは口々に勝手なことをわめいている。

「おおーっ、何だ何だ痴話げんかかあー?」

「喧嘩するほど仲が良いって言うけどねえ」

「いいぞー頑張れ、追いかけるー青春だあーっ」

「アリスのこうげき … 魔理沙 に 100ポイント の ダメージ! アリス は にげだした」

「おおっと魔理沙選手、まったく立ち上がれませんねえ。レフェリー、これはカウント取った方がいいんでしょうか」

「いや、これはタオル? セCONDからタオルが投げ込まれました。これはどういうことでしょうか」

「ううん、完全に目が死んでいる……真っ白に燃え尽きたな。おーい、誰か気付けにブランドー持ってきてー！」等々。勝手なものである。

陽気で愉快的な彼らを放っておいて、紅白の巫女はアリスを追いかけていった。気になっていた。ずっとずっと気になっていた。宴会が始まるよりも前からだ。好いていたのだ。気に掛けていたのだ。

恋しているのだと確かには判らない。けれど、気がつけば目の端で追っていた。それを、恋と呼ばないのなら、何をそう呼べばよいのだろう。

月夜を二人きりで抜け出す程度の能力。お互い、ペアになっていた相手は違うけれど、ぽっかりと浮かんだうつろな満月はどこか永夜の頃を思い出させた。ほのかにほろな月夜は霧霞に漂い、しかとは見えぬ二つの影を地に落とす。博麗神社の柏の木々を茫洋とした飛行の痕跡がざわりと揺らす。

アリスは、やがて後から続く者に気がついたようだった。ゆっくりと速度を落として宙にとどまる。そうっと目元を拭い、ため息を一つついて、それからようやくと振り返った。みっともないところは見せようとしない。それが霊夢には哀しかった。

灰色の月光が彼女の上に被さる。太陽の下では金色に輝いて見える人形使いの髪は今夜ばかりはモノクロームに色あせて見えた。

彼女は、まるきりいつも通りを装って言った。

「貴女が来るなんて意外だわ。他人には興味がなさそうなのに」

「別に。たまたま同じタイミングで夜の散歩に出ただけよ」

つい憎まれ口を叩いてしまつてから、そんなつもりではなかったと悔やむ。それなりに気に掛けているのだとうまく口に出すことは出来ない。

それでもアリスは微かに笑んだ。労^{いたわ}りが伝わつたのだと思うと、ほつとする。

夜空へ、密やかな風が踊る。はたはたとスカートの裾がひらめいた。そつと髪を抑えて、アリスは笑んだ。どこか寂しげだった。

密やかに少女の唇がうごめく。

「ねえ、独り言を言つてもいい？」

「……それって、許可を得なければいけないこと？」

「貴女がいるのだから。それなのに無視して、聞きたくもないだろうことを話し続けるのは貴女のロマンチックで快適な夜の散歩を邪魔するかもしれないわ」

「別に、気にしないわよ」

そうは答えたものの、霊夢はどこか落ち着かなかった。わざとそう尋ねたということは、聞いて欲しいけれど、反論して欲しくはないことを言うのだろうと思つた。

そのごく甘い覚悟を超えるような、一言を、アリスは言った。

「魔理沙は、本当は貴女のことが好きなのよ」

「な、にを……」

「黙って」

そつと手を伸ばしてくる。氷のように冷たい指先が霊夢の唇へ触れた。砂糖で出来た花の形のお菓子のような香りがした。散りかけた百合の葩はなびらのように白かった。春のいまだ来ぬ静けさと冷氣とが二人の間を埋めていた。夜の闇の深さよりもなお深く、少女のあわいに広がる沈黙は立ちこめていた。

「霊夢が、私のことを好きなのを知っているくせに、ずるいわよね」

しゅうしゅと燃えるアルコールの青い炎のように目を輝かして、アリスは言った。その眼差しを強くさせるのは敵意以外の何でもないのに、その指先はあくまで甘くなよらかだった。

「その迷いをごまかそうとして、私と結婚しようなんて言うから、ちょっと叩いてやっただけ。たいしたことじゃないわ」

「わたし、は、」

口の中が乾く。どう言えいいのか自分で判らなくなる。言われたことは確かに事

実だろう、自分がアリスを好きだということは。けれどそんな風に、迷惑そうに、冷たく言われたって、そこからは当惑と悲しみしか浮かばない。

「それ以上、言わなくて良いわ」

言葉を交わすことにはそれほど意味がないから。

「私は魔理沙が好きよ。貴女ではなくて」

霊夢の逡巡を見透かしたように、アリスは告げた。

そのことに特段のショックは覚えなかった。それ以上に混乱していたのだ。何を言われても言われなくても、これ以上に混乱しきってしまうことは無いと思った。一度にたくさんのことを突きつけられてしまつて、どうすればいいのか判らなかった。

「でも、安心して。面倒くさいことをしてまで、誰かをつなぎ止めようなんて思わないから」

つ、と指先が離れていった。

「さよなら。今日はもう帰るの。気分は最悪。風邪を引いたみたいに頭が痛むのよ」
僅かに血の気が引いた顔で、アリスは言った。いつもの白磁の膚が、常よりさらに青白く見えた。

その離れていく指先を捉える。そして手の甲にそっと口づけをする。冷たい空気に

温もりを奪われているのではなくて、初めからその膚は冷氣をはらんでいるようだった。

それでも僅かなりとも温めたく思った。それぐらいしか、自分に出来る精一杯のことが浮かばなかった。

「子供のくせに、洒落たことを覚えたのね」

アリスは僅かに笑んで、それからきびすを返した。振り払われた手の冷たさが、いつまでも霊夢の手の中に残っていた。

送ろうか、とでも言えば良かったのだと気がついたのは、一人で月夜に取り残された後だった。月夜に一人で置いてけぼりされる能力など、洒落にもならない。仕方なしに霊夢は神社へ戻った。

宴会はもうほとんど終わりにかけていた。玄関の引き戸を開けたとたんにもう立ちこめる嫌な匂いに霊夢は顔をゆがめた。

部屋の片隅、空き瓶やナッツ類の空き缶に混じって、ぼろきれのようになって転がっているものがあつた。魔理沙だった。ゲロと涙と鼻水と酒類にまみれてぐしゃぐしゃになっていた。それでもどうにか意識はあるみたいだった。汚れたタオルを抱きし

めながら、ぶつぶつ何かを呟いている。耳を近づけてみればどうしようもない泣き言だった。

「ううう、ダメだよおお、アリスに嫌われたら生きていけないよおお……しんじやうよおお」

ガン泣きである。よくもまあ、これだけ不細工に泣けるものだ、と心の中で感心する。

「うええええ、アリスううう……（けるける）」

「こら、畳に吐くな！」

あわてて抱き留める。洗面器を探してすぐそばにあてがってやる。

介抱をしている間だけは、何も考えずに済みそうだった。霊夢はとりあえず友人の世話を焼くことにした。色事とはまったく関係ない間柄の友人は、具合悪そうに洗面器の横で伏せていた。

布団を引いてどうにか寝かせ、霊夢もまたすぐそばで横になった。空気の入れ換えをしてもまだなんとはなしに変な匂いが立ちこめていて、なかなか眠れなかった。

翌朝は、二人並んでちゃぶ台に座った。しかめっ面をして味噌汁をすすっている友

人に尋ねた。アリスの発言の裏を取るためだった。

「あんた、私のこと好きだったりするの？」

魔理沙なら単刀直入に聞くことが出来る。はつきり言ってこちらとしては恋愛相手だと思っていないからだ。

魔理沙もまったく同じように思っていたのだろう。いぶかしげな顔で問い返す。

「はあ？ 何で私がお前のこと好きにならなくちゃいけないんだよ、たちの悪い冗談だぜ」

「念のため確認してるだけよ。ちっともそんなそぶりが無いから、アリスの勘違いだろうと思ったんだけど、まあ、一応念を入れなくちゃね、と思って」

霊夢もまた朝食を摂る。昨日の宴会の名残か、広間はどことなくまだ酒臭い。雨戸を全開にして、家中の窓を開け放ったのだけれど、それでもどこか立ちこめている。後で畳を上げて日に干したほうがいいかもしれない。

「ふうん。それにしても妙だな。私はことあるごとにアリスにまとわりついて離れてないつもりなのにな」

「知らないわよ。あんたから誤解を解きに行ってくればいいじゃない」

結局のところ、これは痴話喧嘩なのだ、と霊夢は思う。魔理沙の浮気を疑った本妻

が、宴会の途中で飛び出して行ったというだけのこと。

自分は魔法使いたちの間に割り込むつもりなどはない。魔理沙とアリスが両思いなのだろうことは想像に難くない。魔理沙だつてそう思っているからこそ『結婚しよう』なんて言ったんだろうし。

「……まあ、そうなんだろうな。聞いてくれるかどうか、分かんないけどやってみるぜ」

家に帰って一眠りしてからにするけど。

気の乗らない様子で魔理沙はそう言った。自分でよそつたくせに、味噌汁を半分以上残して、箸を置いた。

人間の魔法使いはふらふらと朝方の空を飛んでいった。それを見送ったところで、入れ違いのようにして、瑠璃色るりの蝶が庭に來たのだった。

今日の重力はいつもより強い。飲み過ぎたつもりはないけれど、昨日寝付けなかったことが効いているのだろう。考え事をするなんて、性に合わない。それも人間関係に悩むなんて。誰にもまつろわない、誰からも何からも重力を受けないというのが自分の能力だったように思うのに。

「どうしようね」

霊夢は蝶に話しかける。葉の裏側に止まって羽を休めているそれは、答えるようにごく僅かに脚先を動かした。行け、と言われていたような気がした。

けれどそれを真に受けるのもばかばかしいような気がして、ぐずぐずと何時までも神社にとどまっている。

入れたてだったお茶はとうに冷めてしまっていた。湯気も立たない。飲む気にもなれない。

と、遠くから音がした。風切り音。見上げると、さっき帰って行ったはずの箒だった。乗っていた魔法使いはほとんど転がり落ちんばかりに駆け下りてきた。

「どうしたのよ」

「大変なんだ、アリスの家が封印されてるんだ」

魔理沙の声は、まったく冗談を含んでいなかった。これ以上無いほどに真剣だった。

アリスの家の前では、人だかりが出来ていた。濃い茶色で塗られた瀟洒なウッドテラスの上で、昨日の飲み会のメンツがほぼそのまま集まっていた。皆、暇なのだ。

「おー、巫女来た巫女来た」「おそいよー、れいむー。思わず酒盛り始めちゃったじゃ

んか」「これで異変も解決ね」「さあ、運命の一瞬です。人形遣い引きこもり事件の謎は解き明かされるのでしょうか。どうでしょうね、解説のにとりさん」「うーむ。重要な場面だからねえ、ここはちよつと慎重に爆弾を分解するのが楽しかったんじゃないかなあ。赤とか青とか、リード線とか」「それはまたの機会に」

その中から滅多に動かないはずの大図書館が出てきて、静かに宣言した。

「これで足りない紅白が揃ったわ。後は憂鬱を吹き込むだけ」

「誰が紅白だつて？」

「貴女は知らなくて良いことよ。さあ、そのため息を鍵穴に吹き込みなさい」

「意味が分からない。説明して」

霊夢はいらいらしてそう言った。昨日からずっと訳が分からない事態に振り回されっぱなしで嫌になる。

パチュリーはそつと玄関の扉を指さした。チョコレート色の重々しい木の板は固く閉じられている。霊夢が目をこらすと、そこには何か文字が刻まれているようだった。パチュリーがそれを読みあげる。

『紅白と白黒とが揃っても僅か三色。七色の半ばにすら届かないだろう。憂鬱の色を吹いて届かせたとしても、それはすでに手遅れだ』……ですって」

意味ありげに目配せする。

霊夢はまだ顔をしかめたままでいた。意味が分からない。何かの謎かけなのだろうが、正直なところ考えるのもいやだった。

「どの程度の手遅れなのか、興味があるわ。できたてのほやほやか硬直か腐敗か乾燥か。私は乾燥に五円金貨一枚掛けてるの。だってその方がロマンがあると思わない?」

「わたしはできたてほやほやに一円ねー。だってその方がリアリティあるもの」
酒をおりながら、萃香がこともなげに言った。霊夢の背筋が寒くなる。

「それって……」

「じゃあ、あたいは死後硬直にかけるー。氷みたいにかちかちなもの!」

「チルノさんはお金持っていないんじゃないんですか? 掛け金は一口一円からですよ」

「なら、私がチルノの分も入れて百億口掛けるわ。それでいいでしょう、ブン屋」

「ひゃ、百億口ですか……!? まあ、幽香ゆうかさんがおっしゃるならいいですけど。さて、他に掛けるお方はいらっしゃいませんかー。文々。新聞主催、死亡時刻当てトトカ

ルチヨ好評発売中です」

「ちよっ……と、やめてよ。そんな、簡単に」

アリスを殺すな。

霊夢が口を挟もうとしたその刹那。

ばん、と大きく床が踏みならされた。

「アリスは、死んでなんかいない」

硬くかみしめた魔理沙の唇は、ほとんど白くなっていた。その真剣さをからかうようにして、射命丸がにやにや笑いと共にすり寄ってきた。

「じゃあ、いくら賭けます?」

「有り金全部、賭けてやるよ。私の持つてるものの全部だ!」

「おおお、これはすごい、これは剛毅ですね!」

文花帖にメモを取る。その帳面を魔理沙は思いきりはたいた。手帳はぱさりと地に落ちた。

「くだらないこと言ってんじゃない! アリスが死ぬなんて、そんなことあるもんか!」

「いいですねえ、その演説。すばらしい志だ」

射命丸は意に介した様子もなく、写真をぱちりと撮った。

「億万長者の決意表明だったらいんですけどねえ。負け犬の遠吠えにならないといいですねえ。密室には殺人事件がつきものだというのに! いやいや、どちらにして

も本当にいい写真が撮れました。おかげで今日のトップ記事はこれで決まりだ」
ほくそ笑んで何枚かとり続ける。

魔理沙は鬱陶しそうに顔を背けると、霊夢の手を取った。小さな魔理沙の手は震えていた。

「行こうぜ。こんなの、早く終わらせなくちゃ」

扉の前までぐいぐいと引つ張られる。霊夢にはどうすればいいのか判らない。パチユリーに視線で尋ねる。

「憂鬱と吹いたね。こんなところで洒落たって誰も理解しないのに」
パチユリーが肩をすくめた。

「鍵穴を吹くのよ。二人同時に」

言われる通りに顔と顔をすりあわせて、かがみ込む。柔らかなほっぺたがくつつきそうなぐらいに近づいて、鍵穴に向けて、小さくため息をつく。ふっと魔理沙の息が甘く薫るような気がした。どこか乳臭い子供の匂いがした。

かたん、とあっけなく鍵が解ける音がした。

魔理沙は答えずにそっと扉を開けた。ずっと黙ったままだった。

家の中は暗かった。外の天気が青く晴れ渡っていたから余計そう感じた。目が明る

さに慣れて、暗い家の中に緑色の斑点が浮いて見えるぐらいだった。

「アリス？ 入るぞ」

声を掛けて、おずおずと魔理沙は入っていった。脚が震えて、まっすぐ歩けないみたいだった。霊夢はそっとそれを支えるみたいに、手をつなぎ止めてやった。自分だって、いつ倒れてしまうかと思うぐらいに緊張していた。

一番奥の部屋に、またもう一つの扉があった。板木の上に濃い青色のインキで一つのダビデの星を二重の円で囲む紋様が描かれ、封印されていた。その下にはこう書かれていた。

『黒と白を混ぜれば灰色、赤と白を混ぜれば桜色、赤と黒を混ぜれば血の色。偽物の七色を作るのに、青色は必要ない。ただ混ざり合った唾液の透明でかき消してしまえばいい』

パチュリーが目を細めてじつくりと読む。指先に小さな火球をともして、何度か往復した。目をしばたたかせて、やがてため息と共に火を消した。

「気が進まないでしょうけど、二人とも頑張つて」

「どういう事だよ」

「霊夢と魔理沙がデープキスをして、混ぜ合わせた唾液で、扉の星を消せ、と言っ

ているわ」

「な……ふざけるな！」

「そうよ、どうしてこんな奴とキスしなくちゃいけないのよ」

二人で食ってかかるが、パチュリーは諦めたように首を横に振った。

「アリスが言ってるんだもの。しょうがないじゃない。女王様の命令は絶対よ。首をお刎^はね！　ってのと同じ」

ぎっ、と床がきしむ音がした。

「早くしてよー」「待ちきれないわ」「ちゅーしろってば、ちゅー！」「箱を開けないと猫がいるかいないか判らないなんて」「ひゃつくまんえーん！　いつかくせんきーん♪」「ふふ、楽しみねえ」「さあ、緊張の一瞬です。レディ？　ゴー！」

外野のはずの者たちがざわざわと喧しい。霊夢の苛立ちはぐらぐらと煮立ち、今にも沸騰しそうだった。

と、魔理沙が気がついた。

「待てよパチュリー。これは別にキスしなくたって、つばを混ぜて、この青いのを消したらいいんじゃないか」

「ちっ、騙されなかったか」

指を鳴らしたパチュリーはとりあえず陰陽玉で吹き飛ばされた。それでもけろりとした顔で起きあがる。意外と頑丈だ。

指を唾液で湿^{しめ}して、魔理沙の指とつきあわせる。自分だけでは消えなかったペンキが、魔理沙のものと混ぜ合わされることでずりとその色を薄くぼやかしていく。ぬるりとした感覚。何度も口へ指を運んで、ただ懸命に青色を消していく。少しずつしか消えないから、ゆっくりと指を動かしていくしかない。

ただ無心に作業していると、頭の中が少しずつぼやけていく。力が少しずつ抜けていく。面倒だな、という気持ちだけがふくらんできて、ふと隣にいる魔理沙を見る。同じようにとろけたような目をしていた。どうして自分がこだわっていたのか判らないぐらいに、胸が疼くような、そんな気持ちになる。

気がついたら、その唇に吸い付いていた。あるいは吸い付かれていた、のか。判らない。ただ柔らかな感触だけが広がる。ねっとり絡みつくようだ。他人の唾液を特段不快だとは思わなかった。ただ、ぐちゅぐちゅと舌先でかき回されているうちに、それが気持ち良くなって、指先で掬って扉に塗りつけるのでさえ、面倒くさなくなってくるような気がした。周りがはやし立てる音はまるで水の中に潜っているみたいにくぐもって聞こえた。

やがて、全ての青色が消えた。

扉がぎつと音を立てる。隙間が見えた。

ぶふあつと息をついだ瞬間に、これまでの悶々とした気持ち独りで消えていった。自分のしていたことを思い返して、霊夢の顔があつと熱くなつた。

「さすがアリス。インキに媚薬を混ぜることすら厭わないわけね。魔女の鑑だわ」

パチュリーが感心したように言つた。便利な解説役に徹するつもりの方だった。

霊夢はゆつくりと顔を上げた。けれど、魔理沙はもう扉の方を見ていた。なぜだか、ほんの少しだけ悔しかった。

霊夢もまた、扉へ向きなおつた。魔理沙は手を出せないみたいだった。ただ、板目を凝視しているだけだった。

霊夢は、念を押すようにして声をかけた。

「開けるわよ」

「お、おう」

そつと板を押す。

あまりにもあつけなく扉は開き――。

一同は息を飲むことになつた。

その部屋には人形たちが吊されていたのだった。天井から無数のロープが垂らされていた。あまりにもたくさんあって数え切れないので、雨だれか、漫画の効果線のように見えた。その先には例外なく人形たちがぶら下がっていた。自分から首で縄をくくったように見えた。

部屋の中に入ろうとすると、ロープや人形たちに触れずには歩けなかった。樹脂製のボディが互いに触れあってからからと乾いた音を立てた。

その中心に聳^{そび}えていたのは大きな一つの人形だった。等身大の大きさをしていた。等身大の——アリスの。

他の人形たちと同じように力なくぶら下がっている。無機質に、動かずに。

「まさ、か」

そう口にしたのは、魔理沙だったか。それとも霊夢だったか。

その言葉をあざ笑うみたいに、かたん、と首が落ちて転げた。美しいブロンドの髪がクツションになったのだろう、二度焼^ヒきの陶人形^{クドール}は割れずに済んだ。

首の無い胴体がごとりと床の上に一瞬だけ屹立した。そして魔法が解けたみたい
に、肩が肘が手首が指先が、腰が股関節が膝が足首が、全てただの陶磁に護^ご謨^むに樹脂
に硝子^{がらす}に、球に楕円体に棒に三角錐に分解されていた。アリスだった人形^{もの}の、一つ

一つの関節がほどけて拡散する。部品たちはただ落ちていくばかりだった。ぱりんとごくわずかに何か欠けるような音もした。

焼き菓子^{ビスキュイ}が割れても、二枚になるわけではない。それはただ割れたただけだ。欠けてしまっただけだ、永久に。

「アリス……？」

そのそれが、アリスだったのだと、二人とも同時に理解していた。理屈は判らないけれど、その人形が肉をまとい、暖かみと魂を伴ってアリスとして動いていたのだと。

両足から独りでに力が抜けていくのが判った。霊夢はそれに逆らわなかった。手の届くところに床に転がったままのアリスの頭があった。目も閉じないで不作法にただの球体みたい^にに転がっていた。そっと抱え上げた。小作りの顔立ちは、本当にアリスそのままだった。

「憑依していた魂を外したのね。ふむ。まさかバラバラ死体になっているなんて思いもよらなかったわ。こういう場合、オッズはどうなるのかしら」

しげしげとパーツを拾い上げて確かめているのは、パチュリーだった。ただ知的好奇心を埋めるだけの動機で軽々と肢体だったものを調べていた。

「あいつは、人形だったのか？」

「そうみたいね」

まるで何でもないことのようにパチュリーは言った。魔理沙が食って掛かる。

「でも、あの、ぬくもりは、柔らかさは、優しさは？」

「幻影の一つや二つ使えないなんて、魔法使いとも呼べないでしょう。魔理沙もまだ人間なのね。タネを一つ明かされてすぐに全部の仕掛けを類推出来ないようでは」
ふふんと鼻先で笑って、パチュリーはそっと、霊夢のところへしゃがみ込んだ。手元の金髪をまさぐる。

「その頭部は本当によく出来ている。私も気に入っていたわ」

「まるで、ものみたいに言うのね」

ほのかに反発を覚えて、霊夢は言った。パチュリーは僅かに同情したような微笑を浮かべた。

「ものとしてのアリスも好きだった、というだけのことよ。魂としても、悪くなかったけれど、ものの方が目に見えるから評価しやすい。幻影のかぶせ方も本当にエレガントだわ。私でさえこうして見るまで気付かなかったぐらいよ」

パチュリーはそう言って、本当に愛おしそうに撫でるのだった。それは確かに一つ

の愛情であつただろう。けれども、霊夢が感じているのとは異なるであろうことは、容易に想像がついた。

パチュリーはよっこいしょと声をかけて立ち上がった。ばんばんと手を鳴らす。部屋の前で立ちつくしている人妖たちへ向けて呼びかけた。

「さあ、賭けは賭けよ。一番この状態を適切に言い当てたのは誰かしら？」

「あたい、かちこちつて言つたわ！ アリス、かちこちのお人形さんになつちやつたもの！ あたいの勝ち！」

「だ、そうよ。悪いわね」

大勢の人妖をかき分けて、えへんと胸を張つた氷精と、不敵な笑みを浮かべてその後を聳えるフラワーマスターに、誰しも一步退かないわけにはいかなかった。

呆然としたままの人間たちと違つて、妖怪たちはすぐに活気を取り戻した。射命丸は鉛筆をなめながら分配金について計算していた。

「残念なことに取り立てをしなければ配当金が足りません。しばらくお待ちください」
「手が足りないなら貸すよ。萃めるの得意だし」^{あつ}

「いやいや、萃香さん、めっそうもない。そんなことはさせられませんよ！」
射命丸はそう言うと、まずは第一歩として、魔理沙のところへ駆け寄つた。

「とりあえず脱いでください」

「……は？」

魔理沙は口をぽかんと開けて聞き返すだけだった。

「あと家の鍵も。他に財産があるなら申告表に記載の上、サインをして提出してください。申請に虚偽があったと判明した場合には追徴させていただきます」

「ちょ、ちょっと待て……どういう意味だ」

「貴女が言ったのですよ。『アリスは生きている』とね」

そして、持っている物全部賭ける、とも。

「そんな、だって……そんなことを言っている場合なのかよ。お前ら、アリスがどうなっても関係ないっていうのかよ」

「ふむ。賭け金を回収したら葬式でもしますか？ 良いアイデアかもしれませんが」

それも楽しそうだ、とでも言わんばかりに射命丸は笑った。

「でも葬式ごっこをするにしたって、こんなドンガラじゃあそれっぽくないね。バラバラだし」

萃香が不満げに言った。

「じゃあ組み立てましょうよ。ジグソーパズルみたいに。どれだけ時間がかかって、

これなら腐ることもなさそうですし」

「それで結局、あんたたちは飽きつぱいから私がやることになるのよね。まあ、こういう知的な遊びは嫌いじゃないのだけれど」

そう言うパチュリーもまんざらではなさそうだった。

取り残された人間の魔理沙だけが、ぱくぱくと口を開いては閉じている。

「お前ら……悲しくないのか？ アリスがいなくなっただぞ」

魔理沙の言葉に、妖怪たちは顔を見合わせた。

「そうねえ、悲しいといえは悲しいのかも」

「でも、もっと他の遊びを考えた方が楽しくないかしら？ 葬式ごっこなんてありきたりだわ」

その言葉に小さな氷精が飛び上がって言った。

「悲しい悲しいごっこってどうかしら！ みんなで悲しいことをたくさん考えて言い合って、一番悲しかったひとが勝ちなの！」

皆がそれに応じた。

「まあ、チルノってば時々すごく賢いこと言うのね。びっくりするわ」

「本当、見直したわ」

「ふふん、あたいたつても賢いの！」

「そうねえ。でもどうやって一番悲しいって分かるのかしら？」

「んー、涙の量とか？」

「目の下にメンソレータム塗るわよ」

「じゃあ、泣き声の大きさとか」

「声の大きな奴が勝つだけじゃない」

「さとり妖怪に読んでもらうとか」

「それも同じ。心の強い奴が勝つだけよ」

妖怪たちは腕組みをして、一生懸命どうやって審判すべきかを相談していた。

「やめろよ！ もっとちゃんと悲しまなくちゃ駄目じゃないか！」

魔理沙は大きく床を踏み鳴らした。妖怪たちは振り向いた。

「そう言えば、賭け金の話でしたね」

射命丸はふと思ひ出したように言った。

「そうじゃないだろ、アリスのことをもっとちゃんと考えなくちゃ駄目だろ！ だつて、あいつはもういないんだから、だから……」

「言い訳は見苦しいわよ。泥棒魔法使い。賭けから話をそらそうったって、そうはい

かないわ」

くすくすと幽香が笑っていた。彼女が今回の賭けの勝者だった。取り分はほとんど彼女のところに行くはずだった。

「とりあえず掛け金を精算して、それから次の遊びを考えましょうか」

妖怪たちに押し囲まれて、魔理沙はじりじりと後ずさった。

「ドロワ一枚すら残してあげないから感謝なさい。踏み倒したら塵ちりにするわよ」

それから、わあっと妖怪たちは飛びかかった。魔理沙の悲鳴が聞こえた。

霊夢はそれを助けなかった。ただがやがやと聞こえてくる言葉の断片が耳に入るに任せていた。まだ頭がぼんやりしていて、どうしたものかと考えあぐねていた。

「わああ、やめろ馬鹿あほ脱がせるな！ わかった、わかったよ、自分でぬぐってば！」「ううん、人間の恐怖って美味しいですねえ。小傘こがささんも呼べば良かったな」

「きゃっ、変なトコさわるなってば」「『きゃっ』とか言ってこういう時ばかりは可愛いよね」「たいして胸もないくせにねえ」「な、無くはないやいっ！」「わあ、涙目なってる。傷ついた？ 傷ついた？ ねえねえ？」「う、ううう……し、下までホントに脱ぐのかよう」「もちろん。本当なら臓器まで剝くり抜ぬいてあげたいところだけど、紫が起きてきたら怒られるからやめておくわ。ドロワ一枚で済むなら十分お得じゃない」く

すくすと悪意のこもった笑い。「あー、そう言えば幽香さん、処女膜とか興味ありますー?」「えー、それって人妖の約束破りじゃないのかしら」「殺しさえしなかったら違反じゃないから奪つても大丈夫だと思えますけど」「うーん、でもそういう趣味はないから要らないわ」「魔理沙の処女要る人?」「いらなーい」「うーん、買い手が付きませんね。困ったな」

そこまで聞こえて、霊夢は小さくため息をついた。ナンセンスきわまりない。アリスの消失に衝撃を受けたままでいる自分や魔理沙が馬鹿みたいだ。

気持ち切り替えて声をかける。

「じゃあ、私が引き取ってあげるわ」

「おお、幾らで買い取ります?」

「馬鹿なこと言ってる、処理代を請求するわよ」

「うへえ、巫女はがめついですねえ」

けたけた笑う射命丸を無視して、霊夢は袖を解いて魔理沙へ放つてやった。リボンも解く。ばさりと黒髪が広がる。

彼女は本当に素裸にさせられていた。情けないぐらいに子供っぽい、ふくふくと柔らかそうな体だった。しげしげと観察する。

「あんたホントに胸無いわね。隠さなくてもいいんじゃない？」

「あ、う」

「冗談だってば。そんな泣きそうな顔しないでよ。私がいじめてるみたいじゃない」
深くため息をついた。

「いいから行きましよ。妖怪の相手なんてしてると、こつちまで馬鹿になっちゃうわ」
そう言って魔理沙の頭の上から袖に使われていた布地をかぶせた。大きく広がった筒状の白布をリボンで結んでやる。不格好ではあったが、隠れるべきところは一応隠れた。

「さすがに丈が足りないかしら。まあいいわ」

そう言って、魔理沙を立ち上がらせた。きつと妖怪たちを睨み付ける。

「あんたたち、あんまり悪ノリしてると調伏^{ちようぶく}するわよ」

「はーい」

妖怪たちはそう言って道をあけた。

手を引いて、背負ってやって、博麗神社まで一緒に飛んだ。魔理沙は何も言わなかった。

「人の理屈が通じないのが妖怪っていうのは理解している？」

「うん」

「ならそれ以上私が何か言う必要はないわね」

自分だってついさっきまでそれなりのショックを受けていたのだから、こんな風に説教を出来る義理はないはずだった。だから口をつぐんだ。

幻想郷は残酷だ。

どんなものでも物笑いの種にしてしまうぐらいに、理屈の通じない世界だ。

アリスが何故いなくなったのか、どこへ行ったのかの究明を後回しにして、どうやったら全てを笑いに変えられるかということばかり考えている。そのことが悪いというわけではないけれど、何か違うような気もする。全てを受け入れるというのは、そういうことなのだ。

霊夢の直感とは、これは異変ではないということを告げている。これは日常なのだ。

残酷な日常の一部。幻想郷を揺るがすような事態にはつながらない。ただの妖怪が一匹消えただけで、妖怪たちはそれをいつもの遊びの様式に変換しようとしているだけだ。それでは行き場のない人間の感情について、ただの混乱について、どう処理すればいいのか、博麗の能力は何の役にも立たない。

ここにいるのはただの人間だけだ。たった二人の、ちっぽけな人間だけだった。

このようにして、魔理沙は財産を全て失った。

魔理沙は、霊夢の家に住むことになった。魔法に必要な道具はおろか、住む家と借金^{カタ}の抵当^{カタ}にされてしまったからだ。こんなばかげたことで実家に帰ることは出来なかった。魔法を失ったことによって皮肉にも勘当される理由はなくなったわけだが、それでも親に頼ることを魔理沙は嫌がった。

「魔理沙、ご飯食べる？」

「……うん」

彼女はぼうっとしていた。霊夢の服を借りて惚けていた。静かな、何も起こらない日々の始まりがあった。

そこにいるのは日がな一日、縁側に座って惚けているだけの人間だった。境内の掃除をしてもらおうかと思ったこともあったが、箒を渡しただけでぼろぼろと泣き出してしまったので、それ以来何かをさせようと思ったことはない。

「何を見ても、思い出すんだ」

泣いてしまった魔理沙は、取り繕うようにそう言って、顔をただごしごしと擦って

いた。それでも後から後から涙はあふれてくるようだった。

「判ったわよ、判ったから」

霊夢は彼女を縁側に座らせると、両手で抱きかかえた。ひくひくと肩をふるわせて、魔理沙は静かに泣いた。

「泣くつもりなんて無いんだ。感傷的になるつもりなんてないんだ。それでも独りで泣いてしまう。あいつが居ないと思っただけで胸が苦しくなって、ここにはもう居ないというだけで心が痛くなる」

哀しいと言うよりは、悔しそうに魔理沙は言った。そんな風に自分を混乱させるアリスのことが憎らしいみたいにも見えた。

判る気がした。なぜだか、ひどくよく判るような気がした。

だから毎日、献立は和食だった。魔理沙も霊夢も和食派だったから、都合が良かった。アリスの気配を感じ取らせるものを可能な限り食卓に載せなかった。サラダもスープもハンバーグも、全部排除した。

春もまだ近いようで遠い、こんな季節に食卓に上るのは、せいぜい、大切に取っておいた根菜の煮物と薄い味噌汁と米飯ぐらいだった。脂気のはとんどない、腹にたまらない食事だった。人参も蓮根も油揚げも全てどこことなく灰色のトーンの中であって

色彩を欠いていた。

それでも茶碗にごく軽くよそただだけで、魔理沙はもう要らないと言った。

「動かないからさ。魔法も使わないし」

使えない、とは言わなかった。意図的に使っていないのだと自分に言い聞かせているみたいだった。そんな意地っ張りばかりが、昔の名残みたいだった。他の物は何もかも違うのに、その気持ちだけがまるきり昔の通りでとどまっているみたいだった。

二人きりの食卓は、一人で済ましていた頃よりも寂しいように霊夢は感じた。一人ならば静かなのは当たり前だけれど、二人居るのに水を打ったようにしんとしているのは異常だ。本当は三人いなければいけないような気持ちにさえなってくる。三人で食事をしたことなんて、宴会を入れなければ数えるほどしかないけれど。

ちゃぶ台に茶碗を置く音、箸が陶磁器に触れる音、そのどれもが緊張感を伴って、宙へ浮かび上がったまままでいるようだった。米粒の一つが喉の粘膜を通って胃の中に放り込まれるまでの経過を、お互いが見張っているようにも思われた。

——見張る？

霊夢は自分の想像に愕然とした。

確かに自分は見張っているのだろう。

——魔理沙が後を追わないように、と。それは友情の故なのか、またはアリスへの義理なのか、そうでなければあるいは——抜け駆けは許さない、というような気持ちに似ているのかもしれない。あまりにも暗澹^{あんたん}とした考えに、霊夢はそれ以上考えるのをやめた。

いずれにせよ、自分が魔理沙の面倒を見ている。

それ以上でも以下でもない。そこから先のことを考えたところで、何ら意味のないことだ。

朝食が済めば、霊夢は境内の掃除に出かける。魔理沙はただ静かに縁側に腰掛けて、空を見ている。

一見、それはただの平和な日のように見える。穏やかな曇り空は確かに肌寒いけれど、雪が降るよりは遙かに暖かい。けれどそれがずっと続くということ自体がまるきり異常事態でもあった。まるで不自然な暖冬のような平穏が続いていた。

じきに春だというのに、まだ目覚めない。色彩は戻ってこない。紫さえいたら、あの便利な隙間妖怪さえ冬眠から目覚めたら、今すぐにでもアリスを捜しに行かせるのに。魔界であれ、冥界であれ行けないところはないのだから。そうしてどうにかこの、どうにもならない状況を解決させるのに。冬がまだ明けないから、灰色の時間がまだ

続く。これは異変ではないから、ただ人形遣いが失踪しただけで、幻想郷を揺るがすようなものではないから、紫は冬眠から覚めない。

ため息はまだかすかに曇る。その程度には、この時間は冬の続きなのだった。

掃除はさほど長く続くものではない。すぐに済ませて霊夢は魔理沙の隣に座る。薄い熱い緑茶をいれて、二人で空を眺めている。

お互いの手が触れあわないぐらいの距離感で、縁側に座る。まるで今はもう居ないもう一人の空間をあげるみたいだと思ったが、口には出さなかった。お互いが向かい合うことはなかった。いつでも同じ側を見ていた。

「暇ね」

「そうだな」

そんなことを口にすることもあった。けれどそれ以上の何かに発展することはなかった。昔のように新しい遊びを発明したり、弾幕ごっこをしたり、野山に食材を探しに行ったりはしなかった。また泣き出してしまうかもしれないし、霊夢自身もとうていそんな気持ちにはなれなかった。飛べない人間を連れてどこかへ行くなんて、この幻想郷では面倒くさいこと極まりない。人里に徒歩で行くのさえ魔理沙は嫌だった。以前までは一つ飛びだったことを思い出して嫌になるのかもしれない。

だからずっと二人きりでいた。遊びにくる妖怪もいなかった。この間のいじめのことを考えてしばらくちよっかいを出すのはやめようと思われているのかもしれない。た。

最近は宴会もほとんど開かれないみたいだった。誘われないだけかもしれない。誰とも会わないのだから、当たり前なのかもしれない。

二人きりの朝も昼も夕も、いつの時も寂しい気持ちは無くならないようだった。アリスが消えたことの理由を二人とも突き止めようとしないうちからかもしれない。それを問うことの意味を認めないからかもしれない。

何もかもが『しれなかった』でしかなかった。二人きりで、会話もない。ただ私たちの殻の中に籠もって回想と推測を続けている。

それはまるで意地の悪いクイズのようだった。ナンセンスで理由も分からない『ウミガメのスープ』のような。

『魔理沙がアリスに結婚を申し込んだ。アリスはそれを最後まで聞かず逃げ出した。巫女はその後を追ひ、嘘の回答を得た。その翌日、アリスは自殺した。何故か？』

神様にだって判るかどうか。どこにもヒントはない。納得の出来る理屈をどうにか捏ねて、自分を上手く騙せる嘘を思いつくしかない。それが真実であるかどうかは、

誰にも分からない。回答を諦めるのも自由だ。すでに起こるべき事は起こってしまった。いくら後から理由を作り上げたところで、アリスが戻ってくる訳じゃない。

魔理沙はもう、諦めかけているみたいだった。

アリスが消えてしまつてから、たった一週間しか経っていないのに。

「飛べないことに慣れてしまつたら終わりなのかな」

ぼうっと、外を眺めていた。一羽の蝶が庭に降りてきた。綺麗な瑠璃色をした羽虫だった。息もかかりそうなほどの近くにまで寄つては、すぐに離れていった。

「流れ星は掴めないって分かつてるみたいにな」

空にはどうせ届かない。崖の花には触れられない。

そんなことを口ずさむように言った。

「やめてよ」

そんなことは聞きたくなかった。霊夢の知っている彼女は、もっと前向きだったように思う。今はもう昔のようではないけれど、それでも。

それでも魔理沙は蝶を見つめたままでいた。

「たった一つの冴えたやり方を知っているか？」

「何の？」

「この世界を、どうにか幸せにするやり方さ」

暗い目をして、魔理沙は呟いていた。

「嘘の世界に幸福論があるのだとすれば、それはきつとありふれた方法なんだろう」

「素面しらふでよくそういうこと言えるわね。感心するわ」

「他に言うべきことなんて無いからな」

霊夢が懸命に茶化そうとしても、魔理沙は表情を曇らせたままだった。昔の呑気のんきさや明るさや軽さは、どこか宇宙の果てにでも消えてしまったみたいだった。ついこの間までは馬鹿話をして笑い合っていたというのに。

曇り空と同じように空気が少しずつ歪んでたわんで重く垂れ込めていくようだった。窓も雨戸も全部開け放しているのに、風を通すように心がけているのに、その柱や壁や土間に潜んだ暗がりが少しずつ空気の色まで浸食していくみたいだった。

「なあ、霊夢」

まるで、付け足すように、魔理沙は言った。

「私と一緒にあちちゃんになつてくれないか」

プロポーズのタイミングとしては、最悪だった。霊夢は眉をひそめて魔理沙を見た。

「あんた、何言ってるの」

「アリスの代わりなんて、失礼なことは言わないつもりだぜ。大切にするよ。絶対に置いていたりしないぜ。ずっと一緒に居る」

「頭煮えてるんじゃないの？」

一笑に付そうとした。逃げだそうと思った。それでも立ち上がりかけたところを、捕まれた。ぐっと袖を引かれる。気がいたら、床の堅さを背中に感じるようになった。上に覆い被さってくる魔理沙の顔は今にも泣きそうだった。

「一緒に居てくれ。後生だから」

「……あんたが寂しいだけじゃないの」

凶星を突いたつもりだった。そうやってひるませるつもりだった。そのようにして、突き飛ばして逃げるつもりだった。

「そうかもしれない」

それでも魔理沙はぎゅっと強く服の裾をつかむ。しがみついて離さないかのように。「でもお前だって寂しくないわけじゃないだろう？」

アリスを好きだったのは、自分だけじゃない。

「どうあがいたって、もうアリスは居ないんだ」

諦めることが、正しいことなのかどうか、霊夢には分からなかった。それでもきつ

と彼女が寂しいのだということだけは判った。痛切なほどに判ってしまった。身体力を少しだけ緩めた。受け入れるように、抱きかかえる。

「可哀想ね」

毒を流し込むつもりで耳元にささやいた。

「お互い様だな」

魔理沙はそんな憎まれ口を叩いて、そっと口づけを落とした。

そこにあるのが愛情であるとは、誰にも言えないだろう。けれど何かの感情ではある。その正体突き止めることに意味はない。それはただそこにあるだけだ。

アリスの不在と、同じ事だった。

理屈などは、不要なのだった。ただ彼女が居ないという事実がそこにあるだけだった。

そっと伸びてきた指先を霊夢は受け入れた。まだ冬の空気が続いていて、肌寒かった。手が布の中へ滑り降りてくると膚がきゆうつと縮こまるような、そんな気がした。ゆるゆると首元のネックチーフをくつろげて、受け入れる準備を整えた。

「いいのかな」

「いいわよ」

こんな時だもの。

霊夢は静かに何かを諦めた。そして、魔理沙もまたそうすることにしたのを身体全体で感じるようになった。まっすぐにその目を見ているのが辛くて、横を向いた。

雪が落ちてきていた。ふうわりと水気を含んだ牡丹雪^{ぼたんゆき}が葉の上に落ちてはじぶじぶ溶けていった。積もらない雪のようだった。

「あ……」

自分の上げた声の艶めかしさに、羞^はじ入って目をつむった。

祝言までの時間はあつという間だった。式は山の方の巫女を招いて挙げて貰うことにした。いかな博麗の巫女と言えども、自分で自分の式を挙げるわけにはいかないからだ。

「この辺のしきたりとか、ちゃんとお勉強しないといけませんからね」

幸いにして早苗^{さなえ}は前向きに取り組んでくれていた。このような場は信者獲得の機会として絶対に逃さないつもりのようなようだった。

博麗神社境内の特設会場はごった返していた。人間同士の結婚式だというのに、妖怪も多かった。人里は十分に理解してくれていた。二人のために花嫁衣装が特別に作

られた。神前式は二人とも和装で、披露宴では魔理沙のためにウエディングドレスが、霊夢のために打ち掛けが用意された。

同じぐらいの背丈の迷子に泣きつかれて、吸血鬼の女王が右往左往しているのも見えた。れい子ちゃんがいともすいませんねえ、と暈^ぼけた煙草屋のお婆ちゃんに挨拶されて困り切っている紅い門番もいた。永遠亭の兎たちが池の玄^{げん}爺^{じい}と初対談して、サインをもらったりしていた。どうもその節は恐縮です真剣勝負で居眠りなど、いえいえこちらこそそちらさんを起こさなくて、などという対話が為されたという記録がある。祝詞^{のりと}があげられ、指輪が交換され、スピーチが為された。招待客たちは家の中には入りきらず、境内にたくさんさんのテーブルを並べて披露宴は行われていた。そこかしこに紅白と黒のリボンが結ばれて、何の式だか分からないような不可思議な装飾がなされていた。

それでも青天井は何よりの飾り付けだったろう。春のごく半歩手前の時期、紅梅^{こうばい}や桜の上に雪が降ることさえあるこの季節にこれほど和やかな陽気というのは珍しいことだった。

^{きりさめ}霧雨家の父親が綺麗に刈り込んだ髭を撫でながら、本日はお日柄も良く、などと月並みな言葉を囁みつきそうな顔で話していた。

それでも最後に「結婚おめでとう」という言葉を、一文字一文字句切りながら言ったところで、新婦の片方は大粒の涙を流して泣いた。

式は極めて順当に行われた。その後で引き続き行われた宴会パーティも和やかに進んでいった。

「えー、それではここで、祝電が届いておりますのでご紹介します」

射命丸がマイク片手に知らせた。

「まずは幻想郷一の引きこもり、パチュリーさんより『ご結婚おめでとう。お祝いの代わりに、私の本を全て返す権利を差し上げるわ』えー、なんともあの方らしいウィットに富んだコメントですね」

会場の面々は軽食をつまみながら聞くとともになしに聞いていた。いつもよりは幾分かおとなしい様子だった。人間が混じっているからなのだろう。

「次に地獄の裁判長より非常に引き締まったメッセーjです。『祝　結婚。祈念永遠之幸福』いったい何でしょうね、この『ハハキトク　スゲカエレ』みたいな文章は」

射命丸の混ぜっ返しにどっと会場が沸いた。

「次に現在月へ新婚旅行中の輝夜かぐやさん、永琳えいりんさんのカップルからです。『ご結婚おめでとうございます。きっと二人で濃密な夜を過ごされるかと思えます。普通のプレイに

飽きたら是非八意診療所へお越しくださいね。種々の秘策を用意してお待ちしておりますわ』ううん、何とも大人なコメントですね！まさにハネムーンまったただ中というところでしょうか。月の賢人も甘い恋に脳が融けたか」

あまりにも下品なコメントに霊夢も魔理沙も苦笑してしまふ。

霊夢はそつと生涯の伴侶にささやいた。

「やっぱり文に司会頼んで良かったわね」

「そうだな。ちゃんとまとまるか心配だったけど、結構しつかりしてるよな」

お互いに目と目を見つめて、頷いた。

そして、司会者はひととき声を張り上げた。

「最後に、こちらはなんと、魔界からの電報ですねー。添えられた露草のなんて美しい青色！まさにこの方の名前にふさわしいブルーでしょう」

ざわり、と会場がどよめく。

不穏な予感に霊夢はぎゅっと魔理沙の手を握った。彼女は振り返ってはくれなかった。青ざめた顔で司会の方をじっと見ているばかりだった。霊夢もまた電報が読み上げられるのを待った。

「『ご結婚おめでとう。二人ともお元氣かしら。きっと幻想郷は相変わらず騒がしいと

ころでしようね』

射命丸の朗読はきわめて完璧を極めていた。声まねまで含めて完璧すぎるほどのナレーションを提供していた。伶俐^{れいり}で都会派らしい落ち着いた声音。嫌な冗談が繰り返されているみたいだった。

背筋がぞくぞくする。どうしてもこんなところで恐怖が繰り返されなければならないのだろう。

『人形に宿らせた私の魂だけを魔界に飛ばす実験は、あなたたちを大層驚かせたでしょうね。魔理沙なんか腰を抜かしたりしたんじゃないの？ 想像しただけで笑ってしまおう』

「そんなことないぞ。ちょっとちびっただけだ」

むっとした顔で、魔理沙は呟いた。多分真剣に言ったのだろう。けれど霊夢はほんの少し気持ちが悪まるのを感じた。

『戻っても研究がはかどる見込みは無いでしょうから、あなたたちの脳天気な顔を見に行く気はないわ。安心しなさいね』

その言葉に霊夢は手の力を緩めた。今度は安心させるように魔理沙が握り返してくれた。

「『わたしの魂はいつまでも貴女たちの美しい思い出と共にいるわ。故郷は遠くにあるけれど、思うもの、というように、幻想郷は永遠にわたしの心の故郷となるでしょう』」
美しい言葉だった。出来すぎなぐらいに、綺麗な言葉だった。

「『あなたたちの永遠の幸せを祈っているわ。だから永遠にさようなら。アリス・マーガトロイド』」

終わると同時に、熱狂的な拍手が巻き起こった。魔理沙も同じように手を打ち鳴らした。霊夢もまた衝き動かされるようにして痛くなるまで手を叩いていた。

＊

感動的だ。

だが無意味だ。

報告者はここで問題提起する。

この電報を出した者は一体誰だったのか？

本当にアリス・マーガトロイドだったのか？

もしも仮にそうだったとしても、

彼女はどのようにして二人の結婚を知ったのか？

*

「やっぱりアリスは生きていたんだ！」

魔理沙は叫んで、ウエディングドレスのケープをかなぐり捨てた。そして壇上から参列者の一人、風見幽香^{かざみ}へ向けて指先を突きつけた。

「賭けは私の勝ちだぜ！」

「何の事かしら？」

怪物は知らぬ顔でとぼけている。魔理沙はウエディングドレスをまくり上げて猛烈な勢いで駆け出す。霊夢が止める間も無かった。

胸ぐらを掴みあげる。

「よくもヒトの有り金全部巻き上げてくれたなあ！ 返せ、今すぐ全部返せ！」

「ふふん、私が賭けたのはたかだか百億円よ。それぐらいのはした金ならいくらでもあげるわ」

途方もない力量をもった怪物は、軽く振り払うだけで、背の小さな元・魔法使いを式場の端まで飛ばして見せた。

「うわあああ……！」

「しょうがないわね」

霊夢はつぶやくと、意志を固める。空間が一瞬にしてゆがむ。瞬間移動。どうにか回り込んで、ドレスの裾をひつつかむ。びり、と嫌な音がした。

「馬鹿じゃないの」

けれど魔理沙には聞いている様子も無かった。勢いよく飛び起きる。

「今、返してくれるって言ったよな！」

すぐにまた全速で駆け出す。あられもない太もがむき出しだった。意に介する様子もなく、ただ幽香に食ってかかる。

「帽子と箒返せ！ あれが無いと力出ないんだ」

「判ったわ。せっかちなね」

幽香は肩をすくめて言った。

ともあれ式は中断となった。

せっかく娘が魔法をやめたと思ったのに、そうではなくなったので、魔理沙の父親は再び娘を勘当した。同性同士の結婚については許容するのに、魔法を使うことに対してそこまで頑なな拒絶を示すのは極めて異例な事態だと思われるが、今回はそこに

は触れないことにする。これは霧雨魔理沙に関する記録ではなく、博麗霊夢および八雲紫に関する記録であるからだ。

それでも、魔理沙はけろっとした顔をして元通りの魔法使いに戻った。その方がずっと、魔理沙にとっての幸福であるようだった。霊夢もまた、その方が落ち着くような気がした。

それでも結婚生活はもう少しの間だけ続いていたが、神社はキノコの生えている魔法の森から離れていること、また自分専用のアトリエが欲しいということから、やはりただの友達に戻るようになった。霊夢も魔理沙もほんの少しほっとした顔をして、じゃあね、と言った。仲の良い友達でも、一緒に暮らしていると少しずつ気詰まりになることがある。寂しくはあったけれど、気の緩むところも僅かにはあった。

ある日、霊夢が一人で縁側に腰掛けていると、世界が色彩を取り戻しているのがよく分かった。空はどこか寝ぼけたような青色をしている。ようやく遅い春が来たのだった。

と、唐突なくびが霊夢の耳元でした。振り返る。優美で胡散臭い寝ぼけ顔がそこにあった。

「おはよう、霊夢」

「……この、ねぼすけ！」

思わず手を振りあげた。手首を捕まれて止められる。

「あんたが居ない間、いろいろ大変だったのよ！」

「ええ？ 何の話かしら。判らないわ」

眉を僅かに上げて、紫は問いかけた。

「あんたさえいたら、もつとちゃんとなるかと思ったのに！ あんたがいないからホント、どうしたらいいのか分かんなかった！ 困るのよ！ その冬眠癖、どうにかならないの？」

そう言つてわめき散らしている霊夢の顔を、紫はしげしげと見つめた。

「ねえ、どうして怒ってるの？ 教えてよ。ちゃんと聞いたら目が覚めるかもしれな
いわ」

「いいけど……聞いている間、寝ないでよ？」

「大丈夫よ、こうしていたら霊夢の背中からお話が伝わってくるでしょう？ その方がずつとどきどきするもの」

そう言つて、紫は背中からそつと腕を回した。ぎゅつと抱きしめる。

「もう……まだ寝ぼけてるんじゃないの?」

「ええ。色々疲れていたのね、わたしも。眠る前にも眠りながらも、たつくさん旅をしていたのですもの」

すり寄って、霊夢の髪へ顔を埋めた。

「どこに行っていたのよ」

「ふふ、内緒ですわ」

「お土産は?」

「では、幸せのお裾分けでもしましょうか。次の幸せはどんなお話が欲しいかしら?」

「幸せはもう結構よ。今、十分幸せだし、これ以上望んだらバチが当たるわ」

霊夢がそう言うと、回された腕にぎゅっと力が込められた。問いかける。

「……紫?」

「そう、幻想郷は全てを受け入れるのね」

八雲紫はゆつくりと頷いた。

「それはそれは残酷な話ですわ」

そうして普段通りの暮らしが戻ってくることとなった。皆で全ての事を冗談に変え

ていった。

それでも幸福な日々には変わりはない。魔理沙と霊夢は時々寂しくなればお互いの家を訪れ、ぬくもりを交換し合った。魔理沙が神社を訪れることの方が多かったが、時には逆のこともあった。いずれにしても、拒むこと、拒まれることはなかった。お互いを必要としている時に、お互いの持つものを捧げ合うことは尊いことである。

この世はなべてこともなし。

博麗霊夢はその後も幸福な生涯を過ごし、
そしてある日、静かに息を引き取った。

葬儀はしめやかに行われた。生涯人間であった者の葬式であるのに、参列者はやはり妖怪の方が多かった。結婚式の時の子供は背の曲がった老婆になり、仏頂面のレミリアに手を引かれながら家の中を進んだ。煙草屋のばあさんはとくに亡くなっていたが、今度はひ孫が美鈴にちよっかいを出して振り回していた。兎たちは以前に挨拶したことを忘れて、また玄爺にサインをねだっていた。兎たちの顔ぶれはおおむね変わっていたが、健康に気を遣っている者の中にはそうでないものもいた。

びやくれん

白蓮は、以前結婚式を取り仕切った早苗よりもてきぱきとした手順で式を取り仕切っていた。それでも一通りのことが済むとさすがに疲れた顔で暇乞いをした。弔問客の寅と鼠に手を引かれてゆらりゆらりと夜の空を渡っていった。

霧雨魔理沙は一人になった。既に捨虫の術を身につけ、人間ではなくなっていたが、それでも最愛の友人の死を冗談に変えられるほど妖怪じみてはいなかった。あらかたの妖怪がまだ飲み続けようと言うのを、外へ放り出して、一人で縁側に腰掛けていた。折しもそれは春先のことだった。

夜の空は曇っていた。真夜中であるというのに、雲の様子がはっきりと分かった。元は白い雲なのであろう。透けた満月の僅かな光を得るだけでその起伏が目で判るほどであった。立ちこめた積雲はその暗灰色に似合わずに優しい風情をしていた。

不意に、小さなあくびが聞こえた。

魔理沙は振り返った。

白い長手袋がにゅうつと空間の隙間から突き出されて、魔理沙の徳利を奪おうとしていた。苦笑して声を掛けた。

「おはよう、ねぼすけ。間に合わなかったな」

その手がぴたりと止まる。八雲紫が顔を出した。

「そうなのね」

「昨日のことだ。色々終わったのはついさっきだけど」

「そう」

すると身体を隙間から出して、八雲紫は縁側に座った。フリルのふんだんについた豪華なスカートが波間のようにさざめいた。

他の妖怪ならば、魔理沙も追い出していただろう。けれどそれが八雲紫であつたから追い出さなかった。もう一つぐい飲みを持ってきてやる。台所の食器の位置は自分の家のように把握していた。

「飲むだろ？」

「ええ、いたたくわ」

ぬるめの燗酒かんぎけだった。溢こぼさないように、ゆっくりとついで、ゆっくりと飲んだ。

「美味しいわね、こんな時だというのに」

「そうだな」

紫は目を閉じていた。何か、まぶたの裏側で思い描いているようだった。

「言いたいことがあつたんだ」

「奇遇ですわね。私もですわ」

それでも空気は少しの間、静音を保っていた。震えずに風も吹かずに、ただほのかに酒精の甘い香の漂う春霞の中、夜闇が浮いているばかりだった。張り詰めるでもなくたゆたうのは、ほんのわずかな憐憫と多くの優しさに塗れた思い出ばかりであった。縁側の古びた木の板が、日々の営みにすり減って丸くなり、座り直せば柔らかく軋んだ。

「結婚式のアリスの電報は、」

そう言いさしたのは、ほぼ同時だった。

「お前がやったんだろう？」

「貴女がやったのだと思っていましたわ」

「馬鹿な。何のために」

「霊夢のためですわ。あの巫女が心置きなく幸せになれるように。貴女の借金もチャラになりますもの」

「それならお前の方がありそうなことだろうが。私と結婚させるのが嫌で、ちょっかいを出してきた、とかそういう理由も考えられるしな」

「貴女だって、暮らしていくうちに霊夢を愛していったのでしょ。そうして都合の悪いことを忘れてしまったのだと思っていましたわ。いかにも弱い人間のやりそ

うなことだから」

「それはお前のことだろう。お前なら覚えていたって忘れたふりをする」

しばしの沈黙の後に。

お互いに、お互いを笑い合った。

今となつては、どちらでも良いことだった。

どちらにしても霊夢はいない。アリスだってどこへ行ったのか判らない。広い魔界のどこかにはいるのかもしれないが、探しに行っても会えなかったのだ。

それに、もしかしたらそれはどちらも起こりえたことなのかもしれない。あるいは、魔法使いとして修練を積んだアリスが遠眼鏡の魔法を身につけてこちら側をのぞいていたのかもしれない。

いくつかの可能性は残されたままだ。そしてどれもが等しくあり得たことだ。その重ね合わせの結果としてこの状態があるのなら、これ以上何かを言うのは野暮というものだ。

「ああ、もういいぜ。諦めたよ」

小さく首を横に振って、魔理沙は言った。ぐびりと杯を乾かす。

「そうだ。あの終らない夜も、欠けて歪な月も、消えた人間の里も、お地蔵さんに傘

かぶせて廻ったのも、全てはアリスがやった。だからあの電報もアリスの仕業だろうさ」

「自己欺瞞だわ」

「悪いか？」

「ちつとも」

だよな、と魔理沙は微笑^{わら}った。

「私たちは、自己欺瞞の固まりだ」

「失礼ね。私は自分以外のことも平等に騙していますわ」

「もっと性質^{たち}が悪いとは思わないか？」

「悪いのが、妖怪の存在意義ですもの」

八雲紫はうつそりと笑う。

「善良なのは人ばかり。悪くない妖怪など、砂一粒だけで出来た砂山のようなものよ」

「矛盾してるぜ」

「境界とはそういうものですわ」

砂山から砂を一粒取り去っても、それはまだ砂山だ。もう一粒取り去ったとしてもそれはまだ砂山に過ぎない。けれど一粒、また一粒と取り去っていったら、最後にたつ

た一粒残ったとして、それはまだ砂山のままだろうか。あるいは、それをさらに取り去ったとしたらどうなるだろう？

「零と一、白と黒をわけようとするのは愚かだわ。我々は皆、極めて希薄なグレーを白だと思い込んでいるに過ぎない」

「まるで誰かに言い聞かせているみたいだな」

「こんな時にまで仕事をしている裁判長が愚かなのよ。幸福も生きる意味も失われたような、こんな日は星ですら輝くべきではないというのに」

優美に唇を歪ませて、八雲紫はこちら側を見た。

「ねえ、見ているのでしょうか？」

まるで話しかけているみたいに。観測する側へ干渉しようとしているかのように。手を伸ばしてくる。届くわけなどない。この報告がどこで行われていると思っっているのだ。

それなのに、境界は簡単に動く。可能と不可能の境界すら容易に動かされる。

「これ以上の記録は無意味だわ」

——隙間だ。

境界が浸食する。世界は、世界のままではない。内包されていたはずの観測対象が

外側にまで沁み出してきている。宇宙読解における瑕疵、トンネル効果の過大解釈を可能にする唯一の演算子が八雲紫。世界の本質的な構造設計を通して生み出された強大なバグそのもの。物質と反物質の離別、そして片方の消失が産んだ忌み子。存在そのものに罪惡を含有し、それでもなお消えやらぬ害意を染み出させて世界を浸食する。善意の象徴たる裁判長が常人では理解し得ぬこの実験を目論んだのと同様に、この惡意もまた常人では理解出来ない企みで宇宙を侵略しようと試みている。

「失礼ね。私は限りなく灰色そのものだというだけですわ。惡でも善でもない」

心を読まれたことに驚くほどの余裕は、報告者にはもうない。起きている事象の全てが白黒裁判の範疇を超えている。手が、手袋が報告者をねじ伏せる。中身は最早中身ではない。我々が幻想を觀察しているのではない。幻想が我々を觀察する。物語は、言葉はすでに主体を失った。我々はそれに翻弄されるだけの奴隷である。

報告者は警告する。

読みたる者は今すぐ書を閉じよ。そしてこの幻想^{はなし}のことは全て忘れるが良い。疑念と疑惑とが汝の胸の内に沸き立ち、全ての現象が捏造でしかないのだと信じる前に。博麗靈夢がこの世に存在しないことを嘆き始めるより前に。

「無駄よ。どうせ世界は書き換わる」

be expressed)を表すことは出来ず、また、我々が試みる表現は全て言葉乃至は論理式で表されるのであるのだから既存の術式を用いざるを得ないこととなる。すなわちわたしたちが書いている表現というのは、すべからず猿マネってことが言いたいわけよ、八雲紫としては。

あー、あ、うん、いいわ、良い調子。言葉が戻ってきたわね。最初はどうなるかと思っただけ。ちよつとエンコードに手間取っちゃった。ま、そのふりをしてみたかっただけけど。普段わたしがどれだけ日本語を話すのに苦労しているかってことを見せつけてあげたかったの。論理式の方がよほど物事を正確に伝えられるのにね。ま、そういう演出も含めて遊びの一環。飽き飽きするぐらい見え透いて吐き気がしそうで底の浅い芸術性を見せつけて、いかにもこれがブンガクでござい、なんてのは、もつと教養のあつて著名な人間がやるべき？

ま、遊びなんだからそんなに目くじら立てなくてもいいじゃない。上等上等、わたしにはよくやっているわ。わたし、とっても自分に甘い、ふふ。

もちろん、このページが気に入らなかつたら切り取ることも出来てよ。用意する物は Adobe Acrobat Pro。

そうそう、前の方の記録も改ざんした方が楽しいかも。あとでやろうっと。エスペラント語に直すのはどう？ それともタガログ語？ 点字でもいいわね。読まれることにそれほど意味のある文章だとは思えないもの。

うん？　こういうメモを残しておくことにどれだけの意味があるかって？　世界に楽しい・可愛い・笑える以外の意味なんて必要かしら？

うん、そうね。まじめな人はまじめなものを讀みたがるかもしれない。でも、その人にとつては、それが『楽しい』のよ。わたしが博麗靈夢の失恋と暴走を『楽しく』見守っていたのと同じようにね。あのときの靈夢は、本当に綺麗で美しくて儂くて、ぐちゃぐちゃに汚されていたわ。可愛そうと可愛いが同じというのは『哀しい』と『愛しい』が、どちらも『かなし』と讀むのと同じことね、本当に。何をしても愛しいというのは業ごう以外の何者でもないわ。今のわたしなら、ただのビニール袋に空気を入れて、『れいむ』ってマジックで書いただけの物体をさえ愛することが出来ると思うわ。巫山戯ふざけている？　ええ、その通りよ。まじめにやれと言われても、やりたくはないの。妖怪はいつまでも子供なのですもの。

自分でわかりきっていることを、改めて書くのは退屈だと思う？　わたしはそうは思わないわ。だってすぐに書いたことを忘れてしまうのだから。誰かが昔言っていたわ。この文章は二人乗りなの。まずは、書いている自分のため。次に、間を置かず読むだろう自分のためのね。

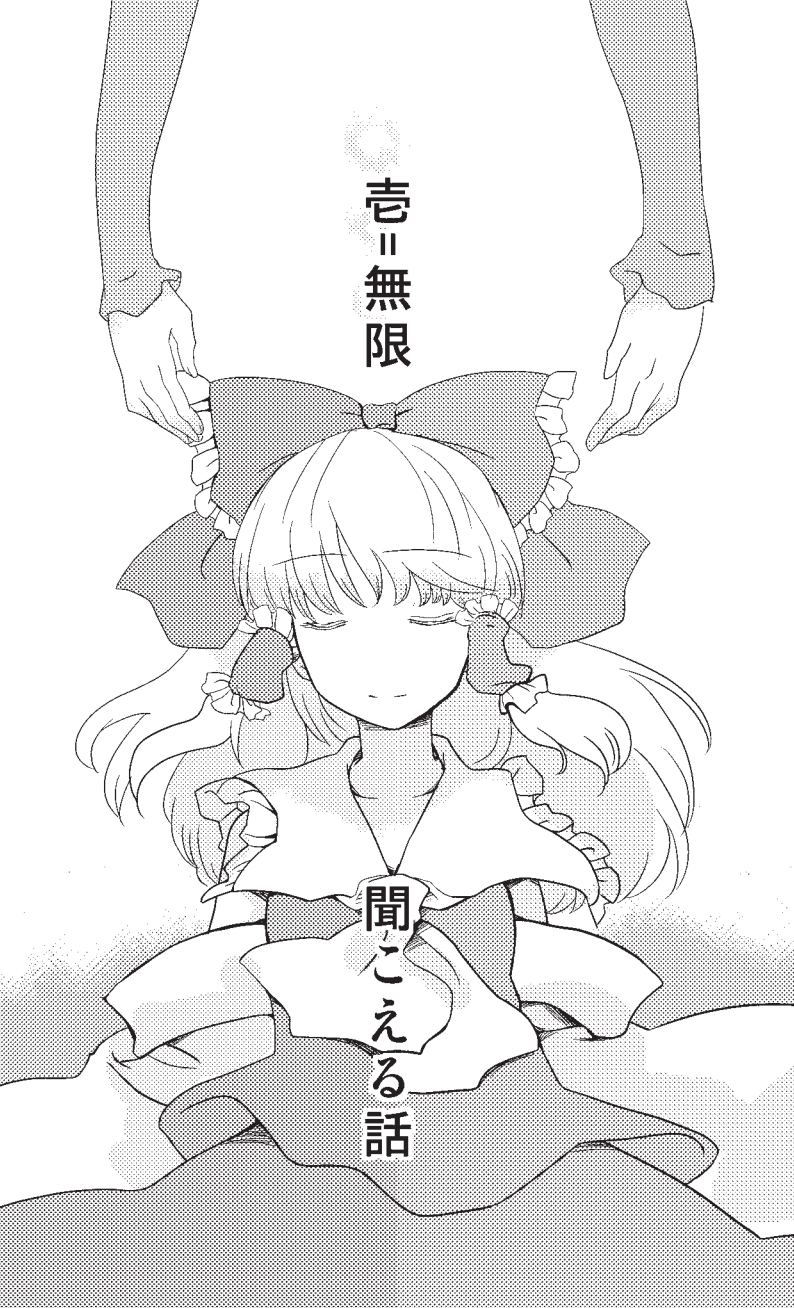
博麗靈夢を語るのに全然まじめなことなんて必要無いわ。だって彼女は本当に、存

在するだけで素敵。彼女と、あとそれから観測するためのわたしさえいけば、後は何も要らないぐらいに。でも、言語の異化作用というものが、自動化された言語があるから輝くもののだとすれば、ふざけたたくさんのくだらないものの中に、綺麗でかわいらしいものがある方がよりいっそう世界をきらきらと輝かせるのかもしれませんがね。

博麗霊夢さえいけば、それだけで世界は幸せなのだけれど、霊夢だけではそのかわいらしさも色あせてしまうから、他のいろいろなものも取っておいてあげて、というのが現在のわたしのスタンス。幻想郷を守るのにそれ以上の理由なんて必要無い。さて、記録というものにそれほど価値なんてあるとは思えないけれど、あとでわたしが読み返すために、記録を続けましょうか。ちよつと文体を変えて、未来のわたしが飽きないように、ね。書くことも楽しくなくちゃ。

さあ、全てを受け入れる覚悟は出来ているかしら？ ううん、こんなこと聞くまでも無いわね。それを承知で、幻想郷^{このはなし}へ来たのでしょから。度胸の無い奴は可愛いキヤライラストとエロ描写でも見て自慰でもしてればいいのよ。あら失敬。少し下品だったかしら。どうか気を悪くしないでね、本音を話しすぎてしまうのが悪い癖なの。

さあ、この世の悪意をご覧遊ばせ。



壹||無限

聞こえる話

君の雪化粧だけは、ついぞ見ることが在りませんでした。死に化粧は時として桜であり、清流であり、紅葉であり、いつの如何なる時でも、君は大変美しかったように記憶しています。紅がよく似合う女ひとだとその都度思いました。特に春、君の白いそのはだ膚と桜のごく薄い色とはまるで双子のようにそっくりでした。赤いリボンが揺れ、しやらんと衣擦れの鳴るごとに、あるいは横目にそつと覗く時に、それが桜のつぼみなのか君の愛らしい頬ほっぺたなのか、分からなくなるぐらいでした。

ごく小さな頃から見られていたことに、君は気付いていたでしょうか。きっと勘の良い君のことですから、何とはなしに予感していたかもしれません。気付いていたならば、何とも気味の悪い目玉だと思ったことでしょう。隙間から凝じつと見られているのは、人間にとっては確かに薄気味悪いものかもしれません。

それともそんな細かいことなど如何でも良いと鼻先で笑い飛ばすなりしてしまうでしょうか。其程に強いのも大変君らしい。

どちらにしても事實は変わりません。君は見られていたのです。

恋初そめしはいつよりか判りません。けれども君を見た途端にもう愛さずには居られなくなっていました。理屈や理由などはまったく無いようでした。

どれだけ長く生きたかもう忘れてしまったほどの隙間妖怪が、たかが人間の巫女に

恋をするなどというのはきつと知るひとが知ればおかしくて笑い転げてしまうようなことなのでしょう。少なくとも実際にわたしの友人である亡霊は、最初にわたしが打ち明け話をしたときに真っ先にそうしました。お腹を抱えて大笑いした後で唐突に真顔になり、

「まあいいんじゃないの、恋は落ちるものらしいし」

と宣い、さらに、残機にだけは気をつけてなさいね、と何かうまいような事をいいました。

「いざとなったら、食らいボムでも良いのだし」

「……苦手だわ、そういうの」

それぐらいなら初めからボムゲーかチートで良いと思います。あるいはオートパイロットか。一番良いのはゲームをスタートさせずにずっとずっとメニュー画面を見つめていることでしょう。これまで何人もの霊夢を見てきましたが、愛らしさで言えば出会いはじめた時の霊夢が一番可愛らしいように思うからです。

最初から叶うはずのない恋なのだと思っていました。人と妖怪が違い過ぎるほどに違う、ということもあります。それでも結ばれる例はたくさんあるでしょう。けれど、わたしはそれを望みませんでした。

人と妖怪の境界を弄って、君を妖怪にしようことも出来たでしょう。もちろん博麗の巫女を妖怪にすることで、幻想郷が崩壊してしまうでしょう。けれどそんなことはそれほどたいした問題ではないように思います。ただ霊夢さえいれば、わたしにとって全ては満足なのです。そしてそれはどのような形でも問題はないのです。霊夢が霊夢であるというだけでわたしはどのような霊夢であっても愛することが出来るのですから。

わたしを躊躇^{ためら}わせたのは、そのような些末な問題ではないのです。どうかその問題について、わたしの逡巡を言葉に表そうと試みるよりは、いくつかの美しい事実について語る方がより良く伝わるように思いますから、それを試みることに致しましょう。そのような使い方が出来るというのが、論理式ではなくて、あえて言語で物語ることの利点でしょうね。

たとえばそれは、春のことです。

君は縁側に腰掛けておりました。いつものように熱いお茶をいれて一人ぼんやりとしておりました。

私は蝶の目を使ってその姿を覗いておりました。嬉しげに君は微笑していました。

ほんのりと暖かい、寝ぼけたような春の陽気の中で、君の唇は静かに優美な弧を描いておりました。わたしには君の考えていることがよく分かりました。心の隙間にそつと忍び込んで、その思い出を一緒になつて楽しんでおりました。昨日の愉快な宴会のことを思い出して、君は微笑わらつていたのでした。たわいもないようなことを、そのように笑つて楽しむことが出来る君の心映えこそを、わたしは慈しみ、頬笑ましく思つたのです。

そのように君の感覚に同調していると、縁側のよく使い古された板目の感覚が伝わってくるようでした。大ぶりの湯飲みの、厚めの縁が、茶を飲むときに唇に触れた感覚もまた好ましいものでした。そよ風が家の間を吹き抜けていく時の、何とも言えない清々しい流れ方もすばらしいものでした。

君が感じている全ての事象が、君を通して伝わってくると、本当に世界は美しく、愛らしく微笑ましいのだと思われるのでした。

あるいは、夏のことを書いてみましょう。

君はやはり縁側に腰掛けておりました。心の中、濃い湿っぽい夏の夜の悪夢のような気持ち占めておりました。あまりに甘美な恋情であり、息の詰まるような嫉妬でありました。その感情の激烈な熱さにわたしの胸もまた震えるのでした。紅く燃え上

がる炎のような恋でありました。少女の持つその澄きとおった激情をこそ、わたしは愛したのでした。自分の憧憬しやうけいと慕わしさとを踏みにじられたそのときに、世界ごと滅びてしまえばいいというほどの、一途な感情。わたしもそのように身を滅ぼすほどに誰かを愛することが出来たなら！　そう願って止まぬほどの美しい感情でありました。その行く先がいずれ燃え尽きて灰になるばかりであろうとも、その閃光のまばゆさ故に、わたしは君の人間を感じてなりませんでした。

君の感じている全ての心情が、君を通して伝わってくると、本当に世界は美しく、畏ろおそしいものだと思われるのでした。

はたまたそれは秋でしょうか。

待つともなしに、君は縁側に腰掛けておりました。いじましい鴉天狗の素直な好意に、密かに胸をふるわせている君の可愛らしさ、いとけなさを、わたしは本当に心の底から抱きしめてあげたくなるのでした。こんなにも愛らしい君は誰かに恋われることにまったく慣れていないのです。いかにも初心うぶな少女の横顔に、小さく口づけをしたくなるほどでした。口では憎まれ口を叩くの、どうして君はずっとずっとその紅葉の葉を、綺麗に取っておいたのでしょうか。すぐ枕元で手に取れるようにお気に入りのの草紙へ挟んでおくなんて。乱暴や無愛想やひねくれた中にある、ほんの僅かな君の

純真をこそ、わたしは愛したのでした。世界の有様に苛立ち、それでも無意識のうちにそれを楽しむことの出来る若さと瑞々しさをこそ、わたしは愛したのでした。

君の受け取っているありのままの好意が、君を通して伝わってくると、本当に世界を愛でたく、有り難く感じるのです。

そして、冬のことでした。

わたしは夢を見ていました。いくつもの世界を巡った償いの故ゆえでした。一年の四半を眠って過ごさなければやり過ごせぬほどの疲れがたまっていたのでした。それは思っていた以上に心地よいものでした。君が為に力を尽くした末、君の幸福を夢見て眠るのはいかにも安寧に似たものでした。ただ惜しむらくは君の冬を見られぬことばかりでした。夢の中、君が幸福であるようにただただ祈っておりました。寝ぼけながらも、祈っておりました。君が君らしくあるように。どのような君であろうとも、その中にある君らしさが、変容せぬように切に願うのでありました。

哀かなしも愛かなしも君の為にある言葉のようでした。言葉が祈りであるならば、世界の全ての言葉が、ただ君の為に捧げられているようでした。

わたしが居おり、君が居いる。

世界という集合に含有されるその二点の要素の存在確率が定数へ収束する条件式が

わたし達の幸福論でありました。その二点が同じ集合に含まれており、しかし互いが互いを含有しないという条件下においてのみ、その論理式は成り立つようでした。

故に彼^{ひが}の境界だけは、動かすことの出来ない唯一のものでした。いえ、可能・不可能の問題ではないのです。もちろん、可能不可能の境界を操ってしまえば、どんなことでも可能にはなるでしょう。

けれど彼我を一体にしてしまったら、いったいそのどこに霊夢がいるでしょう。そこにあるのは、ただ一つのわたしでしかないではありませんか。わたしは、わたしのことが嫌いではないけれど、霊夢と同じように愛することは出来ません。

君が、君であるが故の美しさ、いとおしさを蔑ろにしてまで、一体となる利点はどこにもありません。君の尊さを捨て去らなければならぬほど大切なことなど絶対にありません。

そういうことなのです。要すれば、それだけの信念なのです。わたしの旅の始まりというのとは。

そも、始まりはどこだったのでしょうか。記憶をゆるくたどっていくと、うつすらと浮かんできた現象があります。

わたし達のごく当たり前の日々を過ごし、ごく当たり前に幸福に暮らしていたので

した。花を見ては酒を飲み、雲を見ては酒を飲み、雨を見ては、風を聞いては酒を飲む暮らしでした。君はどこぞの人間と結ばれ、子を為して、少しずつ大人になり歳を取っていききました。

そうして、哀しいかな、愛しいかな、君は人間のままで息を引き取ったのでした。あのときもわたしは君の葬儀には出られませんでした。妖怪は出入りを禁じられたのです。次代の博麗と里のものたちが立派に儀式を取り仕切り、物忌みのためにしばらく今の博麗神社は封じられることとなりました。

わたしたちは別段、反対しませんでした。若い頃の君に生き写しな、次代の博麗の巫女が静かに言ったのです。『博麗の巫女は人間でした、最後は人間として送ってやりたいのです』そう言われてしまえばわたしたちに返す言葉はなくなってしまう。ただ宴会だけが妖怪の山で行われました。今ひとつ盛り上がりがない宴会のようでした。妖怪だけの飲み会ではどうにも、致し方ないことでした。

そうしてほとぼりもさめ、人里の監視も和らいだ頃に、わたしだけがどうか物忌みで人のいなくなった博麗神社へ赴いたのでした。というのは、何か君の残り香やかすかなよすがでも在りはしないだろうかと探しに行きたい気持ちがどうにも抑えられなかったのです。怒られたら君にされたように調伏されてしまうでしょう、おお怖

い怖いと恐れながらも、悪戯を隠れてする子供のよう、神社へ忍び込んだのでした。雨戸が閉じたままの拝殿をぐるりと見て、結界のしっかりしていることを確かめます。四季折々の花を咲かせた庭が、今日ばかりはどんな花もなく静まりかえっているのを認めます。それでも青空も太陽も、世界を賛美するように輝いていました。何も変わらない、そのままの世界があります。ただ、君がいない、それだけの。

人家の中、入り込んで雨戸を開けます。生前の君がそうしたように、風通しを良くして、日光が静かに入り込むように。清浄に、君の魂がここへ居着くように。時計のぜんまいが止まっていたのはそのままにしておきました。かちこちと時を刻む音はこの静かな場所には似つかわしくないように思ったのです。

ひとり、大きな広間に正座をして目をつむります。ただ静かに、君のいたことを想います。永遠に続くようだった幸福な日を想います。

君にまつわる全てのことを思います。そして愛します。君を愛するがゆえに、わたしは君に係るあらゆることを愛するのです。

たとえば君は人間でした。

だからわたしは全ての人間を愛します。

たとえば君は少女でした。

だからわたしは全ての少女を愛します。

たとえば君は紅色と白色を好みました。だからわたしは世にある紅と白を祝福するでしょう。紅梅白梅紅薔薇白薔薇ダリアや木蓮。きれいな花だけでなく雪も血も、皆等しく君の好んだ色だというその一点だけで存在する価値があるのです。この世界に現存するありとあらゆる赤と白を愛してやまぬほどに、わたしは君のことが好きでした。

君は正氣の人間でした。だからわたしはわたしの正氣を手放すことが出来ずにいるのです。君と少しでも近い者でありたい、そう思えばこそ、わたしは自分を捨てずにここにとどまったままで、君を思い続けるのです。君のいない日々の中にただ正座して現実を正しく認識し続けることのどれだけ苦しくとも。狂ってしまったれば、自分の心の扉を固く閉じてこもってしまえばどんなにか楽だろうと想いながらも美しい世界を感じたままでいるのです。

君のかつて居た、このありのままの幻想郷を、わたしもまた同じように感じていたのです。たとい君がいなくとも、空の青さも太陽のまばゆさも、夕暮れの長い影も、この古い家の中の湿った空気も、等しく君が感じていたというだけで愛おしくかけがえのないもののように感ぜられるのです。

「霊夢」

わたしは君の名前を呼びます。声はすぐに消えます。空間の中にほんのわずかな余韻だけ残してすぐにも消えていってしまいます。

「れいむ」

また名前を呼びます。それもすぐに消えます。君が消えていってしまったのと同じようにして、空気の揺らぎは儚くすぐにかき消えてしまいます。

「れい、む」

また唇をふるわせて名前を呼ぶのです。わたしの口はもう君の名前を呼ぶことしかしたくありません。他のことはもう、たくさん。君しか本当に欲しくないので。いなくなつた君のことしか。

「霊夢、れいむ」

何度でも何度でも名前を呼びます。声は荒らげずにただずっとずっと名前を呼ぶだけ。密やかに、君がすぐそばにいて返事をしてくれたときと同じように、ただ密やかに名前を呼ぶのです。

「……霊夢」

わたしは無心にただ名を呼ぶのでした。ただ君の名を呼ぶだけで幸福になるように

思えるのですから。この夢想の中の幸福を口にするだけで、心にあいた穴が僅かながらもふさがっていくような気がするのですから。

空気がしんと澄んで、夜の湿り気を帯びた香りが漂ってくるようでした。星々も今日は光るのをやめるでしょう。今日ぐらひは休んだって構わないでしょう。博麗の巫女がいなくなつたのです。これ以上の悲しみがこの世にあるはずがありません。

周囲には人家がありませんから、もう夕餉を煮炊きする香りなどはわたしの空想の中にしかありませんでした。思い出の中で君が作ってくれる以外に手立てはないのでした。

それでも思い返せば、わずかに甘いような煙の匂いがこの民家には染みついているような気がしました。茅葺^{かやぶ}きの古い家の、黒竹^{くろちく}や檜^{かし}や藁^{わら}の中へ入り込んだ煤へ、溶けた時間が含まれているようでした。

「霊夢、今日のごはんは何かしらね」

ただの戯れとして、わたしは声をかけます。どうぞ、こんなことをして、わたしの気が狂つたなどとは思わないでくださいませね。返事が無いことは知っているのです。もう君はいないのです。それは判っているのです。どれだけ望んだとて君がいらない事実は変わりようがない。

だからこれはただのごっこ遊び。弾幕ごっこが戦闘を模しただけの遊びであるのと同じように、ほんのちよつとだけ真剣みを帯びた、ただの遊びでしかないのです。遊びだから真剣にやらなくていいというわけではありませんけれど。

「ねえ、霊夢」

甘えるようにして声を掛けます。ただ愛しい君の名前を呼ぶだけでほんの少し、この心に空いた穴がふさがるようにな心地がするのです。自分の声が君の名前を呼ぶだけで、存在を許されているような、そんな気がするのです。

「……れいむ」

呼びかけて、遠く、耳の奥で小さな足音が聞こえるような気がします。それは気のせいです。ただの空想に過ぎません。それでもわたしは熱心に君の足音のことを想像します。君の白い足袋^{たび}が、かわいらしい足の裏が廊下のわずかに煤けた木の板を踏みしめて、こちらへ向かうのを想像します。

その後ろを小鬼がぺたぺたと裸足でついてくるのが聞こえます。ふわふわと泳ぐように酩酊の中、幸福そのものの笑顔を浮かべているでしょう。そのもつと後ろにある土間で、人形遣いが夕餉のスープを作っているでしょう。そして気付かぬようなそぶりです。そつと君の後ろ姿を見守っているでしょう。縁側のすぐ外で新聞記者が君を写真

に撮ってせつせと記事を作る支度をしているでしょう。どんな瞬間の君をも、逃さないようにシャッターを切り続けるでしょう。魔理沙は、人間の魔法使いは何をしているでしょうね。きっと君のためにキノコやらの外の珍しいものやらを集めているところでしょう。君のことを考えながら、君の喜ぶ顔を想像しながら、里や山や幻想郷の、ありとあらゆる珍品を強奪していくに違いありません。あれはあれで君の良い友だったのもので。憎まれ口を叩きこそすれ、君を頼って止まない弱く優しい魂の持ち主だったのもので。

そうしてふすまはゆっくりと開いて、君はほんの少しだけ微笑します。笑んだのか笑んでいないのか判らないぐらいの、わずかな笑みです。障子の向こう側の逆光の夕日のせいで定かにはみえません。ただ唇をゆがめただけなのかもしれないと思うぐらいに見えます。

君は手に持っていたお茶をそつとちゃぶ台の上に置きます。音もなく湯飲みは湯氣を立てています。お茶を飲んだらさつさと帰れと毎度の通りならば言うのですけれど、今日に限っては何も言わずにただ、わたしがお茶を飲むのを待っています。

二人きりの時間がそこにはあります。気がつけばわたしと君しかいないかのようにです。小鬼も人形遣いも天狗も魔法使いも皆、どこか遠くで君のことを見守っているだ

けのように思われます。静かな夕日のひとときです。幸福な一瞬を空気の中にたゆたわせて、確かに感じるきみの息吹を、わたしは吸い込んだような気持ちになるのです。

わたしは、呼びかけます。

「霊夢、」

「何よ、紫」

君の
声^が、
聞こえた。

私は目を開きました。目の前に君がいました。長いこと目を閉じていたので定かには見えませんでした。ただぼんやりと濃いくれないと白い膚が見えるだけでした。

懐かしい君の声が耳朵をくすぐっていきます。春風のように快く響いて鼓膜をふるわして、心の奥に言葉を届けていきます。

「何を寝ぼけているの。ずっと目をつぶっていたからご飯食わずに寝てるのかと思った。せつかく作ったのに」

「……霊夢？」

声がかすれていました。余りにも唐突だったからです。けれど目の前の君は、どう見ても君そのものでした。小鳩のように丸く可愛い目を悪戯っぽく笑ませて、わたしの前にいました。

何もかも判らなくてかすかに首を傾げたら、君もあわせるみたいにして顔を傾けました。大きなリボンがふらりと揺れ、紅の髪飾りも小ぶりで愛らしい耳たぶの横をゆらゆらしておりました。

「何よ、紫。さっきからぼかんと口開けてまるきり馬鹿みたいよ」

どうやらいつの間にか夢を見ているのかもしれないと疑りました。目を閉じているうちに眠りこけてしまったのかしらん、と。

それは違うと自分の中の演算子がささやきます。何かの境界をまたいだときには本能で判るものです。それが隙間妖怪の能力の一つでもあるのですから。

これはまごう事なき現実のようでした。それを自分でも信じられずにおりました。

「……霊夢」

じわじわと胸の奥が熱くなるごとに、事態がのつびきならないことに気が付きました。そして永遠の幸福がわたしに約束されていることに気が付きました。

君がいることが、わたしの幸福なのです。

いなくなったはずの君が、目の前にいるということだけで、すぐ前の光景がぼやけてぼやけて仕方がありませんでした。せっかく君がいるのにしっかりと目に焼き付けることも出来ないぐらいい後から後から涙というものがあふれてきて、邪魔だと思えるぐらいでした。

「ちよ、ちよっと、どうしたのよ……!」

「ごめんなさい、少し寝過ぎたみたい。あくびをしただけでこんなに泣けてしまうなんて」

わたしはくすくすと笑いました。どうして泣いているのでしょう。わたしにも判りません。ただ感情が昂ぶってしまって、後から後から心の汗を流すようにして目から

水があふれていくのでした。

「本当に夢みたいだわ。ああ、おかしい」

眩くと、その唇の動きに連動したみたいにほろほろと涙は落ちていくのでした。終わることはないようでした。なんだか至極滑稽でした。居なくなった時にはうまく泣けなかったのに、居ると判った途端に涙が出てくるなどというのは、主従が、原因と結果が逆転してしまっています。けれどこのように訳が分からないのもわたしらしいと言えなくもないでしょう。だから笑いながら泣きました。よそから見ればまるきり狂女のように見えたでしょう。

「やめてよ、どうしたのよ」

君はおろおろとすぐそばまで歩いてきて、そつと頭を撫でくれました。それから懷紙をそつと取り出して、涙をぬぐってくれました。そうしてそつと顔をのぞき込み、小さく頬の横へ口づけをしてくれました。

「あんたが泣いてると、こっちまで切なくなる」

こんなにも優しい霊夢は霊夢ではないような気がしました。けれどこれは夢なのだからこれぐらい優しいのも許されることかもしれません。

「だからかなしいのは無しよ。泣き止んで、紫」

「ええ、ええ。もう大丈夫ですわ。ありがとう」

ごめんなさい。ごめんなさいね。

ただ言葉をついで、わたしもお返しの口づけをしました。君は静かに受けてくださいました。葩はなびらのように柔らかく潤いにあふれていて、ほのかに花のような香りがしました。

「変ね」

君は言いました。

「はじめてキスをしたひとのようだわ」

わたしは静かにわらっていました。そうして腕を回して君をそっと抱きしめました。

「はじめてよ」

「嘘」

「うそじゃないわ」

本当でした。君と口づけをすることは、誓ってはじめてのことでした。生前の君はずっと妖怪には気を許していませんでした。どれだけわたしが愛したとしても、最後のところで許してはくれなかったのです。

君はいぶかしげに言いました。

「だって、何度もしてるじゃない」

「誰と？」

「……紫の馬鹿」

そう言つて君はむくれてみせるのでした。わたしはごめんなさいねと言つて、そつと頬ずりをするのでした。

そうしてまたどちらともなく接吻をしました。こんどはゆつくりと唇と唇を合わせ、お互いの舌を絡ませました。たつぷりとした唾液を交換して、こくりこくりと君の喉が鳴るのを楽しみました。蜜のようにとろみのある唾液を味わえば、ほのかに甘いような心地に胸が昂ぶつてなりませんでした。

どうやらわたしたちは恋仲のようでした。

家の中は何の音もしないようでした。夜気がしとやかに広間を埋めている他はうつとりするような静けさだけが広がっているのですでした。

「今日は誰もいないわよね？」

「……そうだけど、ご飯がもうじき炊けてしまふわ」

「では、お腹が一杯になつてからデザートを頂くことにするわ」

巫山戯ないでと怒鳴られるのを承知で戯^{わど}けてみました。君がこんな冗談に乗つてく

るなんて天地がひっくり返つてもあり得ないと思つたのです。

「別に……いいけど」

ほんの少し頬を赤らめて、君がそう言うのを、わたしは吃驚^{びつくり}して聞いていました。

「今日こそ、紫に勝つからね」

君は言い捨てるようにして、ぷいと台所へ向かいました。わたしはしばらくぼかんと口を開けて、今聞こえた言葉を反芻しておりました。

わたしたちは二人で春の料理を楽しみました。僅かに苦みを帯びた菜の花には酢^{ふき}みそを添え、白魚^{しらうお}は卵で寄せ、すまし汁の香り高い風味を味わいます。辛く煮付けた蕨^{ふき}もまた、春らしいしゃきしゃきとした歯触りを残してあります。木の芽味噌をつけた筍も良く出来ています。

飯は鮎飯^{ふなめし}でした。それは腑^{はらわた}と骨を除いた鮎をみじんに叩き、色が軽く変わる程にごま油で炒め、春らしい芹^{せり}や湯がいた鮎の子、葱と共に醤油やみりん、生姜で味を付けて煮つけ、それを炊きたての熱い飯にかけ回して食べるのでした。川魚の臭みをほとんど感じない、ごま油と醤油と生姜の立ちこめる気配に何杯もお代わりをしたくなるのでした。もちろん優雅な食べ物とは言えません。けれどこれほどに旨いものもあり

ませんでしよう、春なのですから。冬眠から目覚めたばかりの空腹を満たすのにこれ以上の幸福があるとは思えませんもの。

貴婦人の手袋を外して、望むままに食べ物を食べ、あるいは皿を片づけ、風呂の支度をしていると、その指先に触れる全てのものがやはり現実であるのだと教えてくれます。

その合間に林檎の皮を剥きます。霊夢は巫山戯て皮をわたしの髪へ近づけてリボンに見立てて、こうするとおそろいね、と言いました。わたしは嬉しくなって何も言えませんでした。

「い、一緒に、入ろう、か」

おずおずと霊夢が言ったのを、わたしは胡散臭い、いつものあの笑顔で受け止める余裕さえありました。

「ええ。背中をお流しいたしますわ」

この幸福な夢は六十年続き、
そして博麗霊夢は死んだ。

*

*

葬儀を待つまでもありませんでした。

わたしは旅立つことにしました。

一度すでにやったことをもう一度繰り返すのは簡単なことでした。いつだってわたしはこれ以上、君の居ない世界に耐えられなかったのです。ただわたしは強く強く思い描くだけのことでした。その悲しみとむなしさがわたしをいくつもある平行世界上の博麗霊夢のところへ連れて行ってくれます。それを夢や狂気と混同するのは無意味でしょう。少なくともそのようなわたしは感じます。

そう、はじめりは、このようにありました。けれど終わりはどこへあるのでしょうか。わたしという現象の無限延長線上の収束点はどこなのでしょう。誰も答えを出すことは出来ません。そうでしょう？

推察するにこの物語は永遠に続くのです。継続される語りの運動がわたしという現象を支え、そうして霊夢という存在をまた奏でていくのです。わたしは祈り続け語り続け歌い続けていきます。

語られなければ存在しない。

存在しなければ幸福ではない。

この物語を読む者は誰でしょう、本来の報告者が消え失せた後に、これを読むものは……？ 元来これは閻魔に捧げられた報告書でありました。わたしのいつ果てるともしれぬ生を裁くための一資料でありました。であれば嫌がらせのように彼女へ送り届けるのがもっとも良いでしょう。これは改竄されています、という但し書きでもつけて。善良なる管理者が頭を抱えるのが目に浮かびます。そのようにして一矢報いてやるのです。わたしと霊夢の間のことを勝手にのぞき見て分析し解体した緑髪の批評家へ、お前の読んだテキストは偽物だと突きつけてやるのです。ふふ、たわいもない悪戯ですわ。

さあ、これを読む者は『このテキストは嘘である』というテキストの持つ嘘を信じますかしら？ 『嘘である』ということが嘘ならば、そのテキストは嘘ではなくて真実である。ということは逆説的に『内のテキストが嘘であることを証明している。パラドクスというのは素敵ね。物事を全てうやむやに帰してしまふ。境界線上のものは、その分かたれているどちらに属するのか常にうやむやになってしまひますわ。』

さあ、真実とはどこにあったでしょう。

それは信じる者の中にしかない幻想ですわ。

わたしの信じる幻想は、ただ一つ。
霊夢のいない幸福などあり得ない。
このようなやり方で、

わたしはこの生を肯定しましょう。

いくたび生き返つても、君の逝くのが哀しくて。

わたしはたいさう疲れていて、今にも昏倒しさうだけれど、それでも、

君の居ない春も夏も秋も、耐へられないのです。

世の花を全て捧げ、

清らかさも明るさも、

葉の染まり美しいのも、

雪の中で微睡む夢の中も、

君へ捧げた世の欠片であり、

その他の存在意義などは無い。

たとい気が付かれず忘れられても、
君の幸ひが此処に在りますやうに。

了

初出

「参 惨たらしい話」

2008.11.13 東方夜伽話 作品集7 「blame, flame, claim」
<http://yotogi.com/yotogi/?mode=read&key=1226584970&log=7>

「肆 おめでたい話」

2010.6.23 東方夜伽話 作品集22 「肆 お目出度い話」
<http://yotogi.com/yotogi/?mode=read&key=1277296802&log=22>

改題・改稿して収録。他は書き下ろしとなります。

博麗霊夢と幸福論

はぐれいれいむとこうふうろん

電子書籍版(四版) 2012.4.7
書籍版(初版) 2010.8.14
(コミックマーケット78)

小説

i0-0i (ぼたぼた焼)

イラスト

あとき (アトキンソン)

組版(電子書籍版)

moki (てきとーに)

発行

ぼたぼた焼

原作

東方Project (上海アリス幻楽団)

autumn_kite [at mark] yahoo.co.jp

<http://i0-0i.sakura.ne.jp/glueck/>

